

東彼杵町文化財調査報告書第2集

岡 遺 跡

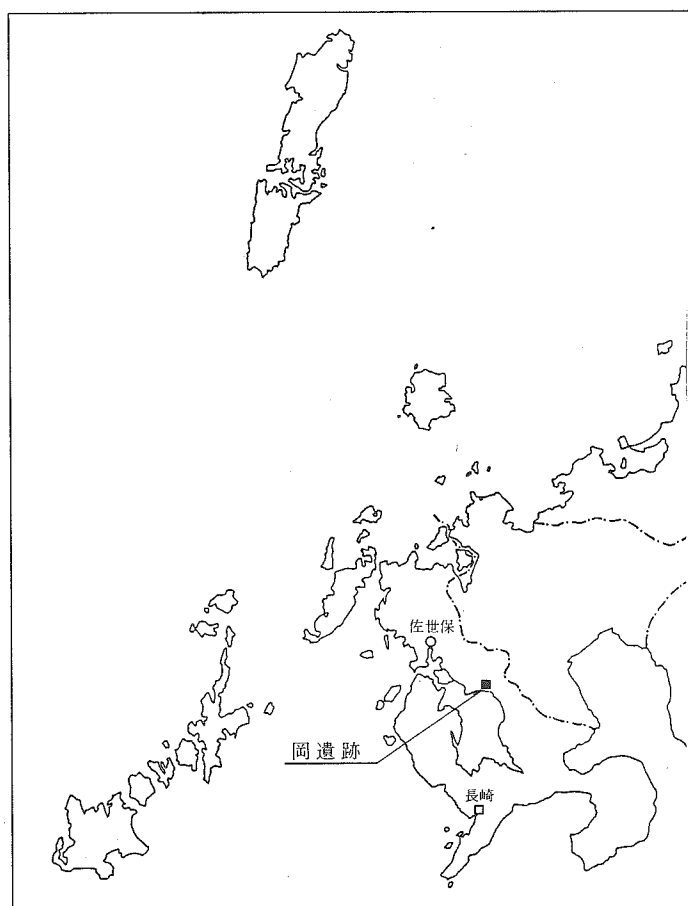
— 彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 —

1988

長崎県東彼杵町教育委員会

東彼杵町文化財調査報告書第2集

岡 遺 跡



長崎県東彼杵町教育委員会



大村湾上空南から



遺跡遠景・近景

発刊にあたって

このたび、彼杵中央地区県営圃場整備事業に伴い、蔵本郷字岡一带について埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施いたしました。ここにその岡遺跡の調査報告書を県費補助により刊行することにいたしました。

遺跡の所在する蔵本郷の岡一带は、彼杵中学校の北側にあたり、千寿寺、構、明時地区が番神山南側の丘陵に広がっている水田地帯であり、江戸時代に書かれた大村郷村記（彼杵村）によりますと「……大御堂安全寺の旧跡あり……」と伝えられているところでもあります。なおこの大安全寺の寺跡については、故田崎一郎先生（町文化財保護委員）が永年熱心に探究しておられ、貴重な資料や墓石を発見されていたことが、このたびの発掘調査のいとぐちともなりました。

そこで、この地の歴史、彼杵のルーツを解明するため、県文化課に本格的調査をお願いした次第であります。

本調査の結果、柱穴群や土師器、中世石塔、木器等が出土し、鎌倉時代から室町時代にかけての中世集落が広い範囲に存在していたことが裏づけされるとともに、古代から中世における彼杵郡ごわりの大地主として栄えたであろう幻の大寺＝大安全寺をはじめ、天正年間キリシタンの焼討ちにより焼滅した数々の寺院など中世の彼杵を窺い知る貴重な資料が得られ、すでに石塔については当教育委員会の一隅に公園を設け移転保存しております。

本報告書が今後の埋蔵文化財に対する理解と認識、更に文化財保護活用の一助になれば幸いと存じます。なお今回の調査に当り、親身になってご指導ご助言をいただきました県文化課諸先生方をはじめご協力をいただいた地元の皆様や関係者各位に対し、心より深く感謝申しあげます。

昭和63年 3月31日

東彼杵町教育長 喜々津 前 勝

調 査 関 係 者

東彼杵町教育委員会

喜々津前勝 教育長
秋月清己 教育次長
波戸口利勝 社会教育主事
開 正和 社会教育指導員
岡木徳人 事務吏員

長崎県北振興局耕地部土地改良課

長崎県教育庁文化課

安楽 勉 主任文化財保護主事 (調査担当)
川畑敏則 指導主事 ()

調 査 内 業 者

齊藤いづみ・池田光子・島谷妙子・松尾美代子・渡辺由里子・川上園子
川口歌子・宮崎美保

調 査 外 業 者

金谷秀一・田川利一・石福義雄・佐伯義春・浜田和七・山口テル・島田
孝子・海ハルノ・松山茂子・川口富美子・粒崎クラ・後瀬良子・田中イ
ワ・川崎史江・佐藤美千子・隅田喜和子・園明美・三根ナツノ・江頭ミ
ツエ・前田フジエ・横丁フクエ

例 言

1. 本書は、東彼杵町教育委員会が実施した、彼杵中央地区圃場整備事業に伴う長崎県東彼杵町蔵本郷字岡所在の、岡遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、東彼杵町教育委員会が県北振興局と委託契約を結び事業主体となり、県文化課が調査を担当した。
3. 試掘調査は昭和62年6月29日～7月14日まで、本調査は昭和62年9月7日～10月1日の間、安楽と川畑が担当した。
4. 本書の記録は2人で行い、執筆は分担し各項の文末に記したとおりである。なお調査員の他に、町文化財保護審議員満井録郎氏、町社会教育指導員開正和氏、県文化課指導主事の久原巻二氏の玉稿をいただいた。
5. 調査時の写真撮影は川畑、整理後の遺物写真は安楽による。
6. 遺物の実測は、川畑、川上園子、池田光子、渡辺由里子が行い、草野道子、吉田絵梨の協力を得た。
7. トレースは、川畑、川口歌子が行い、富田知江、稲富千絵の協力を得た。
8. 遺物、図面整理には以下の方々の手を煩した。
黒川弘子、島谷妙子、池田光子、末吉勢津子、斉藤いづみ、田中勝子、川上園子、草野道子、松尾美代子、富田知江、宮崎美保、川口歌子、渡辺由里子

本文目次

I	調査に至る経緯	1	(安楽 勉)
II	遺跡の地理的・歴史的環境		
	1 地理的環境	3	(久原卷二)
	2 町内の遺跡	6	(安楽 勉)
III	調査		
	1 調査の概要	11	()
	2 土層	13	(川畑敏則)
	3 出土遺物	15	
	(1) 中世の遺構と遺物	15	()
	(2) 中世の木器	56	(安楽 勉)
	(3) 円盤状陶磁製品について	60	(川畑敏則)
	4 岡遺跡発見の青温石製石塔	65	(開 正和)
IV	彼杵地方における中世の様相	69	(満井録郎)
V	縄文時代の遺物	77	(安楽 勉)
VI	まとめ	78	()
—付—			
	東彼杵町内の中世石塔について	80	(開 正和)

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺図	2
第2図	遺跡周辺の地質図	4
第3図	遺跡周辺の地形分類図	5
第4図	東彼杵町遺跡分布図	7
第5図	調査区域図	12
第6図	42区・54水-14区・41-1区・土層断面図	14
第7図	土師質杯・皿・石鍋の形態分類図	16
第8図	T.P. 6土層・遺構(1/40)と出土遺物(1/3)	18
第9図	T.P.10土層・遺構(1/40)と出土遺物(1/3)	19
第10図	T.P.11土層・遺構(1/40)と出土遺物(1/3)	20
第11図	その他のT.P.包含層からの出土遺物	20
第12図	T.P.包含層外からの出土遺物	20
第13図	42区8層の出土遺物(1/3)	22
第14図	54水-9・10区土層・遺構(1/100)	23
第15図	54水-9・10区4層の出土遺物(1/3)	24
第16図	54水-13区3層の出土遺物(1/3)	25
第17図	54水-14区3層の出土遺物(1/3)	26
第18図	40区土層・遺構(1/50)	28
第19図	40区2層の出土遺物(1)(1/3)	29
第20図	40区2層の出土遺物(2)(1/3)	30
第21図	40区2層の出土遺物(3)(1/3)	31
第22図	40区2層の出土遺物(4)(1/3)	32
第23図	41-1区遺構(1/150)	35
第24図	41-1区6層の出土遺物(1)(1/3)	36
第25図	41-1区6層の出土遺物(2)(1/3)	37
第26図	41-1区6層の出土遺物(3)(1/3)	38
第27図	41-1区6層の出土遺物(4)(1/3)	39
第28図	41-1区6層の出土遺物(5)(1/3)	40
第29図	本調査包含層外の出土遺物(1)(1/3)	44
第30図	本調査包含層外の出土遺物(2)(1/3)	45
第31図	地区別土器・陶磁器の出土総数(包含層)	48
第32図	地区別土器・陶磁器の組成(包含層)	49

挿 図 目 次

第33図	今福遺跡出土の土器・陶磁器の組成 (宮崎1986)	49
第34図	川井川内遺跡出土の土器・陶磁器の組成 (川畑1986)	49
第35図	輸入陶磁器碗・皿の時期別増減	50
第36図	土師質土器の器種別割合	52
第37図	土師質杯・皿の法量	53
第38図	土師質小皿・杯法量グラフ (宮崎1986)	55
第39図	林ノ辻遺跡2号土塚墓出土土器 (1/4) (秀島1983)	55
第40図	林ノ辻遺跡出土土師質土器の法量 (宮崎1987)	55
第41図	木器(1) (1/2)	57
第42図	木器(2) (1/2)	58
第43図	木器(3) (1/2)	59
第44図	円盤状陶磁製品の重さと素材の関係図	60
第45図	円盤状陶磁製品の直径と素材の関係図	60
第46図	円盤状陶磁製品(1) (1/2)	62
第47図	円盤状陶磁製品(2) (1/2)	63
第48図	円盤状陶磁製品(3) (1/2)	64
第49図	岡遺跡発見の青温石製石塔拓影	67
第50図	岡遺跡出土五輪塔地輪・拓影 (約1/4)	68
第51図	縄文時代の石器(1) (2/3)	78
第52図	縄文時代の石器(2) (1/3)	79
第53図	遺跡周辺の小字図	81
第54図	東彼杵町所在の中世石塔拓影	84
第55図	法音寺郷所在の青温石製文安の祈願塔拓影 (約1/4)	85
第56図	東彼杵町所在の中世石塔分布図	87

表 目 次

表 1	東彼杵町遺跡地名表	9
表 2	円盤状陶磁製品計測表	61
表 3	東彼杵町内所在の紀年銘中世石塔	88

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡遠景および近景
- 図版 2 調査区の土層
- 図版 3 54水-9・10区落ち込み及び40区落ち込みと集石
- 図版 4 41区北側土層と柱穴出土状況
- 図版 5 遺物出土状況
- 図版 6 遺物出土状況
- 図版 7 試掘調査における出土遺物
- 図版 8 42区 8層の54水-9・10区 6層出土遺物
- 図版 9 54水-13区 3層・14区 3層の出土遺物
- 図版10 40区 2層の出土遺物(1)
- 図版11 40区 2層の出土遺物(2)
- 図版12 41-1区 6層の出土遺物(1)
- 図版13 41-1区 6層の出土遺物(2)
- 図版14 41-1区 6層の出土遺物(3)
- 図版15 41-1区 6層と包含層外の出土遺物
- 図版16 各区出土の遺物
- 図版17 石鍋および滑石製品
- 図版18 石鍋・宝珠・砥石
- 図版19 滑石製品と金属製品
- 図版20 木 器(1)
- 図版21 木 器(2)
- 図版22 円盤状陶磁製品
- 図版23 縄文時代の石器
- 図版24 岡遺跡出土の青温石製石塔
- 図版25 東彼杵町内所在の青温石製石塔(1)
- 図版26 東彼杵町内所在の青温石製石塔(2)
- 図版27 発掘調査風景

I 調査に至る経緯

東彼杵町では昭和58年度から県営圃場整備事業として彼杵中央地区が計画され、彼杵川流域の三根郷、法音寺郷菅無田郷に及ぶ受益面積82haの工事が着工された。しかし三根郷地区には彼杵川古墳群と上杉古墳群の円墳が水田中に点在しており、昭和57年、圃場整備事業に先立って範囲確認調査が実施された。その後、町と県耕地課、県文化課の四者による協議の結果、事業の設計変更がとられ、古墳群は保護された。工事は上流域の法音寺郷地区にも進展したが、ここでも、川井川内遺跡が対象となった。先ず範囲確認調査を実施したが、結果は法音寺の名前の由来のとおり、寺院跡とみられる遺構や中世の輸入陶磁器などの遺物が出土し、本調査は設計変更のできない削平部分についてのみ実施した。

一段落したかに見えた圃場整備事業は、昭和62年～63年度の工事着工へ向けてJR彼杵駅北側の水田103haが追加採択された。この地区は水田ということもあり、県が実施した遺跡周知事業の際には空白地になっていた部分である。

しかし、地元在住の田崎一郎氏(故人)は、「大村郷村記」に記述された「彼杵山安全寺」の探究に執念を燃やされ、彼杵中学校北側に位置する水田石垣に、青温石製石塔の基礎部分が埋め込まれているのを発見された。昭和61年圃場整備事業が計画されると、町教育委員会は工事に先立って、その寺院の存在を確認する方針を出された。当時、同町内では九州横断自動車道建設の調査に伴って発掘調査を実施していたので、文化課職員が現地協議に立ち合うよう指示され現地に赴き一帯の踏査を行った。すると、驚いたことに、これまで発見の石塔部分は1基ということであったが、丹念に調べると7・8基を数え、さらに中国輸入陶磁器の青磁・白磁なども採集するに至り、寺院の存在は増々現実味を帯るものとなった。

以上のことから協議の結果、範囲確認調査を実施する必要が生じ、調査主体を東彼杵町教育委員会、発掘調査は県文化課職員2名が担当、期間は昭和62年6月29日～7月14日までの16日間行った。

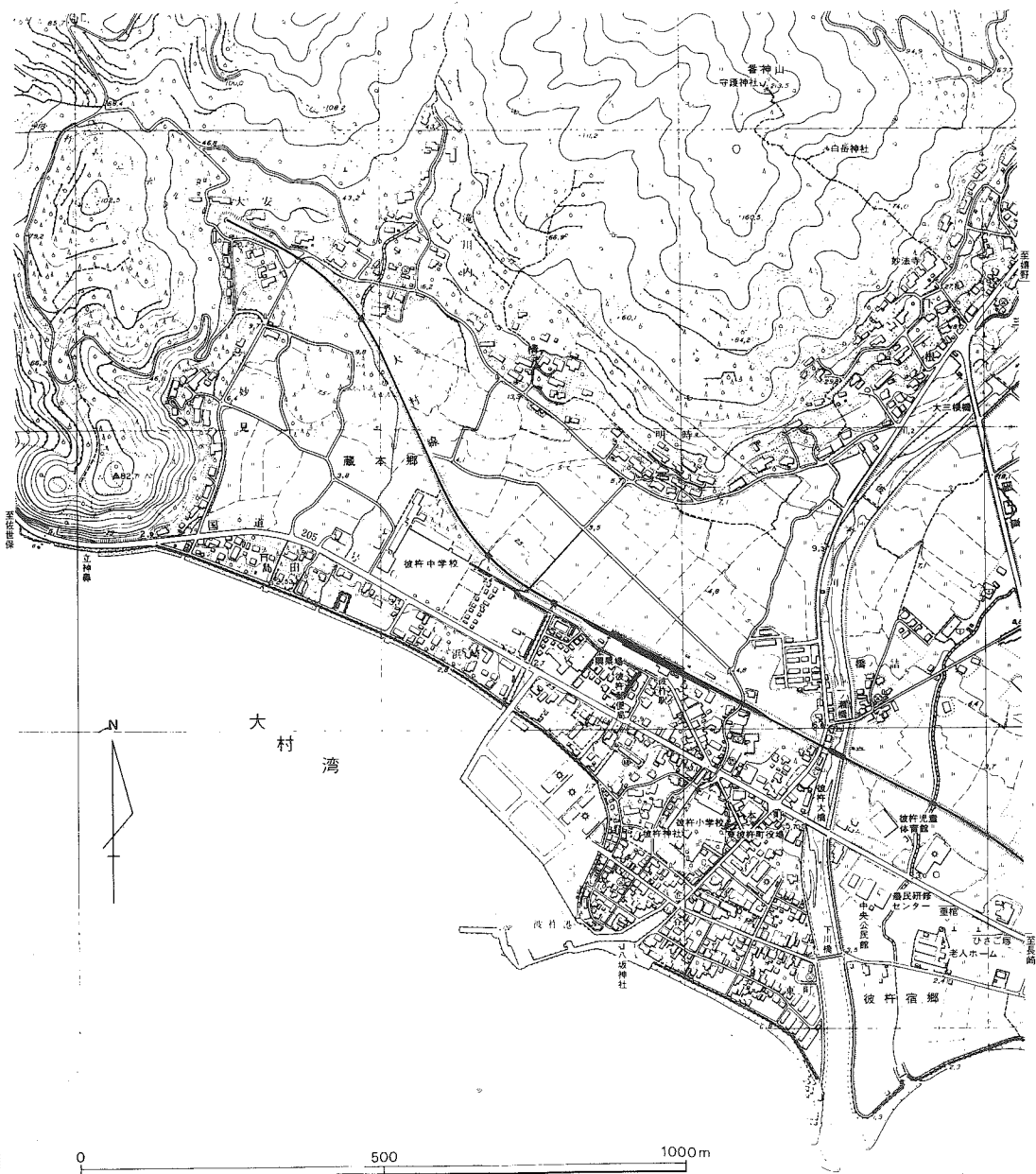
範囲確認調査は、50,000㎡の圃場整備予定地の削平地を中心に17箇所を試掘壕を設定した。その結果、No.7とNo.9の試掘壕で遺物が認められなかった他は、ほとんどの試掘壕から柱穴などの遺構や、中世の輸入陶磁器・石鍋・土師器などの出土があった。また石垣に埋め込まれた石塔も全部取り出した。その中には正平21年(1367)や慶応元年(1389)の紀年銘が刻まれたものも含まれる。

発掘調査の結果、遺跡の範囲が広いため、保護の方向で協議は進められた。協議は県耕地課と県北振興局の担当課、それに文化課、地元教育委員会の間で行われた。遺跡の立地が傾斜地であることから工事の計画変更は難行し、数回の協議の結果、ようやく一部を除き盛土で保存することになったが、この背景には、折しも九州横断自動車道の俵坂トンネル工事の入口で

地すべりによる大量の排土があったことが大きい。

本調査は、設計変更できなかった削平の避けられない一部と、54号支線排水路について実施することになった。

岡遺跡の発掘調査の経費負担の問題は農林省構造改善局長と文化庁長官の「文化財保護法の一部改正に関する覚書」の第5項に拠り農家負担分については東彼杵町で予算化、残りの分について県農林側が負担した。
(安楽)



第1図 遺跡周辺図

Ⅱ 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境 (第2・3図)

岡遺跡は、東彼杵郡東彼杵町蔵本郷字岡を中心とし、東経129度54分50秒、北緯33度2分25秒付近にある。東彼杵町の中心集落彼杵の北西方にあり、JR彼杵駅から直線で500m程である。虚空蔵山からの峰続きがいくつか枝分れして南西端に番神山があり、その南西麓の扇状地から低平地にかけて占地し、標高4~15mを測る。

東彼杵町は、大村湾の北東岸にあり、東は佐賀県嬉野町、南は大村市、北は川棚町に接している。海岸線約13kmを一長辺とする略平行四辺形の町域をもつ。総面積74.2km²、2,585世帯、人口10,424(昭和62年末)。総面積は、本土部の町では大瀬戸町(78.4km²)に次いで2番目の広さをもつ。昭和22年最高(13,813人)を示した人口は、その後減少しつつづけていたが、ここ10年増加傾向がみえている。

町内の地形は全体に山がちで、低平地に乏しい。大村市境をなす東南端の遠目山(849m)を最高とし、多良山系の山々が通減して北へつづき、彼杵川以北は虚空蔵山塊が占める。多良山系は、武留路山などの溶岩円頂丘もあるが、町内では台地状を呈し、大野原の高位溶岩台地や赤木の中位溶岩台地をつくっている。虚空蔵山系は著しく開析が進んだ火山体で、壮年期の山容を呈している。

これらの山地を刻んで流れる町内の河川は、全て西の大村湾へ注ぐ。彼杵川は、大野原に水源をもち、北西流する支流を合わせて西へ向きを変え、次第に広い河谷となる。虚空蔵山南麓から流れ出た川内川を樋口で合流させる。河口部はカスプ状の三角州となり、彼杵の集落をのせている。下流域では河道部の等高線が下に凸となり、扇状地あるいは天井川の性格を帯びていることを示し、数多い氾濫を裏付けている。彼杵川をつくった谷底平野は、町内最大の平地で、彼杵川古墳群、上杉古墳群やひきご塚などがあり、古くから開発が進んでいたことを示している。

千綿川は、遠目山北麓に発し、中流部に滝や淵の連続する竜頭泉の溪谷美をつくって夏は涼を求める人々で賑う。江の串川にも大樽滝、小樽滝があり、町内の各河川は多良山系へはい上る地点に大きな遷移点があり、深く幅狭い谷をつくっている。彼杵川などは斜格子状の河系模様を呈し、断層線の制約を反映している。

海岸線は概して平滑で、大きな半島や入江がみられない。しかし山地の先端が直接海に臨み国道やJR大村線は、海に接して走っている。

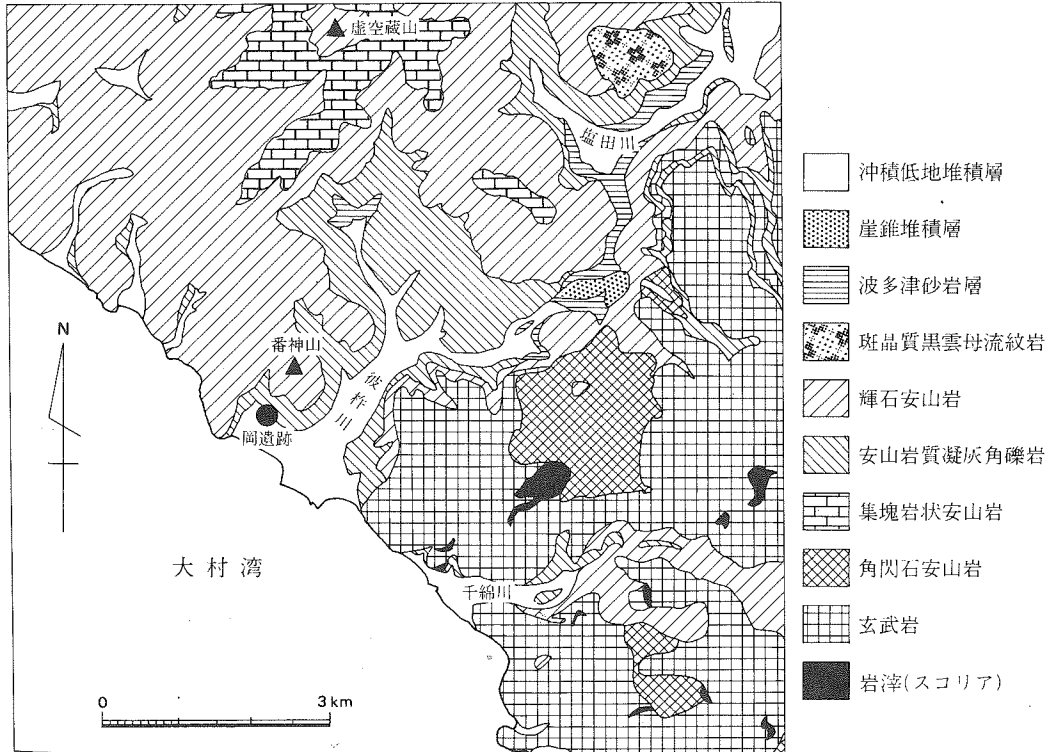
町内の就業人口をみると、第一次産業31.5%、第二次産業26.9%、第三次産業41.4%^{註1}となっており、県平均(17.3、23.3、59.3%)^{註2}と比べ、第一次産業が多く、第三次産業が少ない。第

一次産業の中心は農業で、農業人口が全体の30.3%を占める。特に県内の茶生産高の半数以上を生産し、県内一のお茶どころとして知られる。茶園の面積も県内の51.6%を占める。東彼杵町の茶は、江戸時代に導入され、多良山系の台地斜面と恵まれた気候に支えられてきている。

町内は23の行政区である郷に分けられ、集落が散在する。大音琴、彼杵、千綿宿・里のまとまった集落が2～3kmの間隔をおいて海岸沿いに並び、川口部にも当たるため内陸集落との接点ともなっている。中でも彼杵は町内最大の集落で、彼杵宿郷と蔵本郷とからなり、行政や商業等の諸機関が集中している。

県境の俵坂峠を越え彼杵川沿いに下る旧長崎街道の県内最初の宿場町が彼杵であった。本陣や脇本陣等が置かれ、商店が並んでいたという。千綿を経て松原宿へ2里半、大村へは4里半あった。北へは平戸往還が分岐していた。港へは五島を初め九州各地からの船が出入し、海路をとって時津へ渡り、長崎へ旅する人も多かった。海陸交通の要地に当り、海産物や農産物の集散地として利用された。今も鯨肉の間屋が残り、往時の面影を伝えている。国道34、205号が分岐し、九州横断道のインターチェンジが建設中で、大村湾を横断する航路も復活した。交通要衝としての恒常的地域性は、現在も失われていない。

蔵本郷は、彼杵川の河口右岸から番神山、粒崎台地麓の平地にある。東南部は彼杵宿郷とともに町中心地を形成し、北から西には明時・構・滝川内・大安・妙見や島田などの農業を主とした集落がみられる。滝川内の奥から堀切川が流れ、扇状地や低平地は水田となり、山麓には



第2図 遺跡周辺の地質図

畑やみかん園が広い。三根から明時、滝川内、大安を経て毛首峠を通る主要道が古くにあった^{註3}と言われる。そのためか千寿寺、大安寺、構平、妙見、大門、蔵本などの歴史地名が字名としてみえる。岡は、地内19の小字の中でほぼ中央部にある。

第2図に周辺の地質図を示した^{註4}。この地域の基盤をなすのは、古第三紀漸新世の杵島層群波多津砂岩層で、河底に一部がのぞく。南半部の多良山系には、安山岩類をおおった玄武岩が広く、大野原や赤木台地をつくっている。北半部の虚空蔵山系は、輝石安山岩と集塊岩状安山岩とが重なり合っている。遺跡は輝石安山岩下位の安山岩質凝灰角礫岩の縁に立地する。

第3図に周辺の地形分類図を示した^{註5}。彼杵川の中流域には、数段の河段段丘がみられ、低位面の残りがよい。谷底平野には流路の変動を示す旧流路もみられる。標高4～5m以下は三角州、海岸平野へ移行し、盛土や埋立による人工造地が加わる。

遺跡背後には、番神山、粒崎台地などの低い山波が馬蹄形に連なり、南に開く形をとる。番神山の山麓の50m以下は緩やかとなり、浅い谷の谷口には小規模な扇状地がみられる。岡遺跡ののる扇状地は、半径300m余で西南に張り出し、25m以下は極く緩やかとなって7m近くで低平地へ漸移する。この低平地を塞ぐように伸びた砂堆が帯状にあり、この微高地に彼杵の中心街がのっている。かつて箱式石棺が検出されたことがあるといい、岡遺跡が営まれたころにはすでに砂堆が形成され、遺跡前面にラグーン状の低湿地がみられたと想像される。

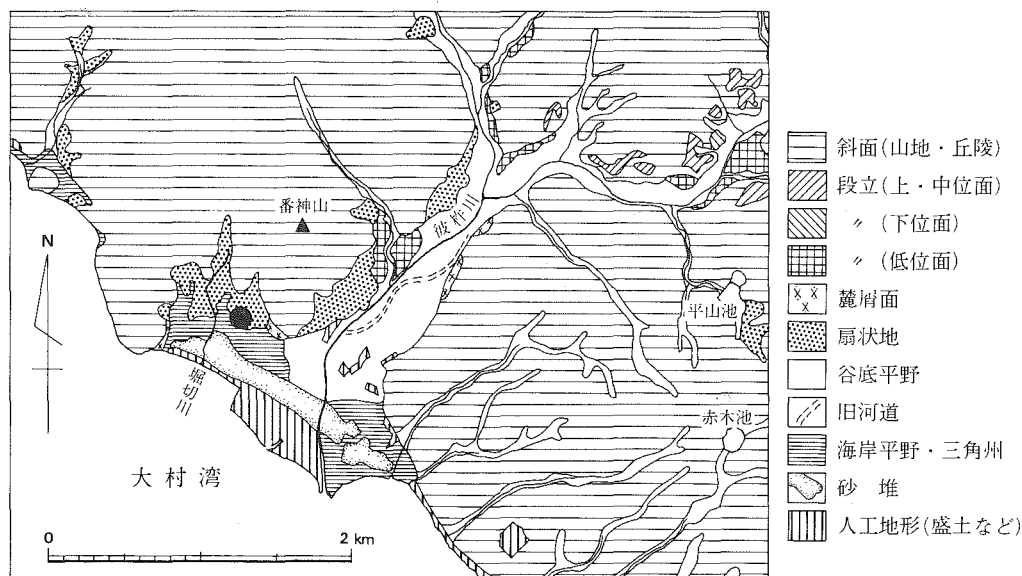
(久原)

註1 2 長崎県 (1987) 第34版長崎県統計年鑑

3 西田卯八、辻圭一 (1957) 彼杵の今昔

4 長崎県 (1975) 土地分類基本調査「早岐」

5 国土地理院 (1981) 2万5千分の1沿岸海域土地条件図「早岐」



第3図 遺跡周辺の地形分類図

2 町内の遺跡 (第4図・表1)

東彼杵町は、東を多良山系と虚空蔵山系に囲まれ、佐賀県嬉野町と境を接している。町の東南部は大野台地や赤木台地があり、この台地周辺には多くの溜池が点在し、先土器時代から縄文時代にかけての遺物が採集されている。平野部は少なく、町中央を流れる河足7kmの彼杵川と千綿狭谷を水源にもつ千綿川の両岸に平野部が開け、遺跡が点在する。

以下時代を追って遺跡の外観をしてみる。

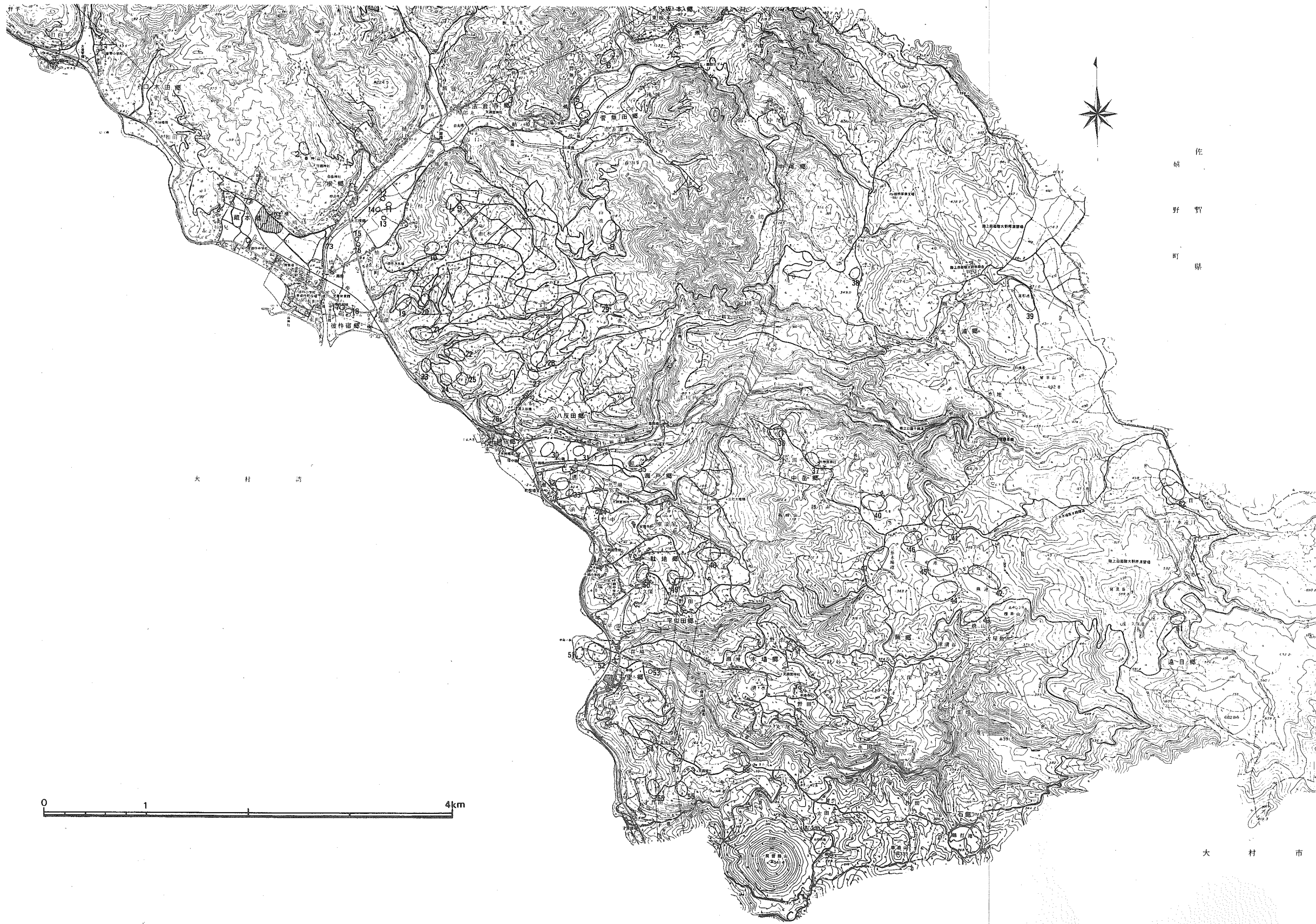
先土器時代の遺跡は、大野原演習場内にある百貫遺跡^{註1} (遠目遺跡)、中岳郷や蕪郷の標高300m付近の台地に位置する三井木場池や蕪池の周囲に点在し、黒曜石を主体とした剝片尖頭器、台形様石器、尖頭器と縄文時代の各種の石器が採集されている。さらに南側の大村市と境を接する綿打池においても細石核や、台形様石器、ナイフ形石器^{註2}採集の報告がある。

昭和60年度から実施された九州横断自動車道建設に伴う緊急発掘調査では、里郷の里遺跡^{註3} (標高112m)からは、ナイフ型石器や縄文土器などが出土している。また彼杵宿郷の松山遺跡^{註4} (標高80m)では、先土器時代の遺物と縄文時代の石鏃が多量に出土している。ここでは集石遺構も検出されている。

縄文時代の主な遺跡は九州横断自動車道建設に先立ち調査された宮田A遺跡^{註5} (標高4~5m)がある。千綿川下流の水田地帯に位置するこの遺跡は、幾度となく河川の氾濫の影響を受けているが、出土遺物は縄文晩期の組織痕や研磨土器、それに扁平打製石斧が300本以上得られている。また岡遺跡と隣接する白井川遺跡 (標高4~7m)では、同時業による工事に先立ち水路部分の調査が実施されたが、ここからは縄文晩期の土器や、扁平打製石器など多くが出土して、この時期、平野部に立地する晩期の遺跡として共通しており注目される。

弥生時代の遺跡は、先述の宮田A遺跡や白井川遺跡が複合の遺跡としてあげられるが、後者は中期から後期にかけての生活址と箱式石棺20基が検出された。箱式石棺については江ノ串の串島遺跡^{註7}からも十数基の出土があり弥生人骨も得られている。才貫田遺跡からも石棺が出土しているが、こちらの方は時代が古墳時代に属するか明らかでない。この他には、現在の東彼杵中学校前の田川製材所周辺において箱式石棺と人骨の出土が国道工事中にあったと地元の人達に語り継がれている。

古墳時代は彼杵川下流の平野に位置する県指定前方後円墳のひさご塚^{註8}に代表されるが、上流三根郷の水田中には彼杵川古墳群4基、上杉古墳群2基のいずれも小円墳が点在し、剣12本、金環銀環、轡などが出土とされるが、現存してない。構郷にも2基の円墳があったとされるが昭和30年頃の鉄道建設当時に破壊され跡方もない。この時実現された記録^{註9}によると、「円形に盛り上げた頂上に箱式石棺があり、上蓋は畳一枚位の柔かい平板石で中からは刀と思われる鉄鏃がざくざく出てきた」(要約)とあるが遺物などは現存しない。この他には彼杵宿郷にも「われごんげん」といって古墳があったことが伝えられるが、現在は盛土が削られ、丸い水田とし



第4図 東彼杵町遺跡分布図

表1 東彼杵町遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地	番号	名称	種別	時代	所在地
1	島田五輪塔群	石塔	中世	蔵本郷島田	38	太ノ原遺跡	散布地	先・縄	太ノ浦郷太ノ原
2	松岳城	山城	〃	三根郷	39	足形遺跡	〃	〃	遠目郷足形
3	川井川内遺跡	散布地	縄文	法音寺郷字川井川内	40	かのまる池遺跡	〃	〃	中岳郷かのまる池
4	菅無田B遺跡	〃	〃	菅無田郷菅無田	41	幸十遺跡	〃	縄文	〃 幸十山
5	菅無田A遺跡	〃	〃	〃 菅無田	42	蕪堤遺跡	〃	先・縄	蕪郷蕪堤
6	高吉遺跡	〃	先・縄	坂本郷高吉(こうき)	43	蕪郷遺跡	〃	〃	〃
7	重(かさね)の城	山城	中世	〃	44	倉谷遺跡	〃	縄文	〃 倉谷
8	平山池遺跡	散布地	縄文	菅無田郷平山	45	中池遺跡	〃	先・縄	中岳郷中池
9	牛ノ頭遺跡	散布地包含	〃	赤木牛ノ頭(うしのと)	46	四ツ池遺跡	〃	縄文	蕪郷大久保中岳郷四ツ池
10	赤木遺跡	散布地	〃	三根郷赤木	47	三井木場遺跡	〃	先・縄	中岳郷三井木場
11	彼杵川古墳群第4号墳	古墳	古墳	〃 上杉	48	八幡遺跡	〃	〃	駄地郷駄地
12	彼杵川古墳群第3号墳	〃	〃	〃 上杉	49	野田遺跡	〃	〃	〃
13	彼杵川古墳群第2号墳	〃	〃	〃 上杉	50	大久保遺跡	〃	〃	〃
14	彼杵川古墳群第1号墳	〃	〃	〃 上杉	51	串島古墳	古墳	古墳	里郷串の島
15	上杉古墳群1号	〃	〃	〃 上杉	52	串島遺跡・串島城	散布地	先・縄 中世	〃 串の島
16	上杉古墳群2号	〃	〃	〃 上杉	53	里郷積石塚	墳墓	平安	〃 平
17	ワレ権現塚古墳	〃	〃	彼杵宿郷古金谷	54	里遺跡	散布地	先・縄	〃
18	ひさご塚古墳	〃	〃	〃	55	千綿才貫田古墳群	古墳群	古墳	〃 才貫田
19	松山A遺跡	散布地	先・縄	彼杵宿郷松山	56	鋒ノ久保	散布地	縄文	一ツ石郷鋒ノ久保
20	松山B遺跡	〃	〃	〃 松山	57	平見高野	〃	先・縄	〃 平野高野
21	名切E遺跡	〃	縄文	彼杵宿郷名切	58	一ツ石台地遺跡	〃	縄文	〃 台地
22	名切C遺跡	〃	先・縄	〃 名切	59	太田代池遺跡	〃	〃	〃 太田代池
23	名切A遺跡	〃	〃	〃 名切	60	綿打池遺跡	〃	先・縄	〃 綿打池
24	名切B遺跡	〃	〃	〃 名切	61	久保遺跡	〃	縄文	遠目郷字下遠目久保
25	名切D遺跡	〃	〃	〃 名切	62	百貫遺跡	包蔵地	先土器	〃 大野原
26	外園遺跡	〃	縄文	千綿宿郷	63	法音寺五輪塔	石塔	中世	法音寺郷川井川内
27	平(ダイヤ)A遺跡	包蔵地	先・縄	〃 県立女子農学園	64	ちよいのどう五輪塔	〃	〃	〃 川井川内
28	平B遺跡	散布地	〃	〃 県立女子農学園	65	安全寺五輪塔	〃	〃	蔵本郷大安
29	赤木池遺跡	〃	縄文	〃 赤木池	66	牛ノ頭五輪塔	〃	〃	千綿宿郷西宿
30	宮田A遺跡	〃	〃	〃 宮田	67	清心寺五輪塔	〃	〃	瀬戸郷清心
31	宮田B遺跡	〃	〃	〃 宮田	68	江の串五輪塔	〃	〃	里郷串の島
32	小菌城	城	中世	瀬戸郷小菌	69	尼寺五輪塔	〃	〃	〃 喜場
33	瀬戸古墳	古墳	古墳	〃 瀬戸	70	辻墓五輪塔	〃	〃	〃 大迫
34	野中キリシタン墓碑	墓碑	近世	〃	71	岡遺跡	包蔵地	〃	蔵本郷字岡
35	小峰城	城跡	中世	〃	72	鳥田遺跡	散布地	〃	〃 字島田
36	赤木台地遺跡	散布地	縄文	中岳郷広間平	73	白井川遺跡	包蔵地	縄 古	〃 字白井川
37	三井木場遺跡	〃	〃	〃 三井木場					

て畦畔が残り、円墳であったことを偲ばせてくる。古墳時代の生活址はこれまで発見されていなかったが、昭和62年度の彼杵中央地区圃場整備事業に伴う白井川遺跡の調査で、古墳時代の遺物や住居址が確認され、彼杵平野におけるこの時期の解明に大きな手掛りを与えている。

歴史時代においては彼杵郡衙成立の問題が残されている。大村市黒丸、寿古を中心とする説や彼杵平野を中心とする説があるが、傍証資料に欠け推論の域を出ていない。中世になると、町内には5箇所の山城が残る。北東部に位置する重の城は標高258mの峻険な山頂に位置し、大村純忠の頃に、後藤貴明、龍造寺氏らに対する防備のために大村領に設けられている。松岳城は標高224mの大村湾を一望する位置にあり、本遺跡とも重要な関りをもっていたと考えられる山城で、戦国時代に入って、大村純忠が有馬氏に敗れ、その後領地回復のため兵を挙げ攻め落している。他には小蘭城、小峰城があるが、その消長については不明である。中世寺院の存在も無視できないものが多い。大村藩「郷村記」の彼杵項には「旧記ありといえども今は知れず」として、大安寺、^{註10}報恩寺、永林坊、妙音寺、治法寺、福伝庵、専修寺、池勝寺、千寿寺、高林坊、大門坊の11寺があげられるが、この他にも2・3の寺があったとされる。この中で本遺跡と関連付けられるのが大安寺である。また、こういった寺院跡、あるいは周辺に見受けられるのが、滑石や緑泥岩などと称される石材を利用した宝篋印塔・五輪塔が町内のあちこちに点在する。古い紀年銘を有するものに本遺跡の正平21年(1366)と、法音寺郷所在の文安祈願塔(1447)などがある。これら金石文については、大石一久氏^{註11・12}文献や巻末に付した資料を参照していただきたい。(安楽)

- 註1 鎌木義昌、間壁忠彦 「九州地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ』一先土器時代一河出書房 1965
- 2 井手寿謙 「東彼杵町及びその周辺出土の考古資料について」『長崎県考古学会会報3』 1976
- 3 長崎県教育委員会により昭和61年発掘調査
- 4 註(3)に同じ
- 5 註(3)に同じ
- 6 彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査として昭和62年度実施
- 7 津田繁二 「我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概略に就て」『長崎談叢』 第26集 1940
- 8 藤田和裕 「彼杵川流域の古墳」『川井川内遺跡』東彼杵町文化財調査報告書第1集、 1986
- 9 辻 圭一 「さまざまな足跡を尋ねて」『彼杵の今昔』東京彼杵会 1957
- 10 安楽 勉 『川井川内遺跡』東彼杵町文化財調査報告書第1集 1986
- 11 大石一久 「大村地方における中世期石造美術について」(その一)『大村史談』27号 1984
- 12 大石一久 「中世における石塔造立階層の問題について」『大村史談』29号 1986

Ⅲ 調 査

1 調査の概要 (第5図)

調査は圃場整備地区が広範に至っているため、先ず試掘調査を実施して、遺跡の範囲と土層の状況を確認することを目的とした。

試掘調査は、彼杵中学校北側の北から南へ傾斜した標高4m～13mの階段状の水田部を対象とした。試掘壕は工事計画図に基づいて削平される部分、つまり計画圃場の中で一番高い部分と排水路を中心に設定した。

全体の試掘壕(T.P.)は2m×4mを16箇所、3m×4mを1箇所、計17箇所140㎡の面積である。

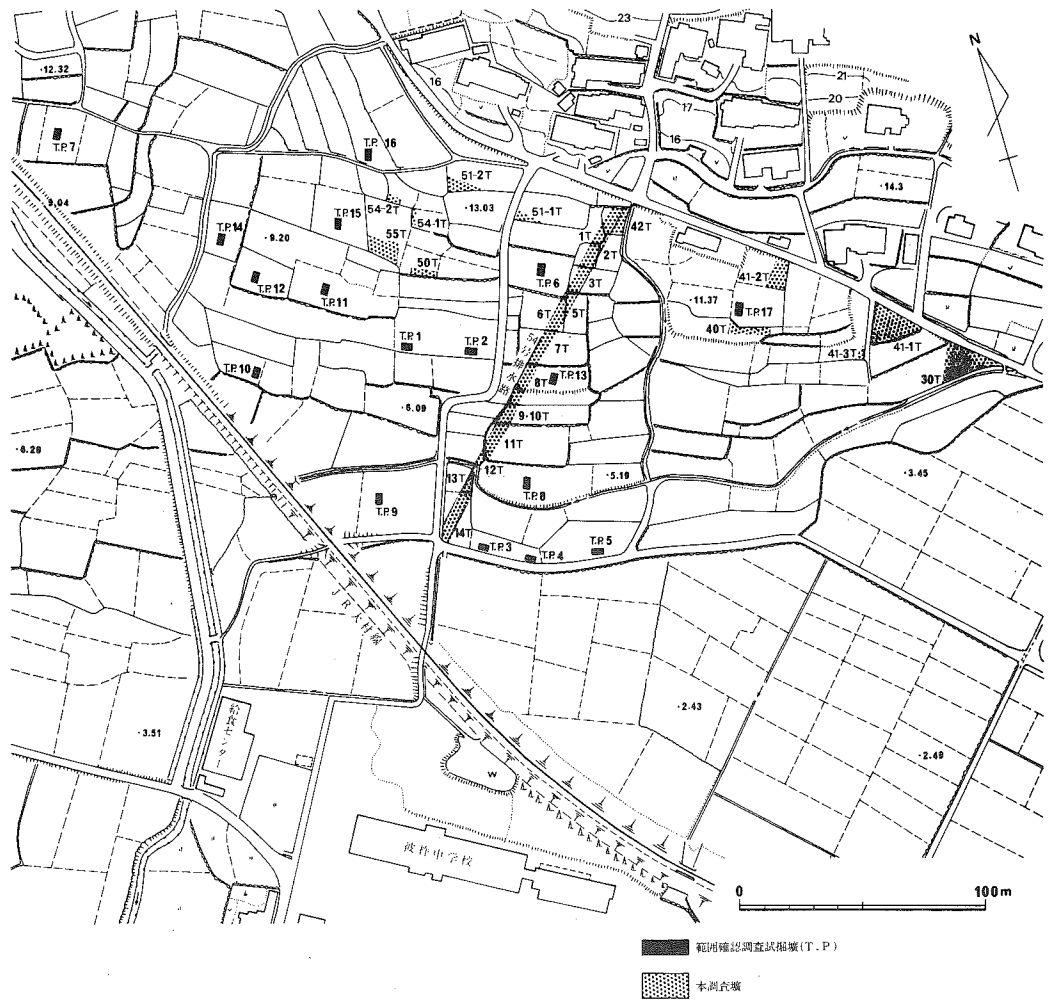
T.P.1・2を設定した水田は比較的広いが、現水田の壁から約3m内側の所に人頭大から拳大の礫を並べた配石が検出された。この遺構は近世の陶磁器片などが出土したことから、旧水田を拡張したものではないかと考えられる。T.P.3～5は石垣に埋め込まれた石塔や、畦畔にはめ込まれた、古墳の石室ではないかと思われる大石の関連性から設定したが、4層より中世の遺物や、弥生から古墳時代の遺物が混在した状況で出土した。鉄道寄りの標高約6mの水田中のT.P.10は、表土層直下の黒色土層直下から多数の柱穴や遺物が良好な状態で出土した。その他T.P.14～17では、表土層下40～50cmにおいて遺物包含層が見られた。55号支線排水路から西の小さい谷を挟んだ水田に設定したT.P.7は、各層が埋め土で、後世の造成の可能性が考えられた。

また石垣中に埋め込まれた青温石製石塔は、五輪塔部分や宝篋印塔部分など全部で10箇所を数え、正平21年(1367)や宝徳3年(1451)銘のものなどがある。石塔類は、現在町教育委員会の敷地内に移転保存した。

その後、試掘調査の結果を受けて、文化財の保護と工事の調整に関して数回の協議が持たれ削平部分を最少限にとどめることで合意された。しかし、54号支線排水路に関しては設計変更が不可避であり、全部調査することになり、両者合わせて990㎡の調査面積となった。

本調査の区域は計画圃場の一番高い部分が削平部にあたるためほとんどが不定形となる。なお、調査区の記号については圃場番号を冠し、40Tあるいは41-1Tと呼び、全面調査の排水路に対しては54水-1から14まで番号を付した。

調査の結果、ほぼ全調査区から中世の遺構・遺物が出土した。30Tでは多くの柱穴群と遺物が出土したが、中には滑石製石塔部分も含まれる。40Tでは土師器や滑石製石鍋片、瓦器などの他、拳大の礫が多く集められた溝状の遺構も検出された。54水9・10Tでは遺構の切り合い部分と、墓地ではないかと思われる遺構が確認された。さらに下方の14Tでは泥炭層が認められ、同層より木片や木器片の出土があった。その中には薄い板状のものに、墨によって書かれた



第5図 調査区域図

文字や、木製の卒塔婆状の名号札に、梵字と「南無阿彌陀佛」と書かれたものが出土した。これらのものは、時期的には鎌倉時代から室町時代にかけてと考えられる。なお削平部以外の地域は、埋め土によって保護されている。

(安楽)

2 土 層 (第6図)

本調査区の中で最も標高の高い地区と最も低い地区の標高差は約5mある。あわせて、すべての地区が水田として造成されており、土層は地区ごとに様相が異なっていた。

42区西壁

近世に行われたと考えられる水田の造成で、斜面に向って張り出していったのが解る。1層表土。1層黄褐色土。現在の水田の床土。2層灰褐色土。西壁では床土の褐色ブロックを含む。3層褐色土。しまりがなく粘性も少ない。近世の遺物を多く含む。埋土。4層黄灰褐色土。人頭大までの礫が全体に含まれる。近世の遺物も多い。埋土。5層黄褐色土。旧水田の床土。6層褐色土。しまり大。5cm大までの小礫や近世の遺物をまばらに含む。7層褐色土。やや黒味がかっている。しまり・粘性大。5cm大までの小礫を僅かに含む。8層黒褐色土。当地区では北半分のみ見られる。小児頭大の礫が多い。しまり・粘性大、中世の包含層。9層青灰色土。粘性があり、しまりも大。地山。

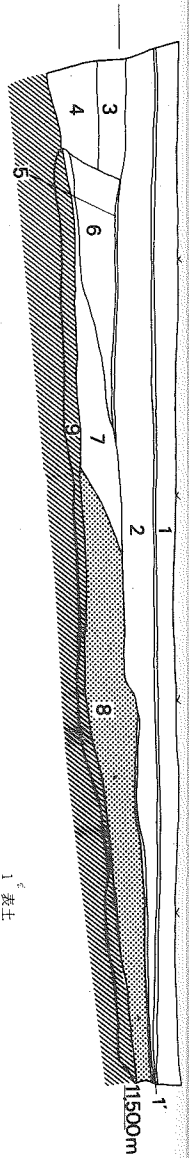
54水-14区西壁

現在は水はけが悪く湿田になっている。1層表土。1層黄褐色土。粘性・しまり大。黄色粒子、白色粒子を含む。近世の包含層。2層灰褐色土・粘性・しまり大。3層黒褐色土。粘性・しまり大。有機物が分解されずに残っており悪臭を放つ。中世の包含層。4層黄灰色粘質土。

41-1区北壁

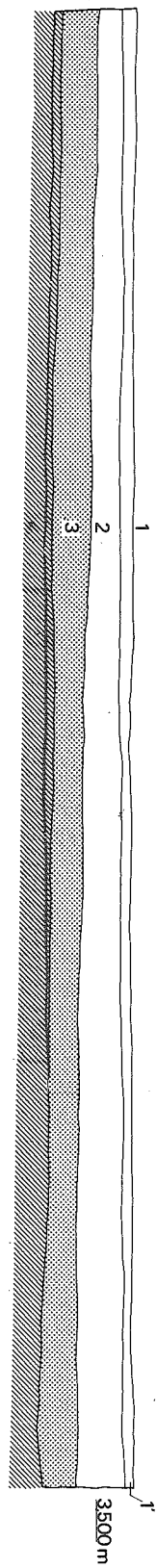
南東の方に向って地山が傾斜しており、中世の包含層も南東部に厚く堆積する。1層表土。1層赤褐色土。現在の水田の床土。2層灰褐色土。粘性・しまり大。旧水田の土。3層赤褐色土。旧水田の床土。4層黄灰褐色土。粘性・しまり大。旧水田の土。5層セクション図には表わされていないが本地区の南側で、地山の窪地に堆積した状態で最も厚い場所で50cmを測る。a. 暗赤褐色土。ガチガチに固まった土で、薄く6層の上に乗る。6層黒褐色土。拳大から一抱えあるほどの亜角礫を全体に含む(礫の間に土がある状態)。中世の遺物が数多く出土した。中世の包含層。7層明灰褐色粘質土。しまり大。黒色粒子を含む風化玄武岩から成る土。地山。

(川畑)



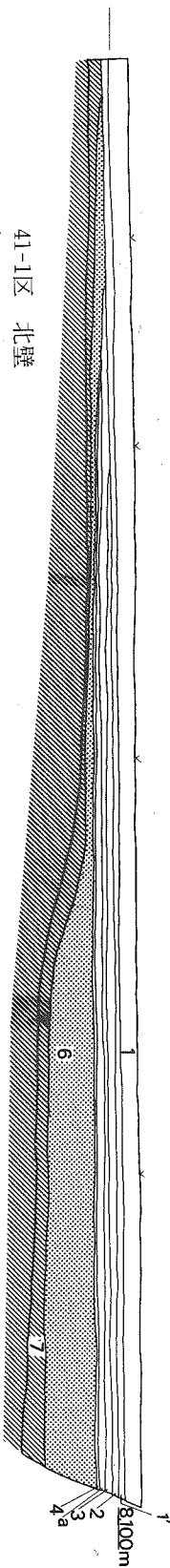
42区 西壁

- 1 表土
- 1' 黄褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 褐色土
- 4 黄灰褐色土
- 5 褐色土
- 6 褐色土
- 7 褐色土
- 8 黑褐色土(中世包含物)ドットで表示
- 9 青灰色土(地山)斜線で表示



54水-14区 西壁

- 1 表土
- 1' 黄褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 黑褐色土(中世包含物)ドットで表示
- 4 黄灰色土(地山)斜線で表示



41-1区 北壁

- 1 表土
- 1' 赤褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 黄灰褐色土
- a 暗赤褐色土
- 6 黑褐色土(中世包含物)ドットで表示
- 7 明灰褐色土(地山)斜線で表示



第6図 42区・54水-14区・41-1区・土層断面図

3 出土遺物

試掘調査と本調査で総数約10,000点余りの遺物が出土した。時代別に見ると、中世の土器、輸入陶磁器、石鍋が約5割、近世の陶磁器が約4割、他には中世のものと思われる木器、縄文時代の石器、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器、近世の円盤状陶磁製品が出土している。

また、水田の石垣に埋め込まれていた青温石製石塔類の中から、町内では最も古い紀年銘を有する石塔が発見された。

1 中世の遺構と遺物

試掘調査及び本調査において、Pit、溝状遺構を検出し、多くの中世の遺物が出土した。遺物は、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、石鍋等である。

遺構、遺物の説明にはいる前に、遺物の実測図と形態分類について若干の説明をしたい。遺物実測図は、円盤状陶磁製品、木器が $\frac{1}{2}$ 、銭が原寸、それ以外は $\frac{1}{3}$ で載せている。直線の一点鎖線、二点鎖線(=・=)は稜線を表す。フリーハンドで書いた一点鎖線(—・—)は、釉と露胎部の境や、直線にならない稜線を表す。両端に1点ずつ打ち、間をフリーハンドで記した線(・—・)は、表面に現れた粘土紐の接合痕を表す。ドットスクリーンは煤が付着している部分を表す。回転して復原できなかった遺物は断面を載せたが、表の文様、稜線、拓本等は断面の右側に、内面の文様、稜線、拓本等は断面の左側に載せた。

次いで遺物の形態分類(第7図)であるが、輸入陶磁器は、森田・横田氏による分類^{註1}、上田氏分類^{註2}、小野氏分類^{註3}をそのまま借用させていただいた。土師質杯、土師質小皿の分類は、本遺跡の包含層から出土したものを、石鍋は、森田氏分類^{註4}、木戸氏分類^{註5}に本遺跡の資料を加えて、分類を行った。土師質の杯から順に詳しく述べたい。

土師質杯 1 類 底部からほぼ直線的に口縁部に到るものを1類とし、底部と体部の境に段を持たないものを1-a類、高台状の段を持つものを1-b類とした。

土師質杯 2 類 体部がラップ状に開き、体外面にロクロの水挽き痕が、数条くっきりとつき、凹凸をなすもの。

土師質杯 3 類 底部から丸味を持って立ちあがり、器高が高いもの。

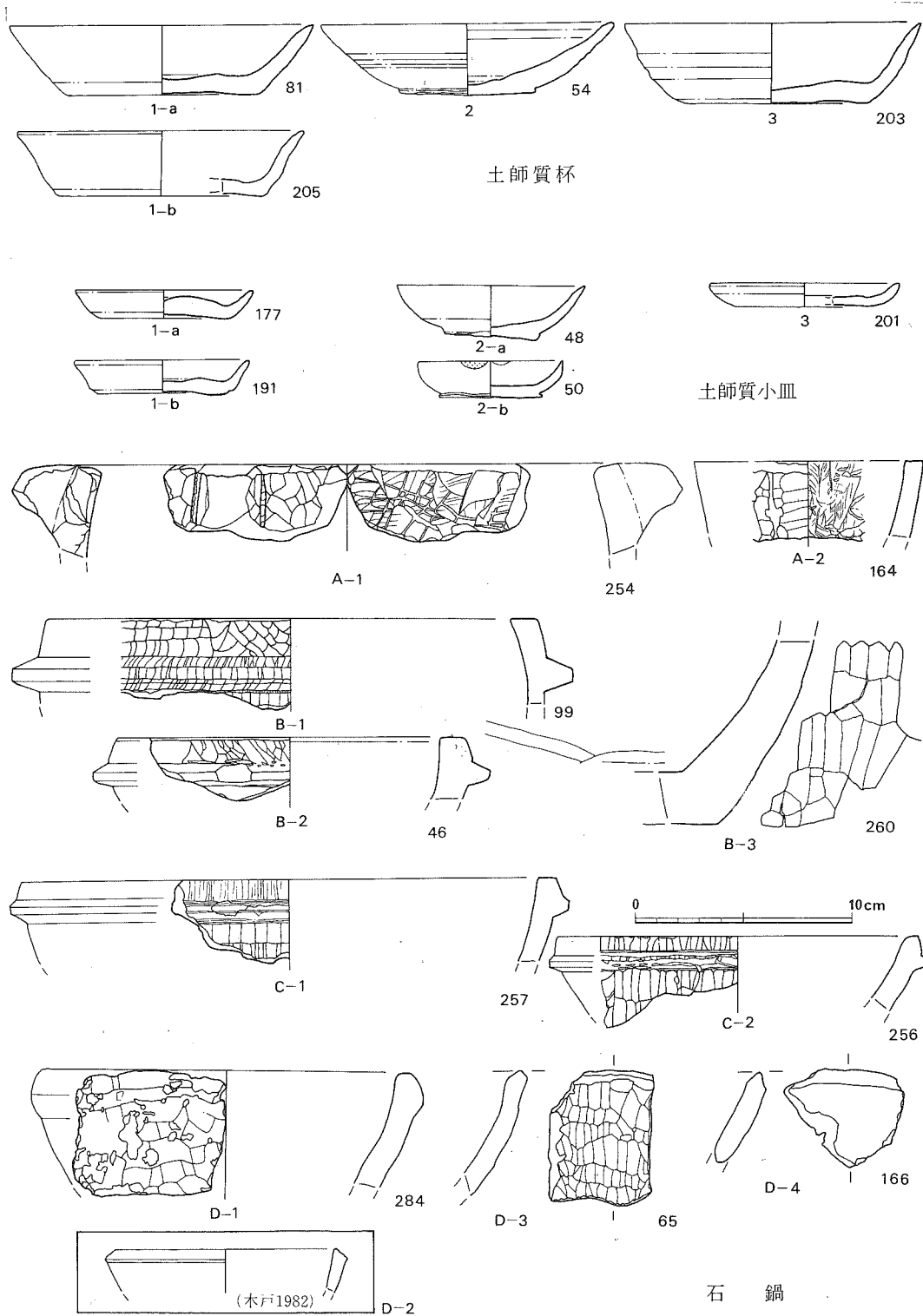
土師質小皿 1 類 底部からほぼ直線に口縁部に到るものを1類とし、底部と体部の境に段を持たないものを1-a類、高台状の段を持つものを1-b類とした。

土師質小皿 2 類 底部から内湾して口縁に至るものを2類とし、大型のものを2-a類、小型のものを2-b類とした。

土師質小皿 3 類 浅い小皿で、底部から丸く立ちあがるものをこれにあてた。

石鍋の分類は、A～C類については、森田氏の分類を借用した。

石鍋A群 方形の耳を有するもので、体部が内湾・内傾するものをA-1、体部が直線的なも



第7図 土師質杯・皿・石鍋の形態分類図

のをA-2と分類してある。

石鍋B群 鏝が付くもの。体部が内湾するものをB-1、体部が直立するものをB-2、B-1.2に比べ口径に比して底径の割合が減じ大型のものをB-3と分類してある。

石鍋C群 体部を外上方へ直線的に立ちあがらせるもので、鏝上位体部の屈曲が消え、底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以上のものをC-1、底径が口径の $\frac{1}{2}$ で、鏝の削り出しが粗いものをC-2と分類してある。

森田氏の分類はここまでで、これに続くものとして木戸氏が分類したIV類がある。木戸氏が述べるIV類の時期や形態的な特徴は、森田氏によるC群に続くものとして十分に考えられる。そこで木戸氏によるIV類の特徴を、ここではD群の共通する特徴とし、本遺跡出土の資料を加えて細分した。

石鍋D群 退化した鏝で、口縁端部から斜めに削り出すもの。口縁端部に水平部を残し、口縁に鏝がついた状態のものをD-1、木戸氏の実測図から口縁端部に僅かに水平部を残し、鏝が突帯となることで痕跡を残すものをD-2、口縁端部の水平部が、内外面から削られることによって消え、さらに突帯の出かたが小さくなるものをD-3、僅かな突帯として残っていた鏝の痕跡が消滅するものをD-4とした。

試掘調査における検出遺構と遺物

試掘調査では、T.P.6・T.P.10・T.P.11でピットを検出した。

T.P.6の土層、検出ピット、遺物（第8図）

土層は、1層表土、1'層赤褐色土（現在の田の床土）、2層黒褐色土、3層赤褐色土、4層黒褐色土（中世の包含層）、5層地山である。中世の包含層である4層は、トレンチ南壁側に見られた。

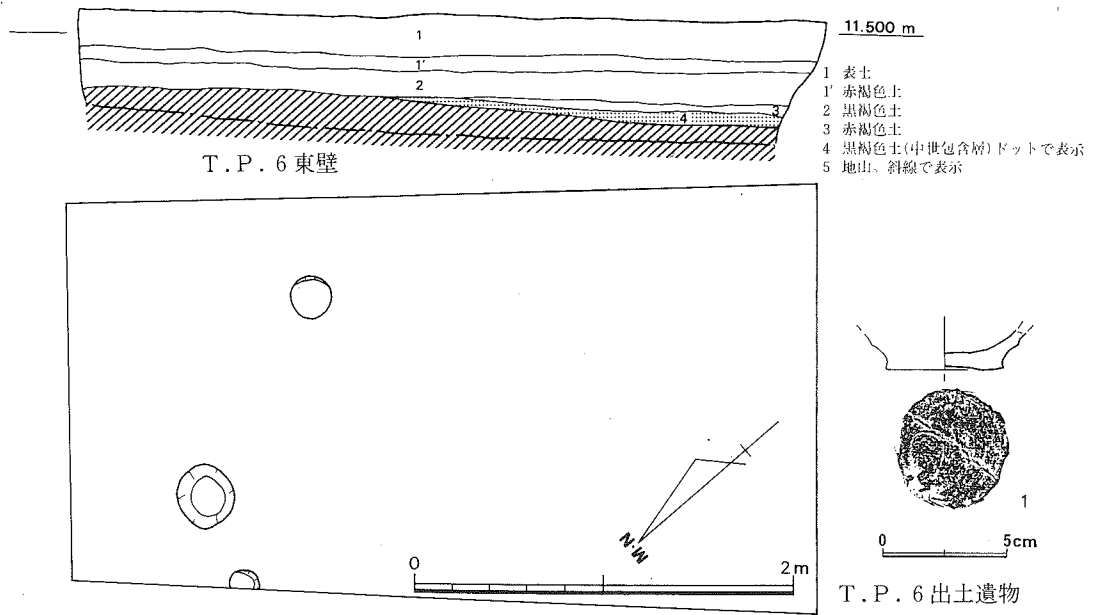
本トレンチで検出したピットは3基である。いずれも円形プランを呈し、5層地山の面で確認した。覆土は4層と同じ黒褐色土である。ピット1は深さ10cm、ピット2は深さ10cm、ピット3は深さ5cmである。

遺物は、ピット1より出土した杯底部1で、白味がかかった褐色の胎に微細な赤色粒子が全体にはいる。切り離しは回転糸切りによって行われる。ロクロ回転は時計回り。体部がラッパ状に開く形態（杯2類）と思われる。

T.P.10の土層、検出ピット、遺物（第9図）

土層は、1層表土、2層黒褐色土（中世の包含層）、3層赤褐色土（地山）である。中世の包含層である2層は、厚さ20cmで堆積状況が良好であった。

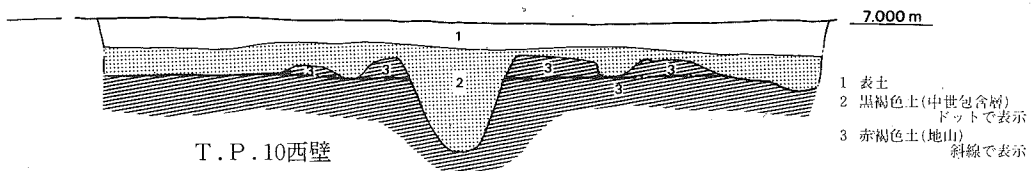
本トレンチで検出した14基のピットは、3層地山の面で確認した。ピットの覆土は、焼土粒



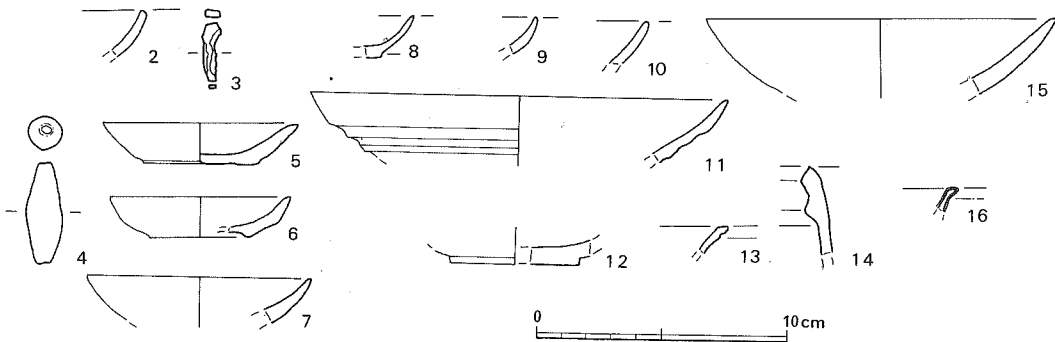
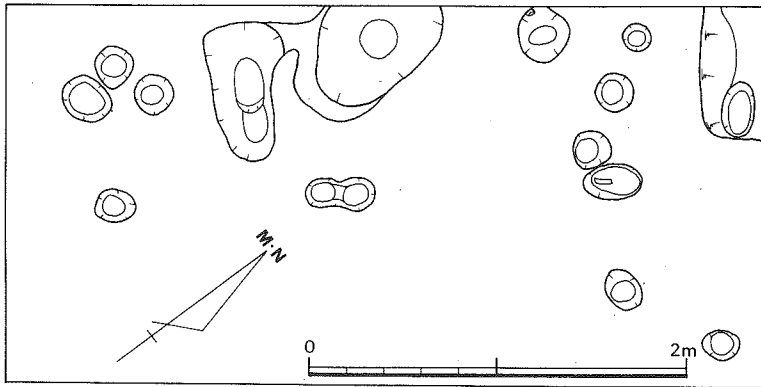
第8図 T.P. 6 土層・遺構(1/40)と出土遺物

炭化物粒を全面に含む黒褐色土で、中世包含層と同じ土である。ピットの平面形は円形が多いが、ピット3、ピット10のように重複していると思われるピットもある。

遺物はピット10 a 覆土から多く出土した。2は、ピット4 覆土から出土した土師質杯である。白味がかった褐色の胎に、金雲母が全体にはいりキラキラ光る。3~8、10~14は、ピット10 aの覆土から出土した。3は、断面が長方形の鉄釘で、上下ともに折れている。4は、長4.1cm、最大厚1.4cm、孔径3.5mmを測る紡錘形の土錘である。赤味がかった褐色をしており、焼成は良好である。5は、口径7.8cm、器高1.6cmを測る土師質の小皿である。赤味がかった褐色の胎に、微細な赤色粒子を全体に含む。時計回りのロクロ上で、回転糸切りによって切り離される。糸切り痕は、ナデによって消されており僅かに残る。小皿1-b類に属する。6は、口径7.2cm、器高1.6cmの土師質小皿である。白味を帯びた赤褐色の胎に、微細な赤色粒子や砂粒を含む。小皿2-a類に属する。7は、口径9.0cmの土師質小皿である。白味を帯びた褐色の胎で、微細な砂粒を全体に含む。小皿2-a類に属する。8は土師質小皿2-b類である。10は、土師質杯である。白味が強い褐色の胎で、微細な赤色粒子を僅かに含む。11は、口径16.8cmの土師質杯である。赤褐色の胎に、微細な赤色粒子を全面に含む。体部はラッパ状に開き、体外面にはロクロ回転による凹凸が明瞭に残る。杯2類に属する。12は、底径5cmの土師質杯底部である。白味を帯びた褐色の胎に白色粒子を含む。13は、白磁碗口縁部である。森田・横田氏分類のV類に相当する。胎は赤味を帯び軟質である。14は、中国産陶器鉢の口縁部である。内面褐色、外面灰褐色を呈する。胎には2mm大までの砂粒を多量に含む。9・15はピット10bより出土した。9は、土師質の小皿である。白味を帯びた褐色の胎に、1mm大の赤色粒子を全体に含む。15は、口径



T.P. 10西壁



第9図 T.P. 10 土層・遺構(1/40)と出土遺物

14.0cmを測る土師質の杯である。赤褐色の胎には、1mm~5mm大の赤色粒子が含まれる。体外面には煤が付着している。16は、ピット12より出土した白磁碗の口縁部である。V類に相当する。

T.P.11の土層、検出ピット、遺物 (第10図)

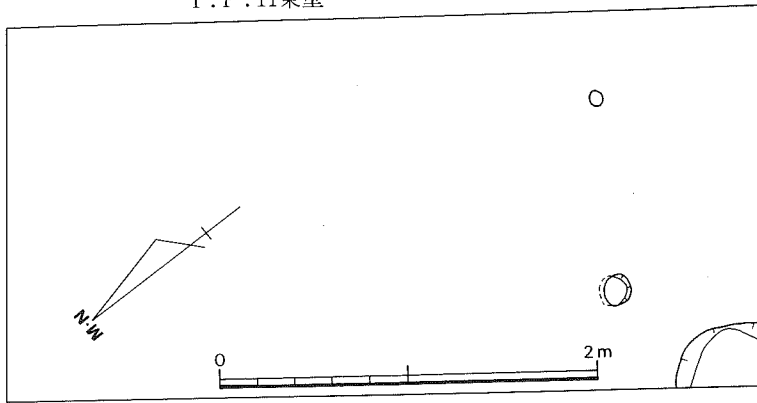
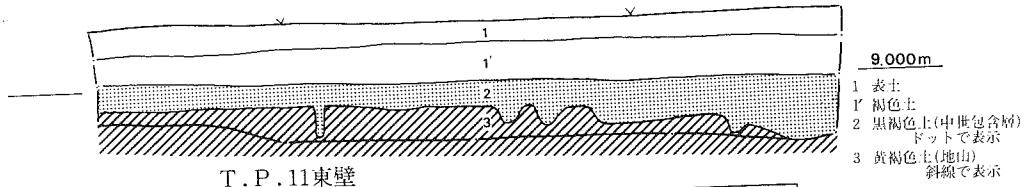
土層は1層表土、1'層褐色土(現在の田の床土)、2層黒褐色土(中世包含層)、3層黄褐色土(地山)である。中世の包含層である2層は、南へ向うほど厚く堆積する。

本トレンチで検出したピットは3基である。すべて3層地山の面で確認した。東壁セクションに見られる小さな落ち込みは、ピット1と同じ性格のものと思われる。

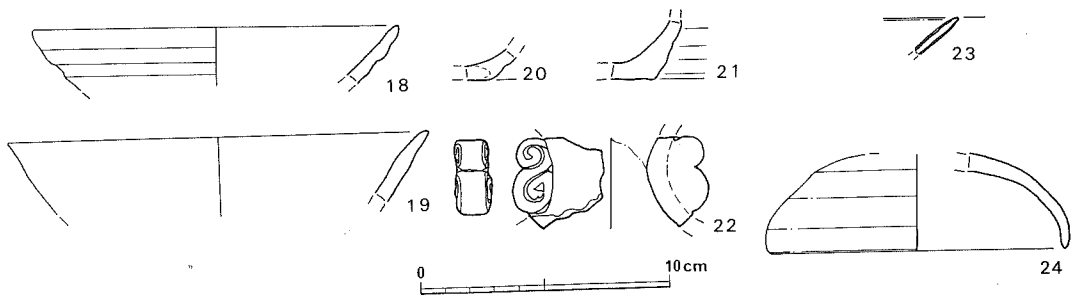
遺物は、ピット1から出土した土師質杯17がある。赤茶色の胎に、微細な砂粒を僅かに含む。口縁下で屈曲し、形態は天目碗に似る。

試掘壕の中世包含層より出土した遺物 (第11図)

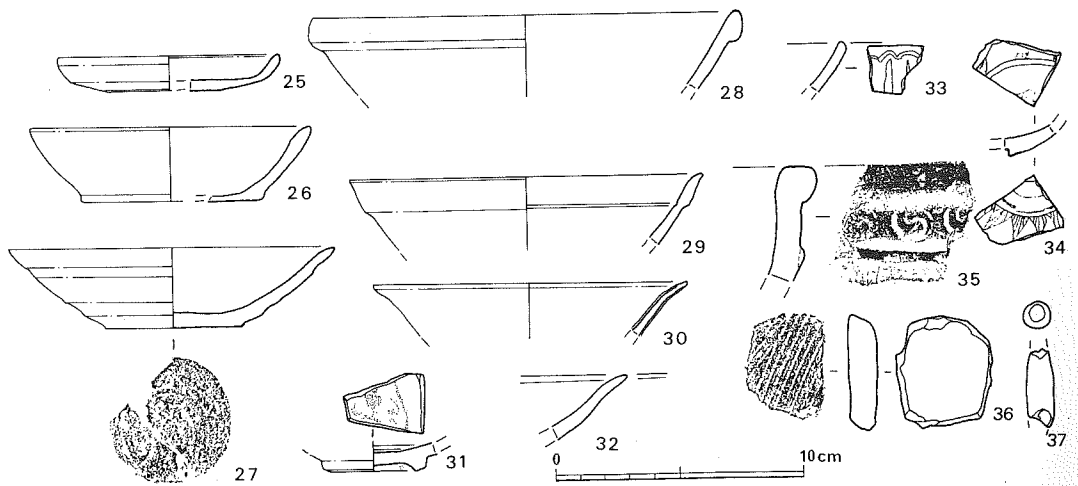
18は、口径14.6cmの土師質杯である。赤茶色の胎に、微細な赤色粒子を含む。杯2類である。



第10図 T.P. 11 土層・遺構(1/40)と出土遺物



第11図 その他のT.P. 包含層からの出土遺物



第12図 T.P. 包含層外からの出土遺物

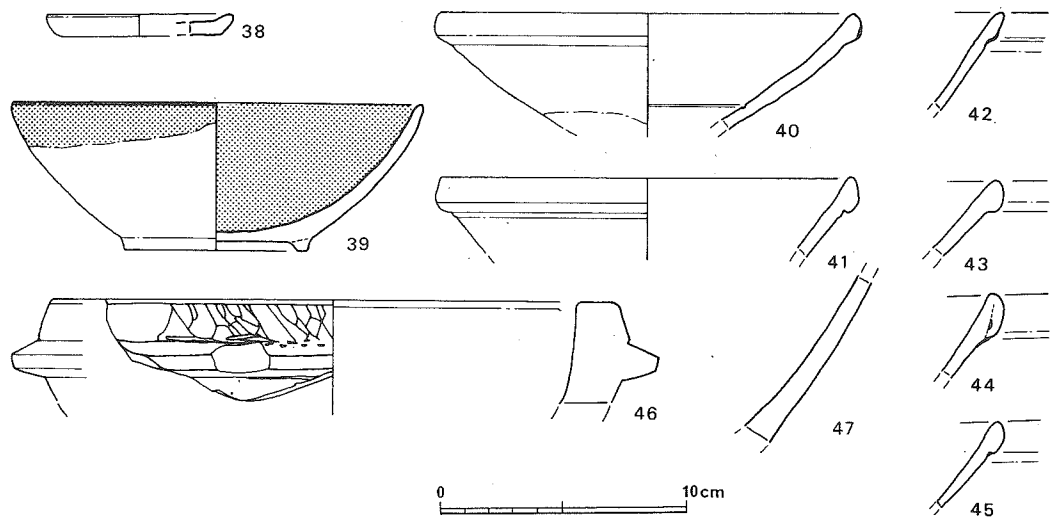
T.P.10-2層出土。19は、口径16.8cmの土師質杯である。白味がかった褐色の胎に、微細な赤色粒子を全体に含む。杯1類であろう。T.P.5-4層出土。20は、土師質杯底部である。赤味がかった褐色の胎に、微細な黒色粒子を全体に含む。断面には、底部と体部の境に粘土紐積み上げ痕が残る。杯1-a類である。T.P.5-4層出土。21は、土師質杯底部である。白味がかった褐色の胎に、微細な赤色粒子を含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転は時計回りである。杯3類である。T.P.11-2層出土。22は、青磁瓶の首部である。白色の胎に、水色を帯びた透明釉が掛かる。貼付による渦巻状の取手が一対付いていたと思われる。内面には釉掛かり部と露胎部分の境がある。T.P.7-7層出土。23は、白磁皿である。口禿げであり、Ⅸ類に相当する。T.P.4-4層出土。24は、須恵器蓋である。灰色の胎で、体外上面にはカキ目が施される。高径12.0cmである。8世紀代のものと思われる。

試掘墳の中世包含層外より出土した遺物 (第12図)

25は、土師質小皿である。口径8.8cm、器高1.4cmを測る。白っぽい褐色土に、微細な赤色粒子を含む。切り離し後外底をナデており、切り離し方法は不明。小皿3類に相当する。T.P.1-2層出土。26は、土師質杯である。口径11.1cm、器高3.0cmを測る。黒っぽい褐色の胎で、微細な砂粒を多く含むためにザラついた感じである。杯1-b類に相当する。T.P.1-2層出土。27は、口径13.0cm、器高3.2cmの土師質杯である。赤茶色の胎で、赤色粒子を全体に含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロの回転は時計回り。杯2類である。T.P.9-2層出土。28は、口径18.0cmの白磁碗Ⅳ類である。T.P.9-1層出土。29は、口径14.2cmの白磁碗Ⅴ類である。30は、口径12.6cmの白磁皿Ⅸ類である。T.P.1-2層出土。31は、高台径4.0cmの白磁皿Ⅲ類である。輪状にかき取った見込の釉には、重ね焼きの際に間に敷いたと思われる草が、灰痕となって残る。T.P.5-4層出土。32は、口禿げの白磁皿で、皿Ⅸ類に相当する。T.P.5-4層出土。33は、青磁碗である。九彫の蓮弁が施されており、上田氏分類のB類に相当する。T.P.14-3層出土。34は、染付皿である。内面は見込に2条の圏線が巡り、中央に不明文様が、体部側に丸い文様が描かれる。外面は、下半に2条の圏線が巡り、芭蕉葉文が描かれる。碁笥底で、小野氏分類の皿C-1類に相当する。T.P.2-2層出土。35は、瓦質の火鉢である。白味を帯びた胎で、微細な砂粒を多く含む。口縁は端部が水平で外へ向って肥厚し、口縁下には、幅0.5cmの突帯が巡る。口縁と突帯の間には巴文のスタンプが押され、突帯の下は下方へ向けてクシ状工具による沈線が施される。T.P.17-1層出土。36は、赤茶色の胎に茶褐色の釉がかかる播り鉢の体部を利用した円盤状陶磁製品である。長径4.4cm、重さ27.5gである。37は、白味を帯びた赤茶色の土錘である。上下を欠損している。

本調査における検出遺構と遺物

本調査では、51-1区と41-1区でピットを、40区で溝状遺構とピットを検出した。また、包含



第13図 42区 8層の出土遺物

層が残っていた地区は6箇所(42区8層、54水-9・10区4層、54水-13区3層、54水-14区3層、40区2層、41-1区6層)である。

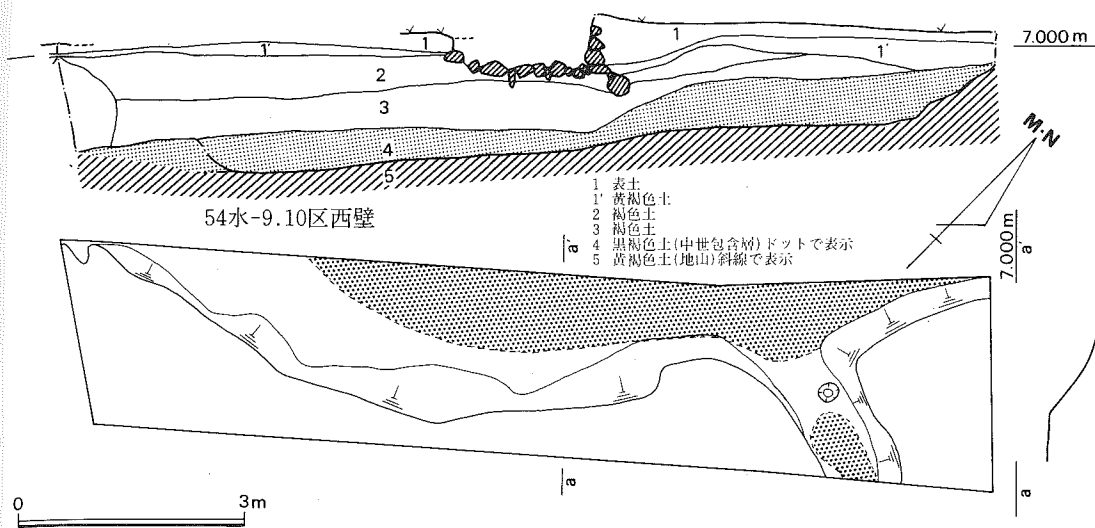
42区8層の出土遺物(第13図)

38は、口径7.3cm、器高0.9cmの土師質小皿である。白味を帯びた褐色の胎である。小皿1-a類に相当する。39は、口径16.2cm、器高5.8cmの瓦器碗である。砂粒を僅かに含む。きめの細かい胎で内面は黒色、外面は体部上半が黒色、下半は褐色がかかった灰色を呈する。高台は貼付による。40~45は、白磁碗Ⅳ類である。43は釉に光沢があり、てらてらしている。44は、玉縁の口縁を折り返しによって作った事が、切断面により観察できる。45は、口径22.4cmの石鍋である。灰白色できめの細かい滑石製で、鏝が体部上位に付く。体外面には横位の削りが施され、煤により黒変している。内面は、斜め右上方からの削り痕が僅かに残る。47は、陶器長壺の底部にかなり近い部分である。灰色で砂粒が混ざる胎は焼き締めてある。外面には回転ヘラ削りが施される。

54水-9・10区の土層、遺構、遺物(第14図、第15図)

土層は、1層表土。1層黄褐色土(現在の水田の床土)。2層褐色土。黄褐色土がまだらにはいり、粘性・しまり小。埋土。3層褐色土、拳大~人頭大の礫が集中する部分がある。4層黒褐色土。粘性・しまり大。有機物が分解されずに残っており悪臭を放つ。下部は砂質になる。中世の包含層。5層黄褐色土。風化玄武岩から成る土。地山。

遺構は、3層中に、拳大から人頭大までの集石を東から南へかけて長さ7.5m、幅1mの範囲で検出した。同じレベルで南東側には地山がすでに現れていたために、落ち込みと集石の可能性ができた。集石の範囲を記録した後、掘り下げを行ったところ、集石は3層内だけに見られ、下から中世の包含層である4層を検出した。4層の下は、地山である5層が西へ向って緩かに傾

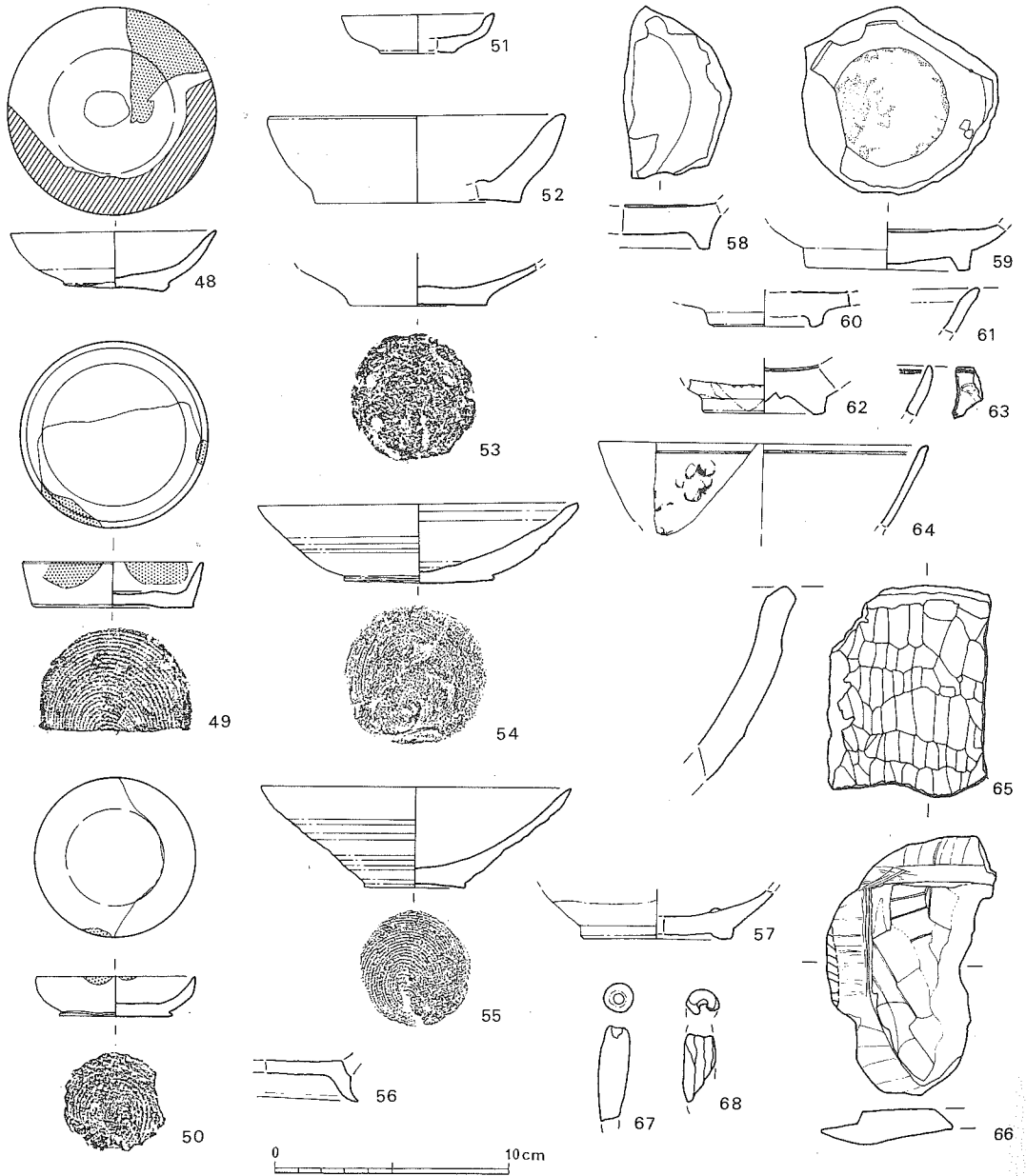


第14図 54水-9.10区 土層・遺構(1/100)

斜っていた。また、4層下部は砂質であった事から、この落ち込みは地山が西へ傾斜する端部であり、4層は地山が作る谷に堆積したものである。ただし、土師質小皿(48~50)、土師質杯(53~55)、骨片と思われる小片が4層中の南西隅から出土しており、斜面上に墓塚があった可能性もある。集石(平面図ドット部分)は調査区の西壁際に集中している事から、人為的なものであると考えられる。

48~50は土師質小皿である。48は、口径 8.6cm、器高 2.5cmを測る。赤味を帯びた褐色の胎に、微細な赤色粒子、白色粒子を多く含む。切り離しは回転糸切りによる。ロクロの回転方向は反時計回り。内面に煤の付着が見られ、廃棄された後に付着したと思われるタール状のもの(斜線で表示)が内外面ともに見られる。小皿2-a類に相当する。49は、口径 7.6cm、器高 1.9cmを測る。暗褐色の胎に、1mm大の黒色粒子を多量に含む。切り離しは時計回りのロクロ上で、回転糸切りによって行われる。内外面に煤による黒変が2箇所見られる。小皿1-b類に相当する。50は、口径 6.6cm、器高 1.7cmを測る。白味を帯びたきめの細かい褐色の胎に、1mm大の赤色粒子が混じる。底部が貼付けられたように横にとび出す。切り離しは、時計回りのロクロ上で回転糸切りによって行われる。煤による黒変が口縁部に1箇所見られる。小皿2-b類に相当する。51は、口径 6.4cm、器高 1.6cmを測る。白味を帯びた褐色のきめ細かい胎に、微細な赤色粒子がまばらに混ざる。切り離し方法不明。小皿2-b類に属する。52~56は土師質杯である。52は、口径12.6cm、器高 3.6cmを測る。赤茶色の胎に、赤色粒子を全体に含む。切り離し方法不明。杯1-b類に属する。53は、底径 5.8cmを測る。赤褐色の胎には、1mm~2mm大の赤色粒子を全体に含む。時計回りのロクロ上で、回転糸切りによって切り離される。体部の器厚が薄い、口の広がる杯2類に相当すると思われる。54は、口径13.1cm、器高 3.4cmを測る。

赤褐色できめの細かい胎には、微細な黒色粒子が全体に含まれる。体外部には水びきによる凹凸がくっきり付く。回転糸切りによる時計回りのロクロ上での切り離し。杯2類に相当する。
55は、杯2類に相当する。**56**は、白味を帯びた褐色の胎に、黒・白・赤色粒子を多く含む。外反する高台を有する。**57**~**59**は白磁碗である。**57**は、外面体部と高台との境に施された回転ヘラ削り痕が、飛鉋状を呈する。見込には焼成の際に降った破片が付く。IV類である。**58**は、見込の釉を輪状にカキ取っており、VII類に相当する。**59**は、見込の釉を輪状にカキ取っており、



第15図 54水-9・10区4層の出土遺物

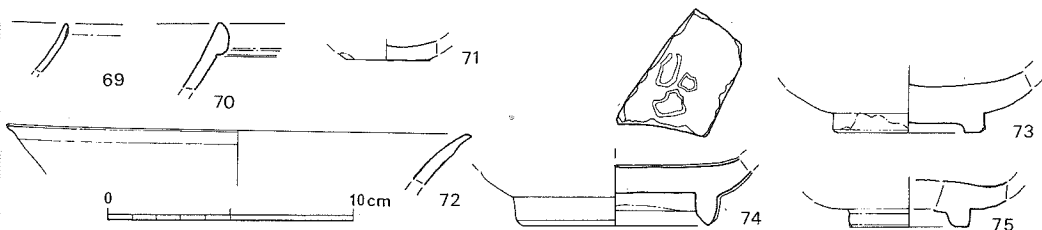
Ⅷ類に相当する。見込の釉には、重ね焼きの際に間に敷いたと思われる草が灰痕となって残る。**60**は、龍泉窯碗Ⅰ類である。**61**は、口縁が端反りになる明の白磁碗である。**62**は、底径 5.2cm を測る同安窯青磁碗Ⅰ-1類である。体外面に僅かにクシ目が残る。**63・64**は明の染付である。**63**は、明の染付皿である。ざっくりした感じの胎で、釉は黄味を帯びている。体外面口縁に巡る 1 条の圈線の下に文様が描かれる。内面口縁には、1 条の圈線が巡る。C 群か。**64**は、口径 13.8 cm を測る上質の明の染付碗である。釉はてらてらと光沢があり、小さな気泡をたくさん含む。口縁内外面に 1 条の圈線が巡り、体外面には草花文と思われる文様が描かれる。呉須の発色が大変美しく、深い海の色を思わせる。**65**は、口縁部が外側へ向って稜を持って広がる石鍋である。外面は煤によって黒変している。D-3 である。**66**は、石鍋片を利用したもので、周囲を花卉状に整えている。用途不明。**67・68**は土錘である。**67**は、白味がかった褐色の胎で、下端が欠損している。焼成良好。**68**は、赤褐色の胎である。

54水-13区 3層の出土遺物 (第16図)

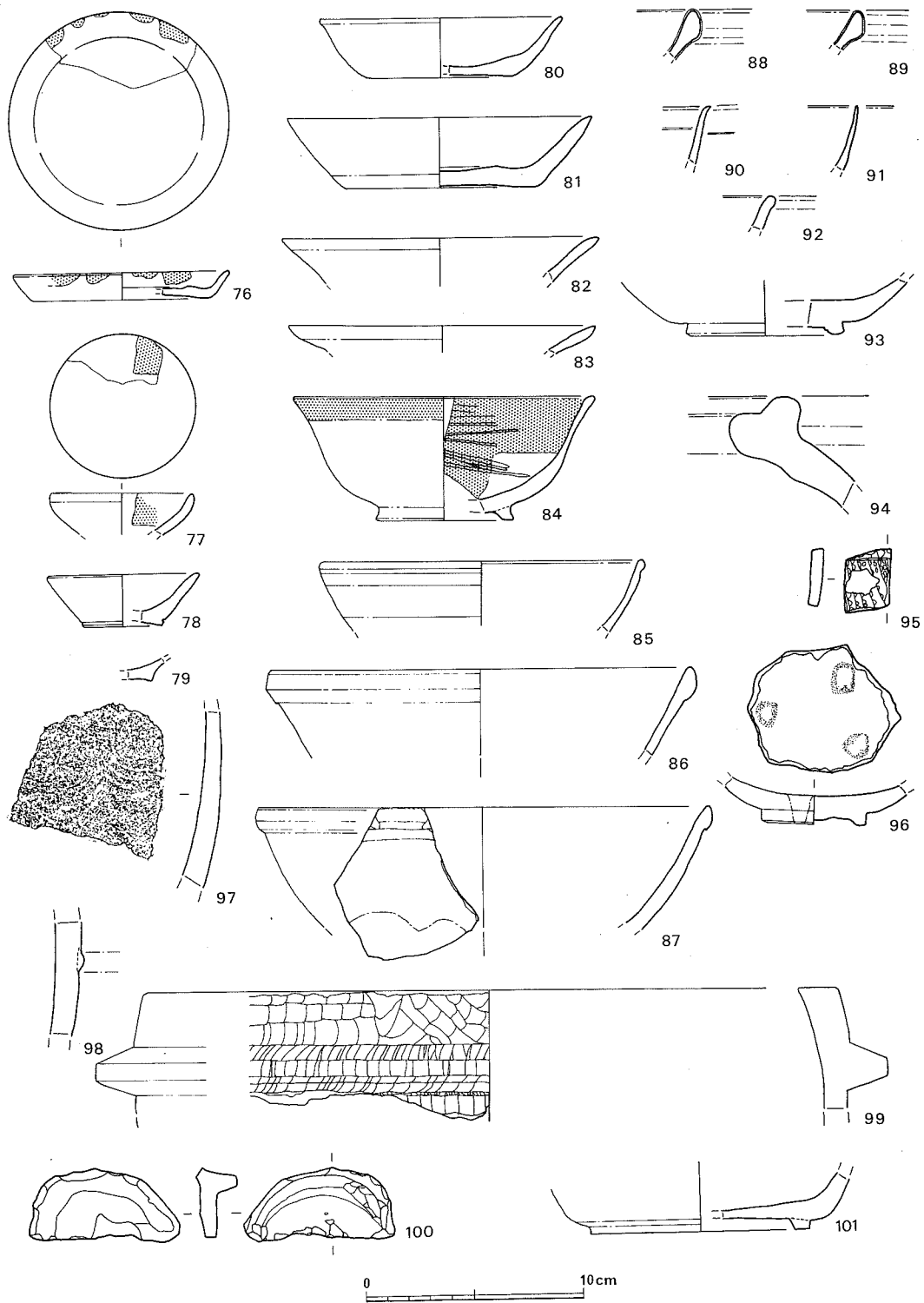
69・70・72は白磁碗である。**69**はⅧ類。**70**はⅣ類。**72**はⅤ類に相当し、口径 18.6cm を測る。**71**は、底径 3.4cm の白磁碗である。形態はⅥ類であるが、釉が底部近くまでかかる点で疑問が残る。**73~75**は龍泉窯系の青磁碗である。**73**は、底径 6.0cm で見込に文字と思われるスタンプが押されているが明瞭でない。Ⅰ-4類に相当すると思われる。**74**は、底径 7.4cm で見込に線彫りの花文と思われる文様が描かれるが明瞭でない。Ⅰ-5類に相当すると思われる。**75**は、Ⅰ-1類に相当する。底径は 4.8cm を測る。

54水-14区 3層の出土遺物 (第17図)

76~79は土師質小皿である。**76**は、口径 10.0cm、器高 1.2cm を測る。赤褐色の胎に微細な赤色粒子を僅かに含む。回転糸切りで切り離され、ロクロの回転は時計回りである。口縁部に 5 箇所の黒変部分がある。小皿 1-a 類に属する。**77**は、口径 6.4cm で、白味がかった褐色の胎に 1mm 大の赤色粒子を多く含む。内面に黒変部分が 1 箇所ある。小皿 2-b 類であろう。**78**は、口径 7.0cm、器高 2.4cm を測る。外面は赤褐色、内面は白味がかった褐色である。胎には微細な赤色粒子や白色粒子を僅かに含む。回転糸切りで切り離され、ロクロの回転は時計回り。体部は直線的であるが、小皿 2-b 類とした。体部と底部の境に 1 条の沈線が巡る。**79**は、きめの細かい白味を帯びた褐色の胎に、微細な黒色粒子を全体に含む。小皿 2-a 類であろう。**80~83**は土師質杯である。**80**は、白味を帯びてざらついた胎で、口径 11.1cm、器高 2.7cm を測る。杯 1-a 類である。**81**は、口径 16.0cm、器高 3.2cm を測る。白味を帯びた赤褐色の胎に、1mm 大の赤



第16図 54水-13区 3層の出土遺物



第17図 54水-14区3層の出土遺物

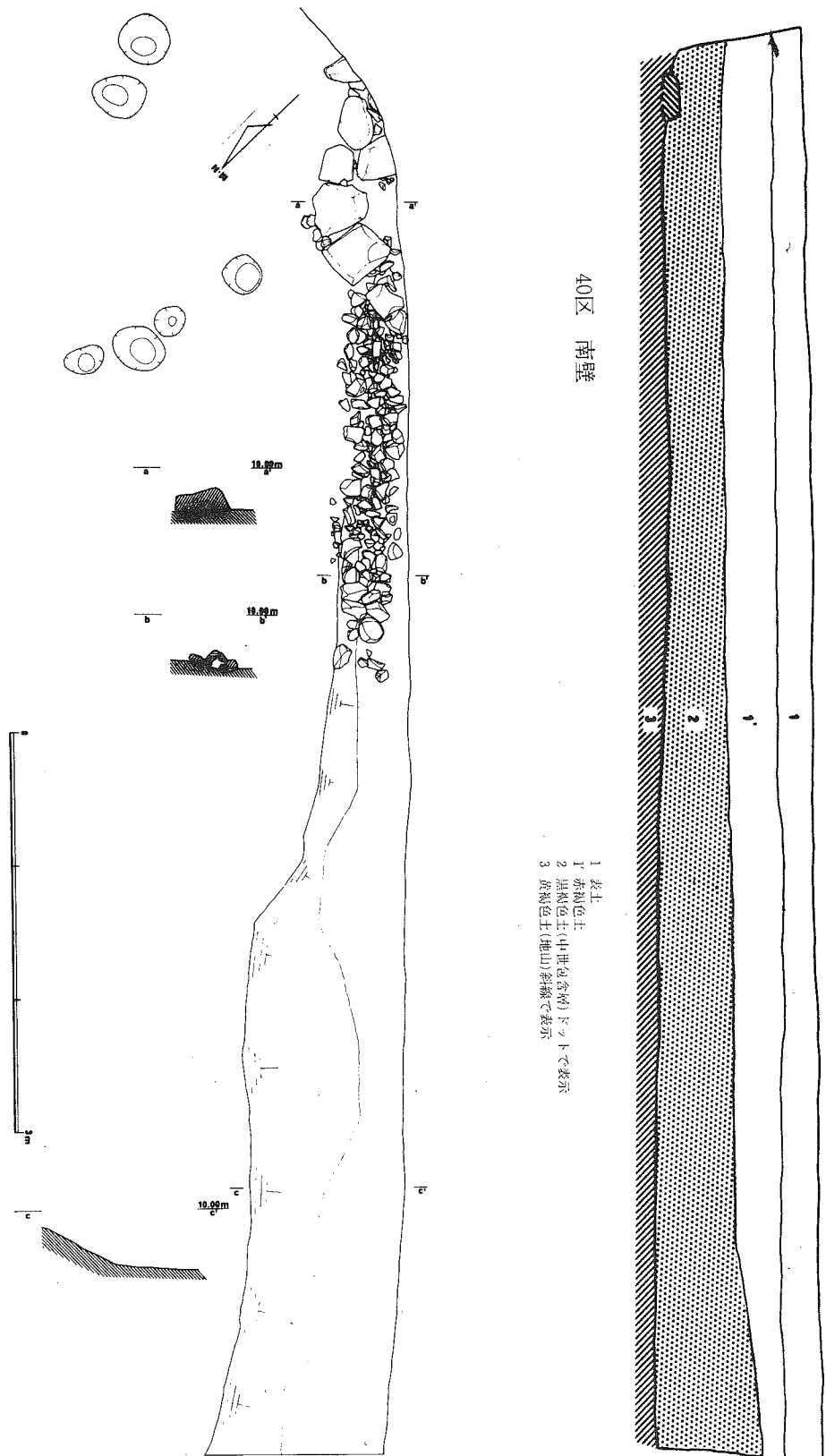
色粒子を多く含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転方向は時計回りである。杯1-a類である。82は、杯2類で口径14.0cmを測る。白味を帯びた胎に黒・白・赤色の粒子を多量に含むために、ザラツとした感じである。83は、杯2類で口径14.0cmを測る。緻密な白味を帯びた褐色の胎に、1mm大の赤色粒子を全体に含む。84は、口径13.8cm、器高5.6cm、高台径6.3cmの瓦器碗である。砂粒をほとんど含まない灰白色の胎で、外体口縁部と内面のほとんどが黒変している。高台は貼付による。内面は、幅1mm～3mmの横位のヘラ磨きが見られるが、磨滅のために部分的にしか残っていない。85～91は白磁碗である。85は、小さな玉縁で、Ⅱ類に相当する。口径13.8cm。86は、Ⅳ類に相当し、口径19.2cmである。87は、Ⅲ類に相当する。口径20.6cm。88・89はⅣ類に相当する。90はⅤ類、91はⅧ類に相当する。共に口縁下に1条の沈線が巡る。92・93は龍泉窯系の青磁碗である。92は、口縁が外反するD類。93は、底径7.3cmで、灰色の釉が畳付まで掛かるⅠ類である。94は、輸入陶器Y字口縁壺である。灰色の胎は粗く、白い砂粒を多く含む。内外面ともに茶色の釉がかかるが溶けきっていない。内面胴部には、あて具痕が残るが明瞭でない。95・96は朝鮮産の磁器である。95は、三島手の瓶である。灰色の胎に艶のない透明釉がかかる。96は、李朝の白磁で底径4.8cmを測る。ざっくりした灰白色の胎に、小気泡が全面にあるザラついた白色の釉が、外体部下半を除きかかる。見込には3つの目痕が残る。97は、砂粒を多く含む荒い胎で内面に同心円のあて具痕が残る。甕か壺の胴部である。中国製の可能性もある。98は、瓦質火鉢である。白味を帯びた褐色の胎に砂粒を多く含む。粘土紐貼付による隆帯が1条巡る。99は、口径31.4cmを測る。B-1に属する石鍋である。灰白色の滑石を使用しており、外面は煤でまっ黒である。外体面には横位の削りが施される。100は、Ⅷ類の白磁碗を利用した円盤状磁器製品である。磨滅が、打ち欠きの部分にまで及んでいる事から、メンコとして利用された後にローリングを受けていると思われる。101は、貼付高台を有する須恵器杯である。中世の遺物でなく、奈良時代の遺物である。底径10.0cm。

40区2層の土層、遺構、遺物（第18図、第19図～22図）

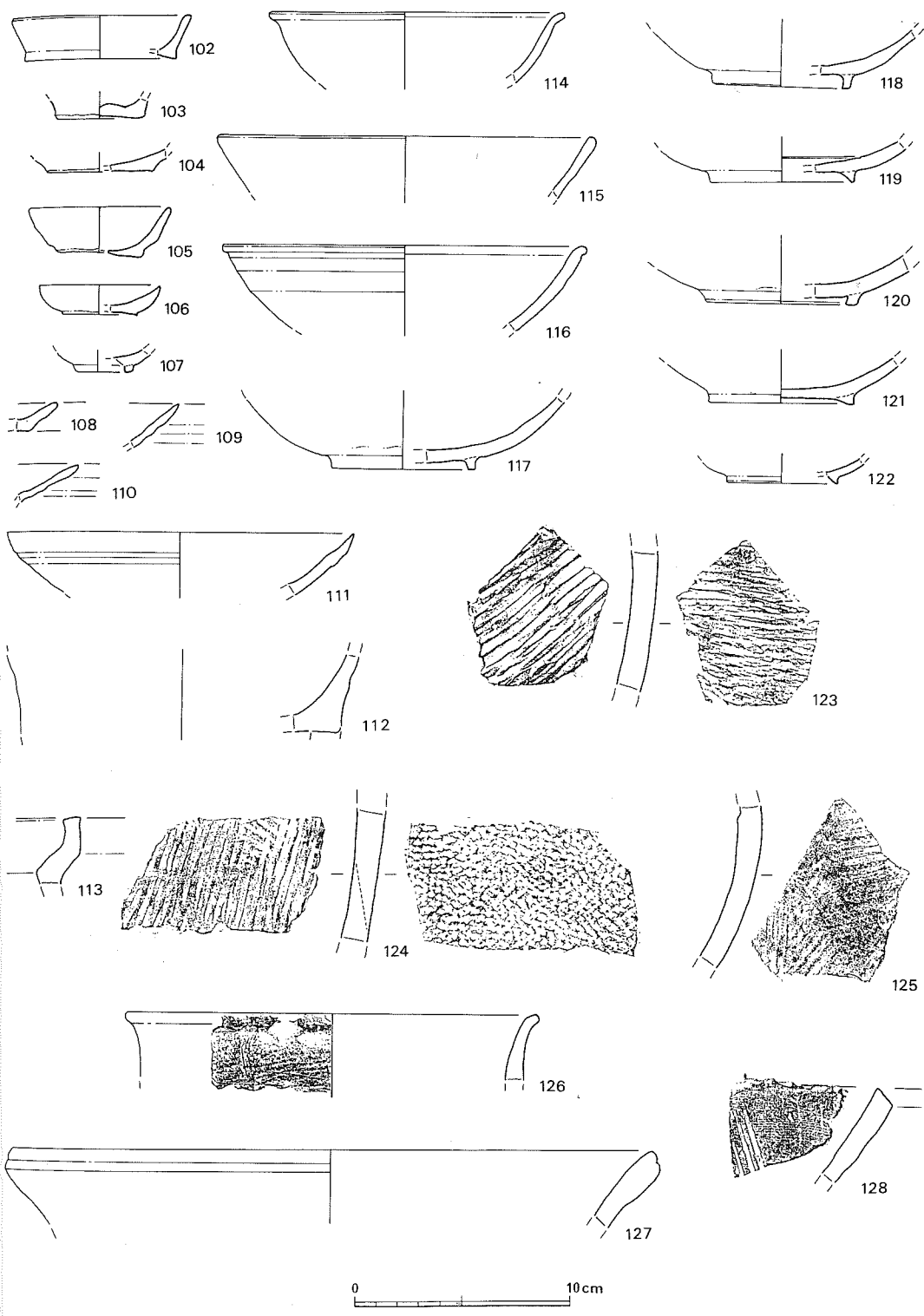
土層は1層表土、1層赤褐色土（現在の田の床土）、2層黒褐色土（中世の包含層）、3層黄褐色土（地山）である。1層と2層の間には、0.5cmの厚さで暗赤褐色のガチガチした土がはいる。

遺構は、本地区の南壁際に、東西11mの範囲で浅い落ち込みと集石から成っている。この落ち込みは西壁で最も深く40cmあるが、東へ向うにつれ浅くなり7m東へ向った地点でほぼ平らになる。さらに、6m付近から拳大の石が現われ始め、東壁際には40cm大の石が並ぶ。調査区の南壁が畦であり、この落ち込みが再び立ち上がって溝状のものになるのかどうか確認できなかった。しかし、東へ向うにつれて浅くなる事から、溝の機能は持ってなかったと考えられる。また、東半分の集石についても性格は確認できなかった、集石の北側には、ピットを6基検出した。

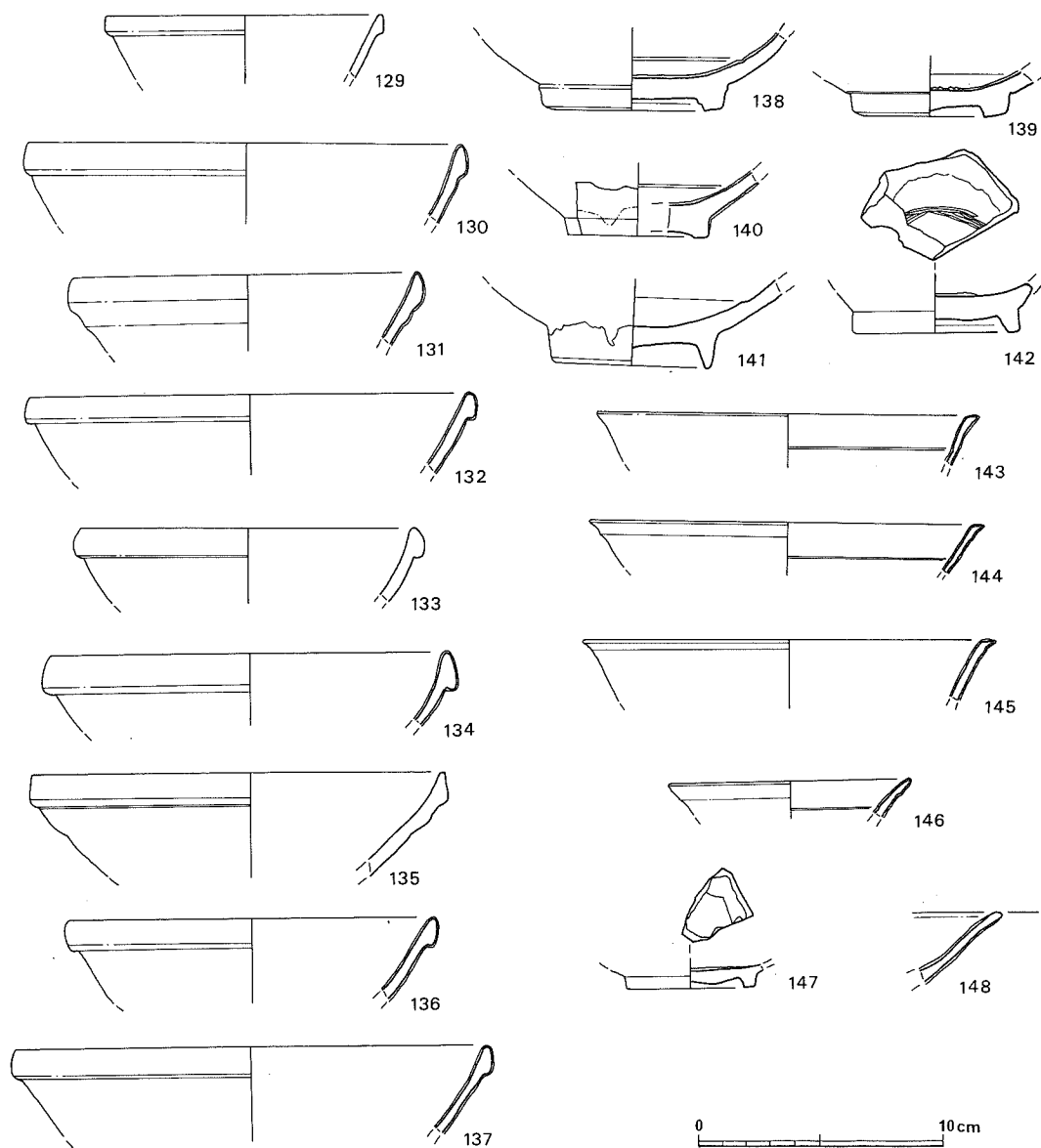
遺物は包含層からおおよそ2000点出土し、発掘区の中では最も多い。102～106は土師質小皿で



第18図 40区土層・遺構 (1/50)

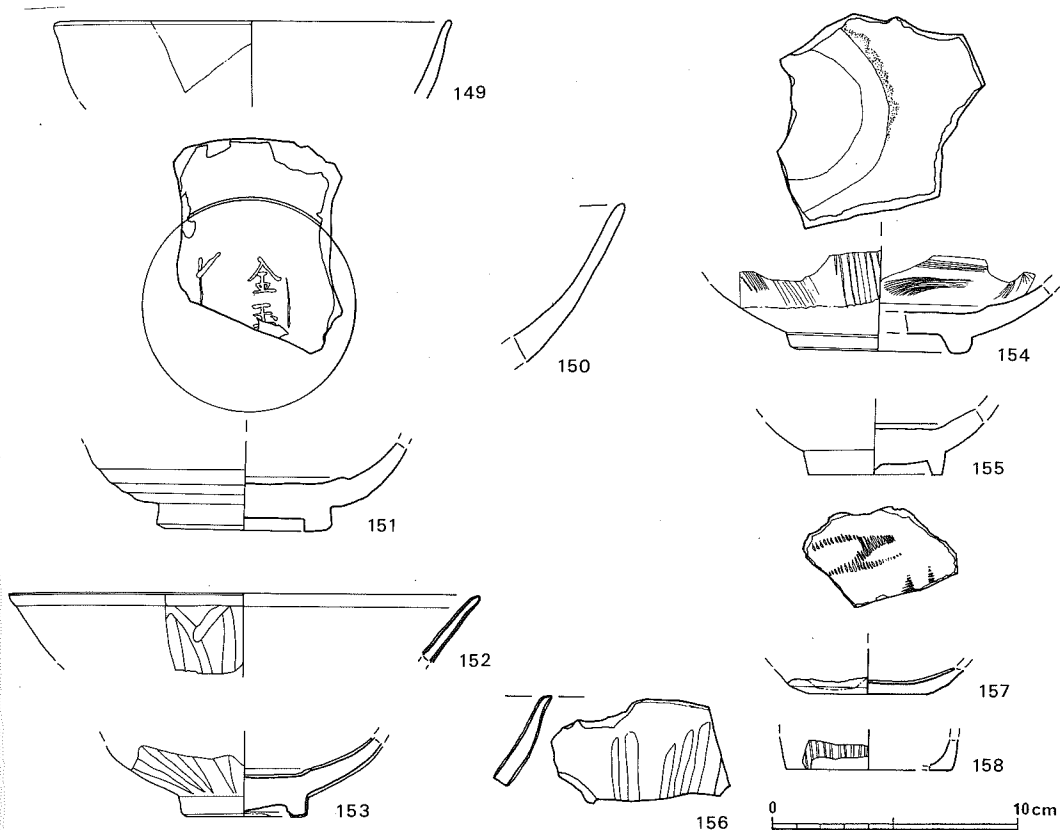


第19図 40区2層の出土遺物(1)



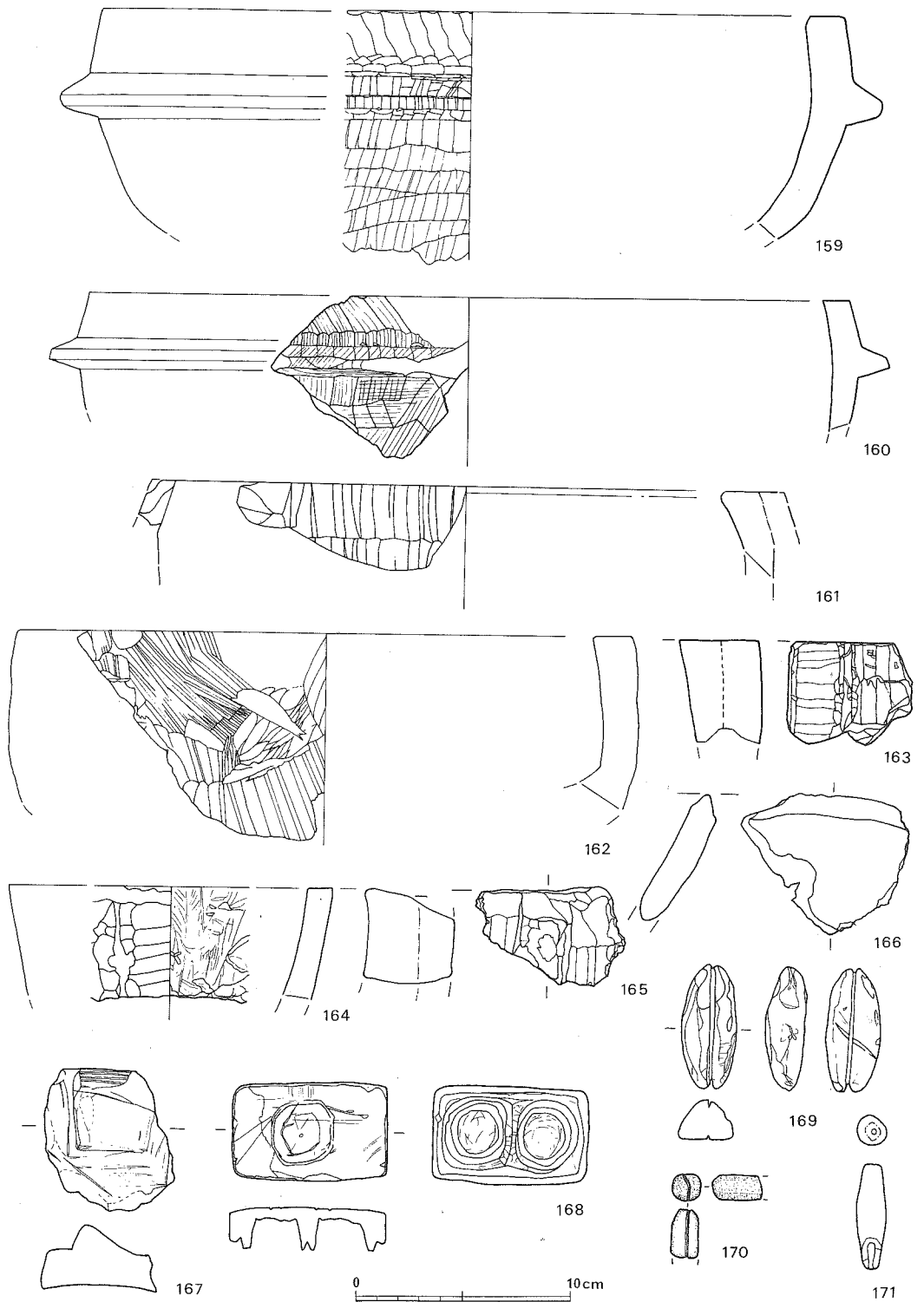
第20図 40区2層の出土遺物(2)

ある。102は、口径8.0cm、器高2.0cmで白味を帯びた褐色の胎に微細な金雲母を多く含む。小皿1-b類である。103は、小皿1-b類で底径4.0cmを測る。赤褐色の胎に微細な赤色粒子をまばらに含む。切り離しは回転糸切りによるが、ロクロの回転方向は不明。104は、赤茶色の胎で砂粒を多く含む。焼成は良好で内湾しながら立ち上がる2-a類である。底径4.8cm。105は、口径6.4cm、器高2.3cmを測り、白味が強い褐色の胎に砂粒を多く含む。完形品で小皿2-a類



第21図 40区2層の出土遺物(3)

に属する。底部中央が極端に薄く、使用中に底が抜けたものと思われる。穴の径は 0.6cm。切り離しは静止糸切りによる。106は、口径 5.5cm、器高 1.3cmを測る。赤褐色の胎に 1mm大の赤色粒子が多く混じる。小皿 2-b 類に属する。切り離しは回転糸切りで、ロクロの回転は時計回りである。切り離し後、糸切り痕を消している。胎も緻密であり丁寧に作られた小皿である。107は、高台付きの小皿である。高台径 3.0cmを測る。白味が強い褐色の胎で粉っぽい。高台は貼付による。108は、小皿 1-b 類に属する。白味が強い褐色の胎で、微細な赤色粒子・黒色粒子を含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロは時計回り。109~111は、土師質杯 2類である。109は、赤褐色の胎に白色粒子・赤色粒子を多く含む。110は、赤褐色の胎に 1mm大の赤色粒子をまばらに含む。111は、口径 15.8cmを測り、赤褐色の胎に微細な赤色粒子を多く含む。112は、赤茶色の胎に砂粒を多く含む土師質土器である。底部には高台が付いていたものと思われる。器種不明。113は、逆「く」の字型に屈曲する土師質土器の口縁である。胎は白味を帯びた褐色で、微細な砂粒を多く含む。器種不明。114~121は瓦器碗である。114は、口径 14.4cmを測り、灰色の微細な胎に砂粒が僅かにはいる。横位のヘラ磨きが施されてい



第22図 40区2層の出土遺物(4)

るが明瞭ではない。115は、口径16.8cmを測る。内面は灰白色で外面は黒灰色の緻密な胎である。116は、口径16.5cmを測り、きめの細かい灰色の胎に、微細な砂粒を僅かに含む。内外面ともに横位のヘラ磨きが施される。117は、高台径6.6cmを測る。灰白色の緻密な胎には、微細な白色粒子を含む。体外面には成形の際の粘土紐積み上げ痕が観察できる。高台は貼付でやや外に開く。内面にはヘラ磨きが施されるが明瞭でない。118は、高台径6.4cmを測る。灰色の胎には、微細な砂粒を僅かに含む。高台は貼付で若干内を向く。119は、高台径6.6cmを測る。緻密な胎土で内外面灰白色を呈し、見込には1条の沈線が巡る。高台は貼付により、畳付は薄く断面三角形である。120は、高台径6.8cmを測る。内面黒色、外面灰白色の胎で、微細な砂粒を多く含む。外体部および高台内面に、回転ヘラ削りが施される。回転ヘラ削りの後、内を向く高台が貼り付けられる。内面には横位のヘラ磨きが部分的に見られる。121は、高台径6.6cmを測る。灰白色の緻密な胎に微細な砂粒がまばらに混じる。内外面ともに黒色で、貼付による高台は外を向く。122は、高台径が5.0cmの瓦器小碗である。灰色の緻密な胎で、内外面黒色である。高台は幅が狭く外へ向く。123~125は須恵質の甕または壺の胴部である。123は、赤味を帯びた褐色の胎で、砂粒を僅かに含む。内外面ともに黒褐色を呈し、叩き痕・あて具痕が残る。124は、赤褐色の胎で、砂粒を僅かに含む。内外面ともに茶褐色を呈し、叩き痕・あて具痕が残る。125は、灰色の胎で砂粒を多く含む。外面に平行叩き痕を残す。126は、須恵質甕または壺の口縁である。青灰色の軟質の胎に砂粒を多く含む。外体部は口縁部まで平行叩きが行われる。127は、口径29.0cmを測る瓦質の捏ね鉢である。胎は灰白色で微細な砂粒を僅かに含む。内面は胎と同じ灰白色で外面は黒灰色を呈する。128は須恵質の播鉢である。軟質で灰白色の胎には僅かに砂粒を含む。内体部にはハケ目の上から溝目を施す。口縁部には横ナデが施される。129は、口径11.4cmの白磁碗Ⅱ類で、小さな玉縁状口縁を有する。130~140は白磁碗Ⅳ類である。130は、口径17.8cmを測る。131は、口径14.0cmを測る。玉縁の張出しが小さい。132は、口径18.0cmを測る。133は、口径13.6cmを測る。134は、黄味が強いざっくりした胎である。口径16.4cmを測る。135は、玉縁の張出しが小さい。口径16.0cmを測る。136は、口径15.0cmを測る。137は、口径19.4cmを測る。138は、高台径が6.9cmを測る底部の破片である。見込には1条の沈線が巡る。139は、高台径6.4cmを測る。見込には1条の沈線が巡り、焼成中の降灰による付着物が見られる。140は、底径5.8cmを測る。外体部下端に飛鉋が見られる。見込には1条の沈線が巡る。141は、白磁碗Ⅴ類で細く高い高台を有する。高台径6.0cmを測る。体部と高台の境まで小孔の多い白濁した釉が掛かる。見込には1条の沈線が巡る。142は、高台径6.8cmを測る。見込の釉がロクロ回転を利用せずに輪状にカキ取られ、露胎となった部分には重ね焼きの痕が残る。釉のカキ取り方に問題があるが、白磁碗Ⅷ類に相当すると思われる。143は、白磁碗Ⅴ類に相当し、口径15.6cmを測る。内面口縁下に1条の沈線が巡る。144は、白磁碗Ⅴ類に相当し、口径16.2cmを測る。145は、口径17.0cmで白磁碗Ⅴ類かⅧ類のいずれかに相当すると思われる。146~148は白磁皿である。146は、口径

10.0cmで、Ⅲ類に相当する。147は高台径4.8cmを測る。見込の釉がカキ取られているが、輪状になっていない事から142と同じくロクロ回転を利用せずにカキ取ったと思われる。Ⅲ類に相当しよう。148は、口禿げでⅨ類に相当する。149～153は龍泉窯系青磁碗である。149は、口径15.6cmを測る。Ⅰ-1類である。150は、釉が一部剥落している。Ⅰ-1類に相当する。151は、高台径7.0cmを測る。見込に「金玉□□」のスタンプが押される。このスタンプは「金玉満堂」であろう。Ⅰ-1類に相当する。152は、口径18.8cmを測る。外体部には鎬蓮弁文が施され、光沢のあるオリブ色の透明釉が厚く掛かる。Ⅰ-5b類である。153は、高台径5.0cmを測る。外体部には鎬蓮弁文が施され、透明感の少ないオリブ色の釉が厚く畳付まで掛かる。154～156は同安窯系青磁碗である。154は、高台径6.8cmを測る。外体部にはヘラ状工具で沈線が、内体部にはクシ状工具で花文が施される。見込の釉は輪状にカキ取られ、重ね焼きの際に間に敷いたと思われる植物が灰痕となって残る。Ⅲ-2類に相当する。155は、高台径5.4cmを測る。てらてら光る黄味を帯びた透明釉が外体部下半を除き掛かる。Ⅲ-1a類に相当する。156は、外体部にヘラ状工具による片彫りの沈線が施され、てらてら光る黄味を帯びた透明釉が施される。Ⅲ-2類に相当する。157は同安窯系青磁皿Ⅰ-b類である。底径4.6cmを測り、見込にはクシ状工具によるジグザグ文が施される。158は、青白磁合子の身で、型造りにより細い菊弁を外体部にあしらっている。底径6.3cm。159～166は石鍋である。159は、B-1である。やや青味がかかった滑石を使っている。口径34.1cmを測り、外体面は横位の削りが施される。外体面下端に煤が付着している。160は、B-1である。灰白色の滑石を使用している。口径35.0cmを測り、外体部は横位の削りが施される。節理部分に沿って割れている。161は、耳が付く形態でA-1に相当する。赤味を帯びた灰白色できめの細かい滑石を使用している。口径は29.0cmで外体部に横位のヘラ削りが施される。内面は削り痕をまったく残さないほど滑らかである。162は、A-2で淡いアズキ色をした滑石を使用している。口径28.8cmで外体部には斜め方向の削りがある。161と同様に器表は滑らかで、削り痕は明瞭でない。163は、A-2である。方形の耳を有し、口縁部は横位の、耳は縦位の削りが施される。外体部は煤でまっ黒である。164は、A-2である。口径14.8cmと小ぶりである。淡いアズキ色の胎で口縁には横位の、体部には縦位の削りが施される。内面は上方からの荒々しい削り痕を残す。165は、A-2で方形の耳を有する。青灰色の滑石を使用し、煤で黒くなっている外体部には横位の削りが施されている。166は、D-4である。灰色滑石を使用し、内外面ともに煤で黒くなっている。特に外面は著しい。167は、滑石製パレン状製品である。灰白色の石鍋片を利用している。把手の部分は石鍋A群に見られる耳部を加工していると思われる。168は、用途不明の滑石製品である。径2.0cmの2つの穴が削り出される。蓋として使ったものか、容器として使ったものか、置き方さえも判断しかねる。灰白色の滑石から作られた石鍋を利用したようで、煤による黒変が部分的に見られる。類例に佐賀県武雄市茂田遺跡^{註6}、博多遺跡群^{註7}の出土遺物が挙げられる。169は、滑石製石錘である。長さ5.6cm、幅2.5cm、厚さ1.7cm、重さ37.2gを測る。灰白色の滑石で作られて

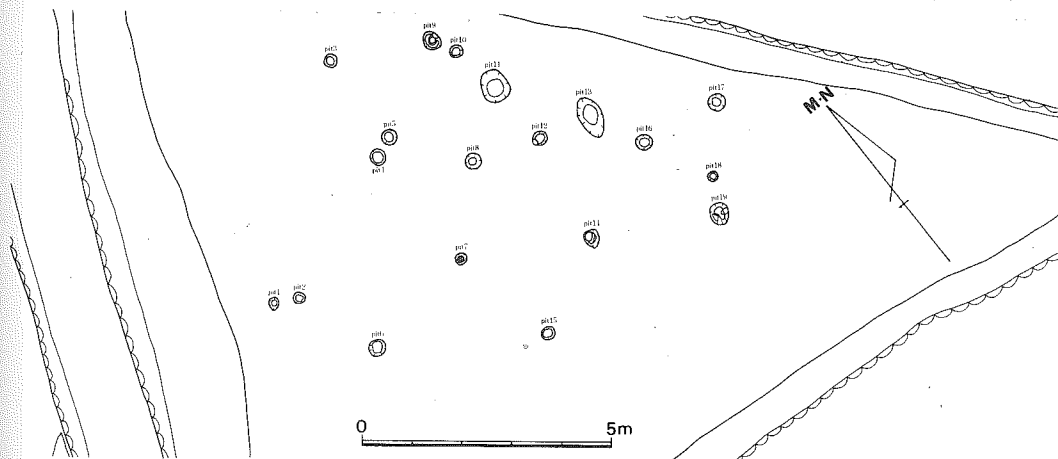
おり、縦に沈線が一周する。170は、用途不明の滑石製品である。灰色の滑石で先丸の棒をつくり、縦に浅い線を入れている。171は、白味を帯びた赤褐色の土錘である。長さ 4.7cm、厚さ 1.4cm、穴径 0.2cm、重さ 6.4g を測る。

41-1区の遺構、遺物 (第23図、第24~28図)

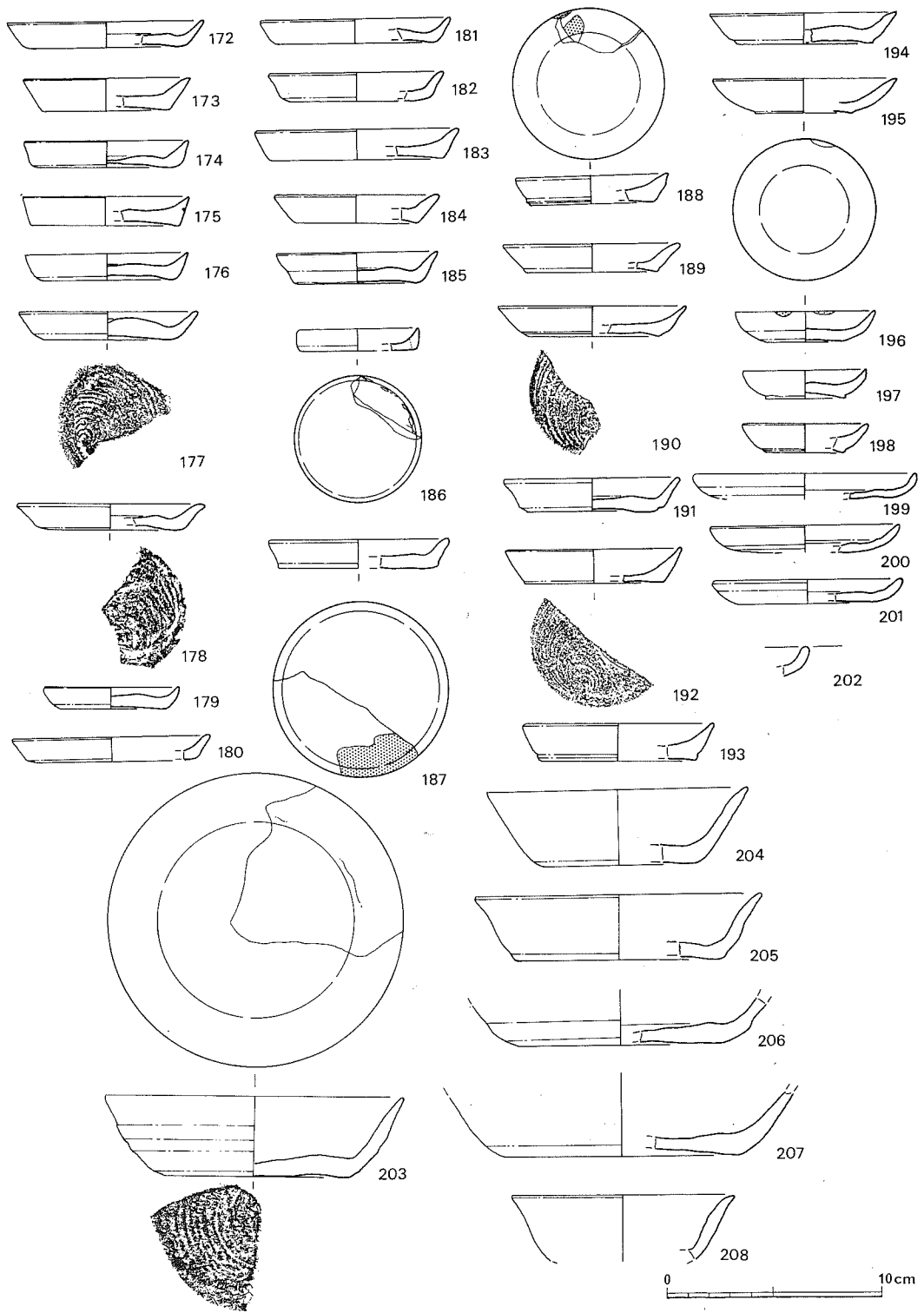
遺構はピットを19基検出した。ピット1~ピット13の覆土は青灰色の粘土質で、ピット14~ピット19の覆土は黒褐色で焼土粒、炭化物を多く含む。この事からピット1~ピット13は近世以降に、ピット14~ピット19は中世に掘られたものと思われる。ピットに規則性がなく、どちらの時期も建物を想定する事はできなかった。

土層図は第6図に示している。

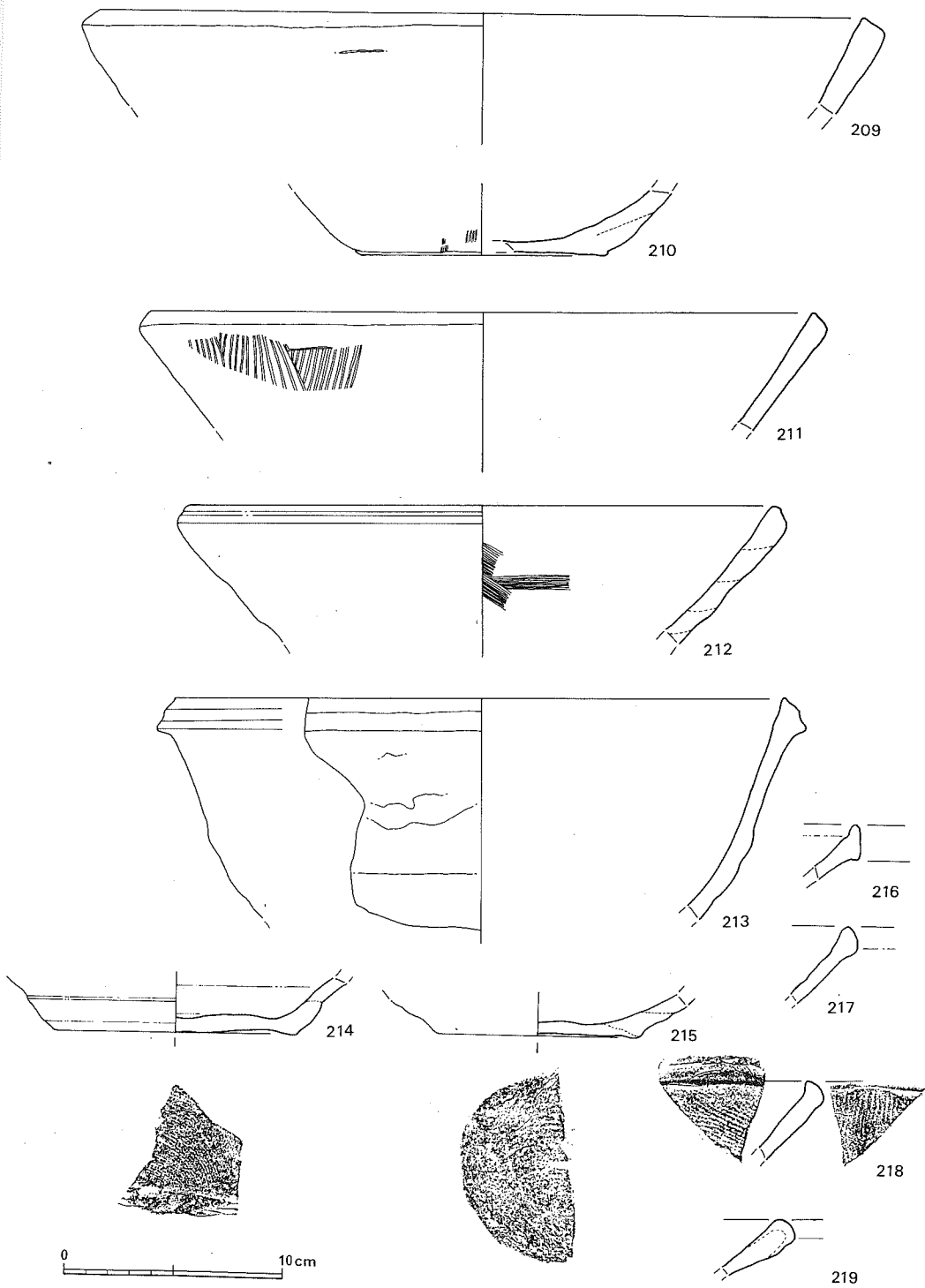
6層からの遺物はおよそ500点出土した。172~202は土師質小皿である。172は1-a類である。口径9.0cm、器高1.2cmを測り、赤茶色の胎に白色粒子を全体に含む。回転糸切りによる切り離しであるが、ロクロ回転方向は不明。173は1-a類である。口径7.7cm、器高1.5cmを測り、白味を帯びた赤褐色の胎である。切り離しは回転糸切りによって行われ、ロクロの回転は時計回りである。174は1-a類である。口径7.6cm、器高1.2cmを測る。白味を帯びた褐色の胎である。回転糸切りによる切り離しで、ロクロは時計回りである。175は1-a類である。口径7.6cm、器高1.3cmを測る。きめの細かい赤褐色の胎に、微細な赤色粒子・黒色粒子を含む。底部、体部の厚さに比べると体部の伸びがなく、体部は底部から僅かにつまみ上げたような感じである。外底部には時計回りのロクロ上で行われた回転糸切り痕が明瞭に残る。切り離しの際糸が斜めにはいっており、糸の出口は糸の入口よりも3mm上に浮く。176は1-a類である。赤褐色の胎に、1mm大の白色・黒色・赤色粒子を含む。回転糸切りによる切り離しであるが、ロクロ回転方向は不明。175と同じく体部の伸びがない。177は1-a類である。口径8.2cm、器高1.3cmを測り、赤褐色の胎に微細な白色粒子・黒色粒子を全体に含む。切り離しは回転糸切りによって行われ、ロクロの回転は反時計回りである。178は1-a類である。口径8.6cm、器高1.2cmを測り、赤茶色の胎に微細な白色・黒色・赤色粒子を全体に含む。切り離しは回転糸切りによって行われ、ロ



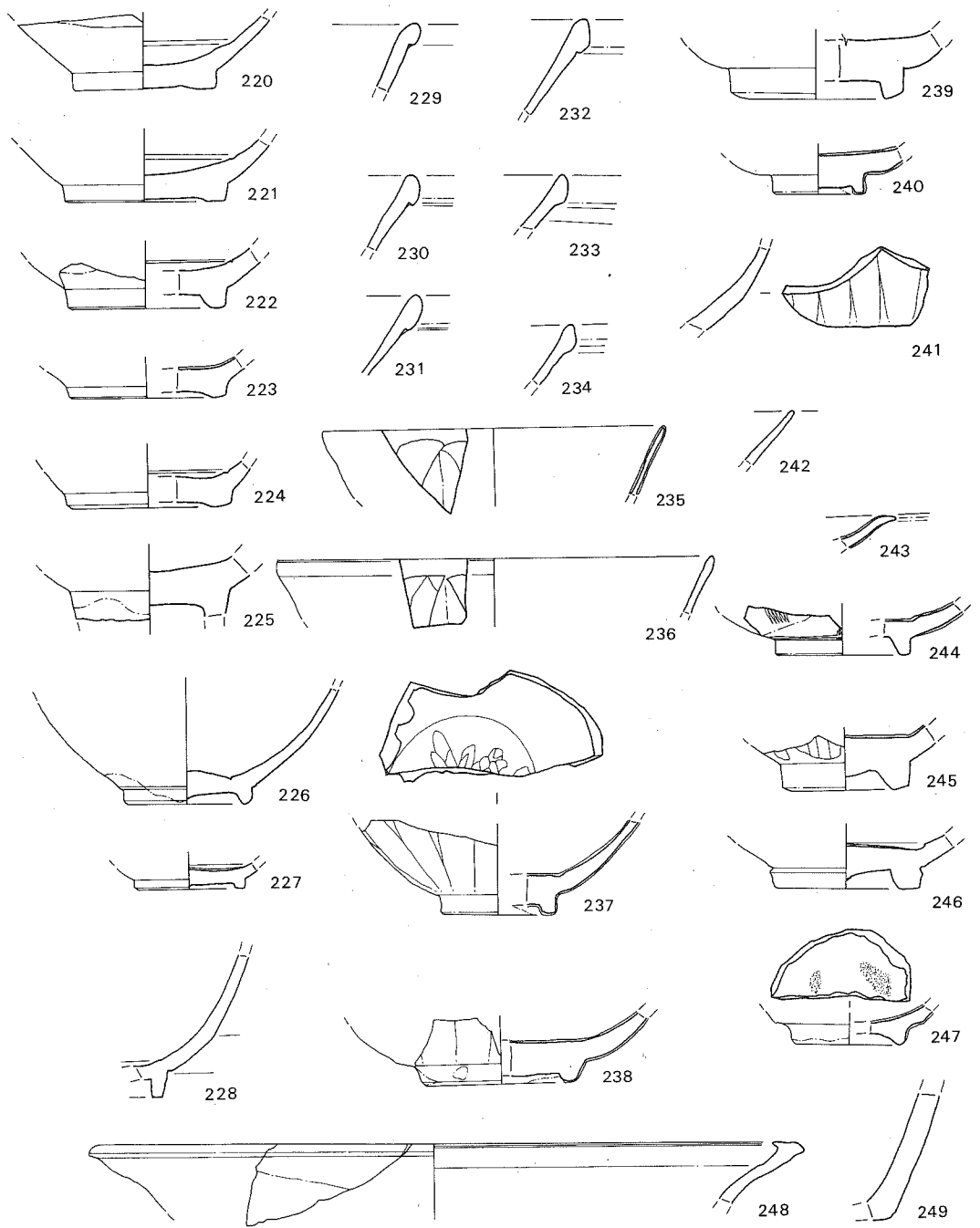
第23図 41-1区遺構 (1/150)



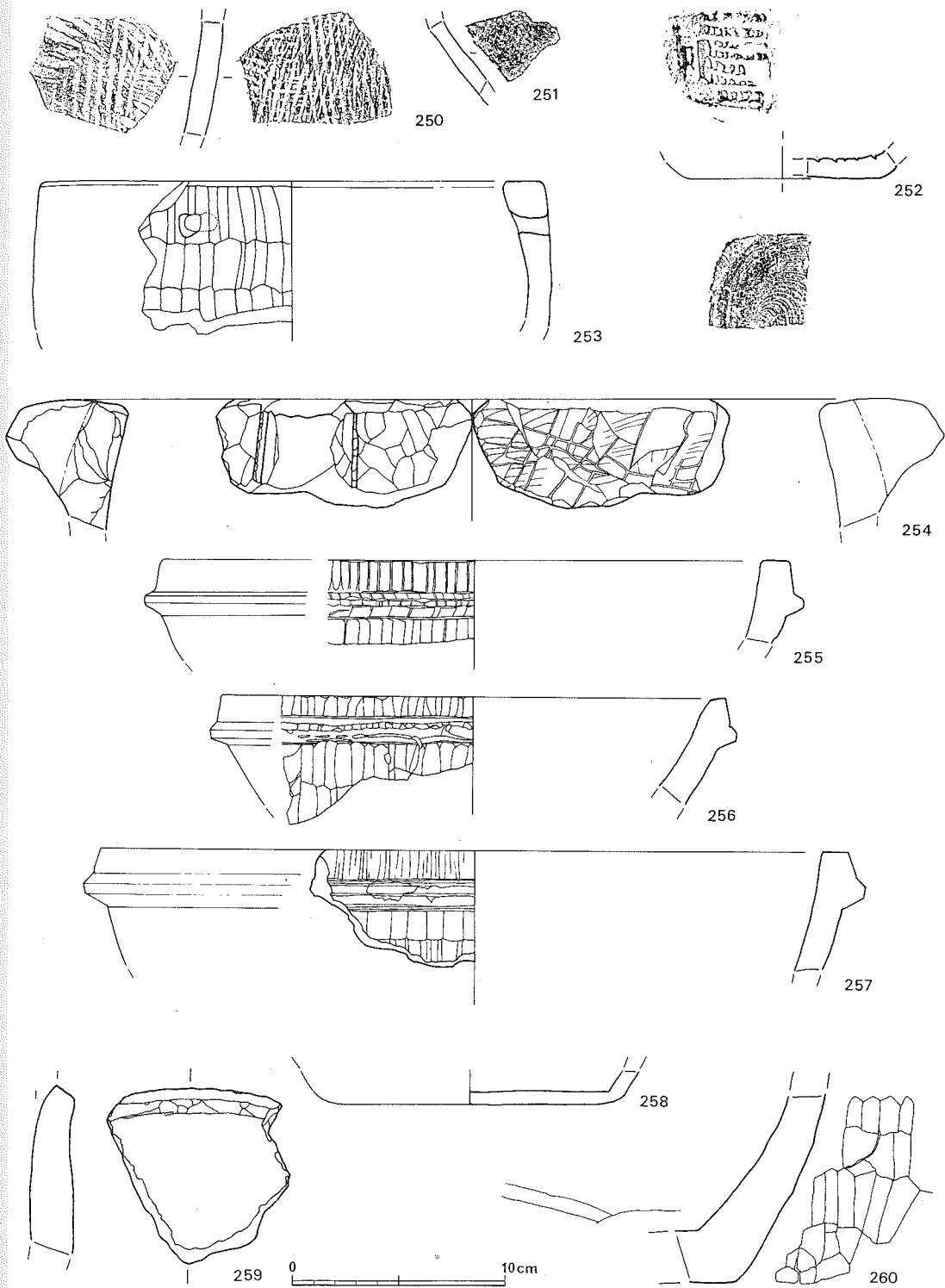
第24図 41-1区 6層の出土遺物(1)



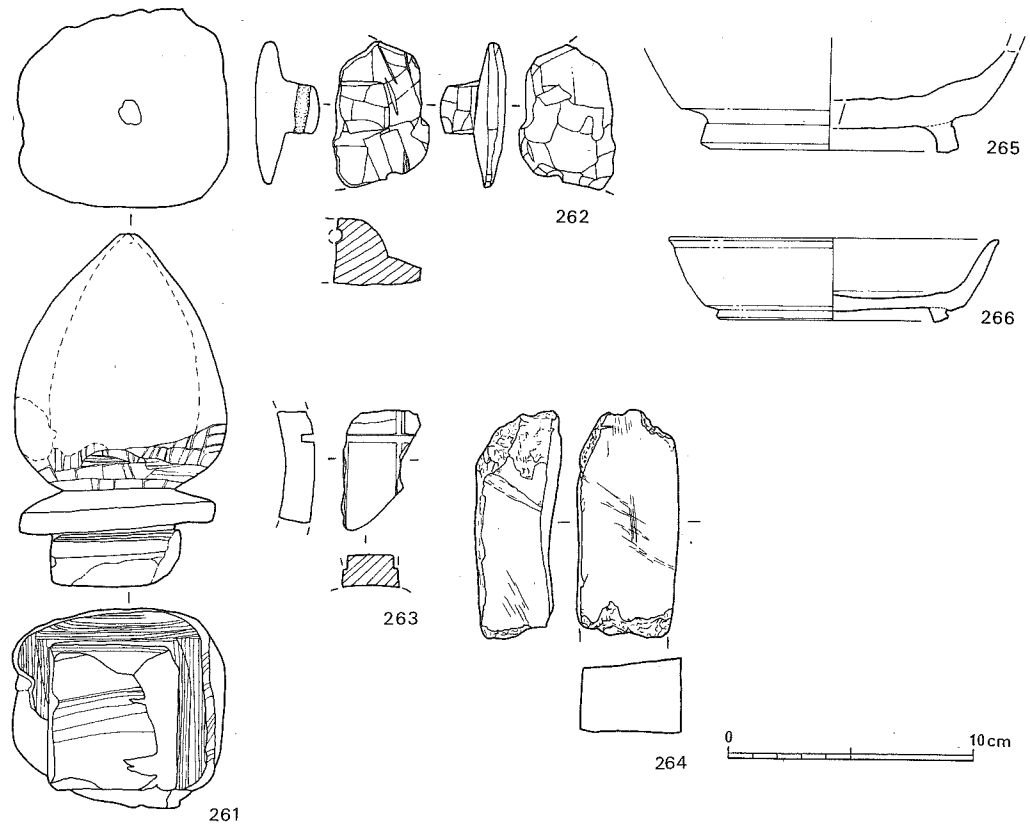
第25図 41-1区 6層の出土遺物(2)



第26図 41-1区 6層の出土遺物(3)



第27図 41-1区6層の出土遺物(4)



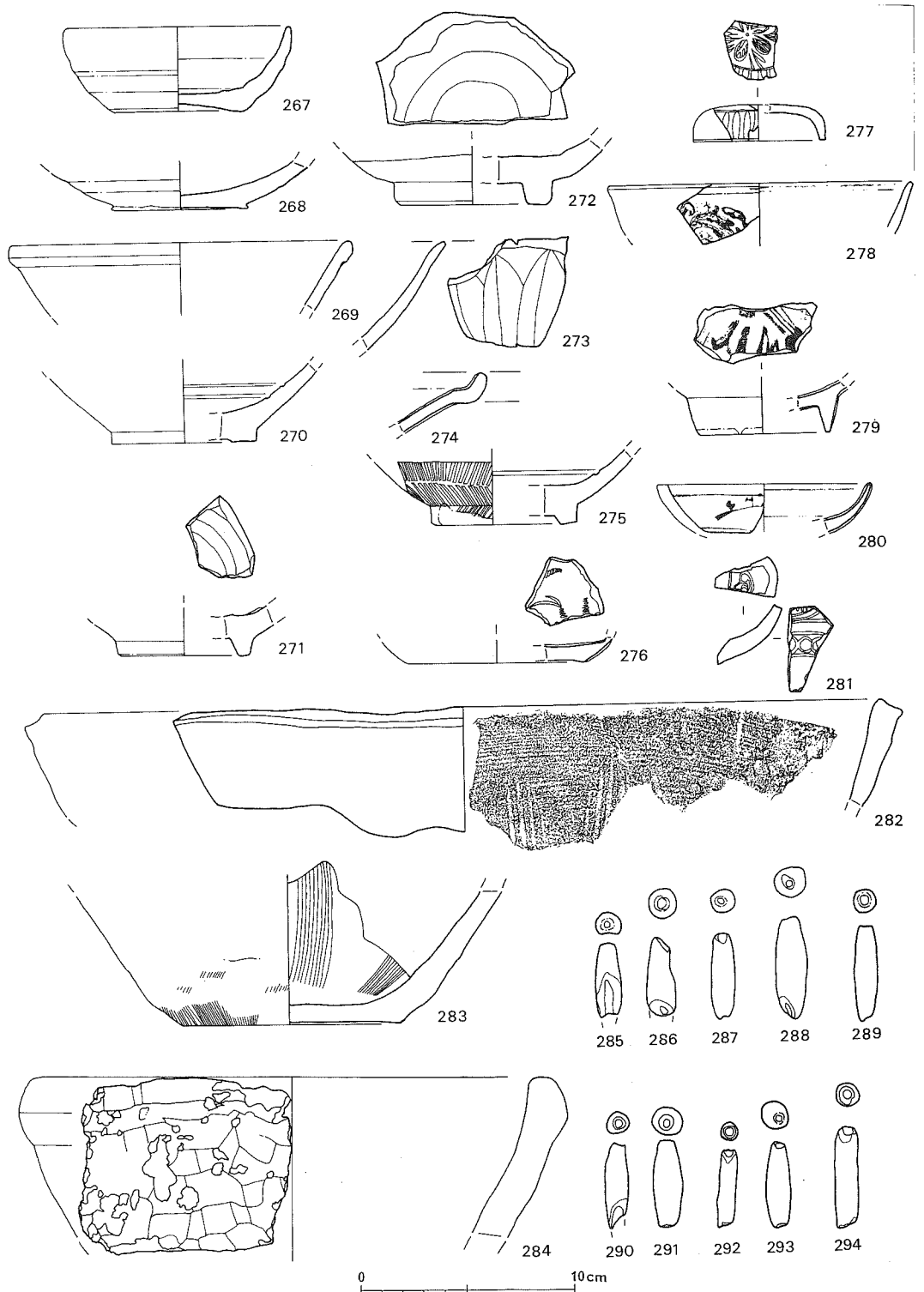
第28図 41-1区6層の出土遺物(5)

クロの回転は時計回りである。179は1-a類である。口径6.1cm、器高1.0cmを測り、赤褐色の胎に微細な白色粒子を全体に含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロの回転は時計回りである。180は1-a類である。口径9.0cm、器高1.1cmを測り、赤褐色の胎には1~2mm大の白色粒子を全体に含む。切り離し方法不明。181は1-a類である。口径8.7cm、器高1.1cmを測り、赤褐色の胎には微細な白色粒子を含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロの回転は時計回り。182は1-a類である。口径8.1cm、器高1.3cmを測り、赤褐色の胎に微細な白色粒子を含む。底部には切り離し痕を残していない。183は1-a類である。口径9.5cm、器高1.4cmを測り、白味を帯びた褐色の胎には白色粒子を全体に含み、ざらついた感じである。体部内面に僅かに黒変箇所が見られる。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転は時計回り。184は1-a類である。口径7.6cm、器高1.3cmを測り、赤褐色の胎には砂粒を多く含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロ回転は時計回り。185は1-a類である。ざらついた赤褐色の胎で、1mm大の白色粒子、黒色

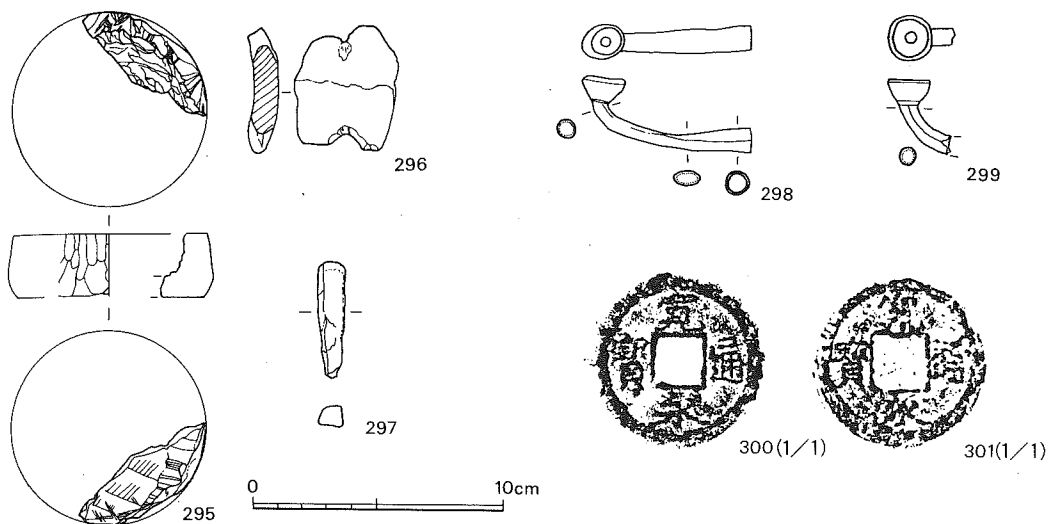
粒子を全体に含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロ回転は時計回り。ほぼ完形。186は1-a類である。口径5.6cm、器高1.0cmを測り、黒色粒子・白色粒子を全体に含むざらついた胎である。直立する体部は短く、外底部に粘土紐貼付痕がある事から、この小皿は、底部にあたる粘土塊に粘土紐を一周させ、体部を引き上げたものと思われる。回転糸切りで、ロクロは時計回り。187は1-b類である。口径8.4cm、器高1.3cmを測り、緻密な白色を帯びた褐色の胎に、微細な赤色、黒色粒子を含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロ回転は時計回り。乾燥の段階で板の上に置かれたのであろうか、板目が付く。外面底部から体部にかけて、煤による黒変が見られるが、使用中のものではなく焼成の際に付いたものと考えられる。188は1-b類である。口径7.0cm、器高1.3cm。きめの細かい胎に、黒色粒子や赤色粒子を含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロの回転は時計回り。体部内面に煤による黒変が見られる。189は1-b類である。口径8.1cm、器高1.3cmで、赤褐色の胎には砂粒を多く含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロの回転は時計回り。190は1-b類である。口径8.1cm、器高1.5cmを測り、白味を帯びた褐色の胎には、白色粒子を多く含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロの回転は時計回り。191は1-b類である。口径8.0cm、器高1.5cmを測り、赤褐色の胎には1mm大の白色粒子を多く含む。切り離しは回転糸切りで、ロクロの回転は時計回り。192は1-b類である。口径8.6cm、器高1.4cmを測る。赤褐色の胎に微細な砂粒を全体に含む。時計回りのロクロ上で回転糸切りによって切り離される。193は1-b類である。口径8.8cm、器高1.7cmを測る。白味を帯びた褐色の胎には微細な砂粒を多く含むため器表はざらついている。回転糸切り痕が残るがロクロの回転方向は不明。194は1-b類である。口径8.6cm、器高1.4cm。赤褐色の胎に微細な赤色・黒色粒子を含む。時計回りのロクロ上で回転糸切りによって切り離される。195は2-a類である。口径8.4cm、器高1.6cmを測る。赤褐色の胎に1mm～2mm大の赤色粒子・白色粒子を全体に含む。切り離しは回転糸切りによるがロクロの回転方向は不明。196は2-b類である。口径6.4cm、器高1.4cmを測る。白味を帯びた赤褐色の胎は緻密であるが、1mm～2mm大の赤色粒子を多く含む。底部には回転糸切り痕を残すが明瞭でない。口縁部に1箇所煤による黒変箇所がある。197は2-b類である。口径5.6cm、器高1.3cmを測る。赤褐色の胎は緻密であるが微細な黒色・赤色粒子を全体に含む。切り離しは回転糸切りによるが、ロクロの回転方向は不明。198は2-b類である。口径5.8cm、器高1.3cmを測る。白味を帯びた褐色の胎には微細な砂粒が多く含まれ、器表はざらついている。切り離し方法不明。199は3類である。口径10.2cm、器高1.2cmを測る。白味を帯びた赤褐色の緻密な胎に、微細な砂粒を多く含む。切り離し方法不明。200は3類である。口径8.6cm、器高1.3cmを測り、赤褐色の胎に砂粒を多く含む。切り離しは回転糸切りによるがロクロの回転方向は不明。底部と体部の境に回転ヘラ削りが施されているようであるが明確ではない。201は3類である。口径8.8cm、器高1.1cmを測り、赤褐色の胎には微細な砂粒を多く含む。切り離しは時計回りのロクロ上で回転糸切りによって行われる。202は3類である。小片のために回転して復原する事ができなかった。器高は1.3cmで、赤褐色の胎に微細な

赤色粒子を含む。切り離し方法不明。**203~208**は土師質杯である。**203**は3類である。口径13.6cm、器高3.7cmを測る。赤褐色の胎には、白色粒子や黒色粒子を全体に含み、体部内面に粘土紐積み上げ痕が残る。切り離しは時計回りのロクロ上で回転糸切りによって行われる。**204**は1-a類である。口径12.0cm、器高3.4cmを測り、赤褐色の胎に微細な砂粒を含む。底部と体部の境が丸みを持つが、これは回転ヘラ削りによって調整されたもののようである。底部に僅かに回転糸切り痕を残すが、ロクロの回転方向は不明。**205**は1-b類である。口径13.2cm、器高3.0cmを測り、赤褐色の胎には微細な砂粒を含む。回転糸切りによる切り離しで、ロクロの回転は時計回り。**206**は3類である。赤褐色の胎に砂粒を多く含む。糸切り痕が僅かに残るがロクロの回転方向は不明。**207**は3類である。白味を帯びた褐色の胎に砂粒を多く含む。切り離し不明。**208**は3類である。口径10.2cmを測り、白味を帯びた褐色の胎に砂粒を全体に含む。**209・210**は土師質捏ね鉢である。**209**は口径34.5cmを測り、白味を帯びた褐色の胎に砂粒を多く含む。成形は粘土紐の積み上げによるもので、体外面に接合痕が残る。**210**は白味を帯びた褐色の胎で、成形は粘土紐の積み上げによる。体外面には調整のため施されたハケ目が僅かに残る。**211・212**は瓦質の捏ね鉢である。**211**は、口径30.0cmを測り、灰白色の胎には砂粒が全体に含まれる。成形は粘土紐積み上で、外体部に粘土紐の接合痕と、縦位の櫛状工具によるナデ痕が残る。**212**は、口径26.4cmを測る。灰白色の胎には砂粒が多く含まれ、口縁端部に凹部を持つ。粘土紐積み上げによって成形されており、断面に接合痕を明瞭に残す。また、調整は体部内面に横位と斜めのハケ目が僅かに残っている。**213~217**は須恵質の捏ね鉢である。**213**は灰白色の胎に、石英、長石粒を全体に含む。粘土紐の積み上げにより成形されており、外体部に粘土紐の接合痕が残る。口縁部に凹部を持ち、口径は27.6cmである。焼きが甘く軟質である。**214**は青灰色の胎に僅かに砂粒を含む。底径は13.0cmを測り、粘土紐積み上げによって成形される。切り離しは静止糸切り。**215**は、灰白色の胎に石英、長石粒を全体に含む。底径は9.0cmで、粘土紐積み上げによって成形される。切り離しは時計回りのロクロ上での回転糸切り。色調、胎土など**213**によく似ており同一個体の可能性がある。**216**は、青灰色の胎で、丸みを持つ玉縁状の口縁部である。微細な白色粒子を含む。**217**は灰白色のざらついた胎で、砂粒を全体に含む。玉縁状の口縁部外面が黒っぽくなっている。**218**は灰白色の瓦質捏ね鉢である。緻密な胎で焼成も良く固く仕上がっている。外体部に縦位のハケ目、内体部は斜めと横位にハケ目が施される。**219**は土師質の捏ね鉢である。白味を帯びた褐色の胎には砂粒や金雲母が混ざる。肥厚する口縁は貼付による。**220~224**は白磁碗Ⅳ類の底部である。**220**は高台径5.6cmを測る。**221**は高台径7.0cmを測る。**222**は高台径6.8cmを測る。黄味を帯び、ざっくりした胎で、釉は光沢がない。**223**は高台径6.8cmを測る。ローリングを受けている。**224**は底径7.1cmを測る。**225**は、高台が欠損しているが、高く伸びる高台と思われる。白磁碗Ⅴ類であろう。**226**は底径5.6cmを測る。白色の胎で、艶のない灰白色の釉が体部と高台の境まで掛かる。底部断面が算盤玉状を呈し、体部の開きも小さい。今福遺跡で類例が白磁碗C（森田・横田分類のⅧ類）として報告されて

^{註8} いる。227は白磁皿Ⅲ類で、底径5.6cmを測る。見込の釉を輪状にカキ取っており、見込の釉には重ね焼きの際に間に敷いたと思われる植物の灰痕が残る。228は白磁碗Ⅴ類である。229～234は白磁碗Ⅳ類である。234を除き光沢のある透明釉が掛かる。235～242は龍泉窯系青磁碗である。235はⅠ-5b類で口径15.2cmを測る。236はⅠ-5b類で口径19.0cmを測る。237はⅠ-5b類の体部下半の破片で、高台径5.0cmを測る。外体部には鎬蓮弁文が施され、見込には花文と思われるスタンプ文が押される。238はⅠ-5b類の体部下半の破片で、高台径6.4cmを測る。外体部に鎬蓮弁が施される。239はⅠ-1類である。高台径7.6cmを測り、ぶ厚い高台である。240はⅠ-1類である。外体部は無文で、胎は白味を帯びた褐色でざっくりした感じである。高台径4.0cmを測る。241はⅠ-5b類の胴部である。外体部に鎬蓮弁文が施される。242はⅠ-1類である。内外面無文。243は端反りの龍泉窯系青磁皿である。244～246は同安窯系青磁碗である。244はⅠ-1類で、外体部に細い櫛目が施される。高台径5.9cmを測る。245はⅢ類である。高台径5.6cmを測り、外体部にヘラ状工具による沈線が施される。246はⅢ-2類である。高台径6.2cmを測り、見込の釉を輪状にカキ取っている。247はざっくりした感じで赤味を帯びた褐色の胎に、白味を帯びた透明釉が畳付を除き施される。高台径4.6cmを測り、見込と畳付に目痕が残る。朝鮮産の陶器であろうか。249は砂粒が多く混ざる陶質桃色の胎で、内外面に光沢のない褐色がかかった白色の釉が掛かる体部下端の破片である。中国製の長壺であろうか。248は中国製の陶器鉢で、外反する口縁を内側に折り返している。胎は赤褐色で非常にきめが細かい。釉は黒茶色で口縁部に掛けられる。250は須恵質の甕胴部破片である。灰色の固い胎に砂粒を含む。内外面にタタキ痕、あて具痕が残る。251は須恵質壺肩部である。灰色の胎で砂粒を僅かに含む。外体部には格子目のタタキ痕が僅かに残る。252は陶器おろし皿である。灰白色の胎に砂粒を僅かに含み、内面は沈線を縦横に入れて凹凸を作っている。外底部は回転糸切り痕を残し、切り離し後の調整は行われていない。ロクロの回転は時計回りである。253～260は石鍋である。253はA-1である。灰白色の滑石で作られ、外面には横位の削り痕が見られる。口縁下には、表は一方向、内面は二方向から穿たれた小孔がある。外体部は煤で黒くなっている。254はA-1である。赤味を帯びた灰白色の滑石で、口径34.4cmを測る。口縁には耳が付き、外体部の削りは横位、内体部は右上方より行われている。255はC-1である。灰白色の滑石で作られ、口径は29cmを測る。煤で黒変する外体部には横位のヘラ削りが施されている。256はC-2である。赤味を帯びた灰白色の滑石で作られ、口径23.4cmを測る。外体部には横位のヘラ削りが施される。257はC-1である。灰白色の滑石で作られ、口径34.6cmを測る。器表が荒れており全面にあばた状の凹凸がある。258は灰色の滑石で作られており、底径は14.0cmを測る。器厚が0.6cmと非常に薄く仕上がる。内外面に煤が付着する。259はB-1で、灰白色の滑石で作られている。罌より上位が折れており、外体部は煤が付着している。260はB-3である灰白色の滑石で作られ、外体部には横位の削りが、内体部には斜めの削りが施される。また、外体部は、煤により黒変している。261～263は滑石製品である。261は高さ14.1cm



第29図 本調査包含層外の出土遺物(1)



第30図 本調査包含層外の出土遺物(2)

を測る宝珠である。きめの細かい赤味を帯びた灰白色の滑石を使用している。宝珠の部分は四角錐の角が取れた形をしている。262はバレン状製品である。黒灰色の滑石を使用しており、把手部は穿孔されている。石鍋片の利用であろう。263は縦横に直交する溝が彫られている。体部断面が曲線を描く事から、この製品は石鍋片の利用と思われる。小さく切断するための溝であろうか、用途不明である。264はきめの細かい砂岩を利用した砥石である。3面が使用されて滑らかな面になっている。最も使用されたと思われる面は湾曲し、高低差は0.6cmある。度重なる使用が考えられる。また金属を砥いだ際についたと思われる傷も部分的に見られる。265・266は奈良時代のものと考えられる須恵器である。265は長頸壺の底部で高台径10.4cmを測る。青灰色を帯び、体下半から高台内面にかけてヘラ削りが施される。外方へ「ハ」の字に開く高台は貼付による。266は杯である。口径13.1cm、器高3.3cm、高台径9.2cmを測る。砂粒をほとんど含まない青灰色の胎で、体部は口縁下で外反する。高台は貼付によるもので、やや外側に張り出し、内周が地に着く。

包含層外の遺物 (第29、30図)

267・268は土師質杯である。267は口径10.4cm、器高4.0cm、底径6.0cmを測る。赤褐色できめの細かい胎には砂粒をほとんど含まない。切り離しは静止糸切りによる。底部と体部の境に粘土紐の接合痕が残る杯3類である。41-2区5層出土。268は、白味を帯びた褐色の胎で砂粒を全体に含む。底径6.4cm。回転糸切りによる切り離しで、ロクロの回転は時計回り。体部がラッパ状に開く杯2類である。54水-13区2層出土。269は白磁碗Ⅳ類で、口径13.1cm。54水-8区2層出土。270は白磁碗Ⅳ類で、高台径6.8cmを測る。30区3層出土。271は見込の釉を輪状にカキ取る白磁碗Ⅷ類で、高台径6.1cmを測る。54水-11区2層出土。272は龍泉窯系

青磁碗Ⅰ-1類である。高台径6.8cmを測る。釉が剥落しているが見込の釉を輪状にカキ取った跡が残る。42区2層出土。273は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。熱を受けたのであろうか釉の光沢が失せ磨ガラス状を呈する。42区2層出土。274は龍泉窯系青磁杯Ⅲ類である。内体部には、クシ状工具による縦位の沈線が全面にはいる。30区2層出土。275は白磁碗Ⅳ類である。底径7.8cmを測る。体部下半のヘラ削りが飛鉋状を呈する。飛鉋の工具痕が上と下では角度が異なっているが、ロクロの回転方向を変えて削りを行ったためであろう。30区1層出土。276は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類である。底径8.4cmで見込には猫搔き文が施される。42区1層出土。277は青白磁印籠形合子の蓋である。口径6.2cm、器高1.7cmを測る。上面に花文を、側面に菊弁を型押しする。42区2層出土。278は口径14.3cmを測る。口縁部外面に2条（うち1条は途中まで）、内面にも2条の圈線が巡る。外体面には蛟竜文が描かれる。染付碗E群である。41-2区2層出土。279は赤味を帯びた褐色の胎に、白濁の釉が掛かる。見込が高台内に窪み蓮子碗の形態である。見込には緑がかった呉須で十字花文が描かれており、一見陶質であるが染付碗C群に含まれると考えられる。30区1層出土。280は染付皿C群である。外面は口縁下と体下部の圈線に挟まれて唐草文と思われる文様が描かれる。内面にも口縁下と体下部に1条の圈線が巡る。口径10.0cmを測る。54水-14区2層出土。281は高麗青磁碗である。内外面に白色の象嵌が施される。40区1層出土。282は土師質播鉢である。口径39.0cmを測り赤味を帯びた褐色の胎に砂粒を多く含む。口縁端部は横ナデによって凹部をつくり、内体部はクシ状工具による横位のナデの後に5条を単位とする溝目が施される。51-1区5層出土。283は底径10.2cmを測る土師質播鉢である。白味を帯びた褐色の胎に砂粒を多く含む。粘土紐積み上げによって成形されており、外体部に接合痕が残る。また、外体部にはクシ状工具によるナデが、内体部には放射状に5条を単位とする溝目が施される。54水-1区2層出土。284はD-1の石鍋である。小孔が多い灰色の滑石で作られている。煤で黒変する。外体部には不規則な横位の削りが施される。口径23.6cm。30区3層出土。285~294は土錘である。285は砂粒をほとんど含まない赤褐色の胎である。孔径0.3cmを測る。42区1層出土。286は砂粒をほとんど含まない白味を帯びた赤褐色の胎である。孔径0.4cmを測る。ローリングを受けている。54水-6区1層出土。287は長さ3.9cm、幅1.1cm、孔径0.3cm、重さ3.1gを測る。赤褐色の胎である。54水-10区1層出土。288は褐色の胎で焼き締まっている。径1.5cm、孔径0.3cmを測る。54水-10区2層出土。289は砂粒を全体に含む暗褐色の胎である。長さ4.4cm、径1.1cm、孔径0.5cm、重さ3.7gを測る。54水-13区2層出土。290は砂粒を僅かに含む赤褐色の胎で、径1.2cm、孔径0.4cmを測る。54水-14区2層出土。291は微細な砂粒を全体に含む灰白色の胎である。長さ4.0cm、径1.4cm、孔径0.3cm、重さ7.1gを測る。54水-14区2層出土。292は灰色で部分的に赤褐色を呈する。径0.8cm、孔径0.4cmを測る。40区1層出土。293は赤褐色の胎である。長さ4.0cm、径1.2cm、孔径0.4cm、重さ3.8gを測る。41-2区2層出土。294は赤褐色で部分的に黒色を呈する。長さ4.7cm、径1.1cm、孔径0.4cm、重さ4.9gを測る。30区3層出土。295は滑石

製小型容器である。僅かに赤みを帯びた灰白色の滑石を使用している。口径7.8cm、器高2.5cm、底径7.5cmを測る。外面は横位の削りが丁寧に施されるが、内面は雑に削り貫いている。30区3層出土。296は滑石製石錘である。長軸の両端に表裏から打欠を行う。長さ5.0cm、幅4.1cm、打欠部間の長さ3.7cm、厚さ1.0cm、重さ33.6gを測る。湾曲しており、表面に煤が付くことから石鍋片の利用であろう。42区2層出土。297は断面方形の鉄釘である。全長4.7cm、厚さ1.0cm、重さ11.8gである。全体に錆が付いている。41-2区2層出土。298・299は銅製の煙管雁首である。298は長さ6.8cm、羅字に接続する部分の径0.9cm、火皿の径1.7cmを測る。合わせ口が側面に認められ、火皿は接合されたものと考えられる。首部が潰れているが、使用中のものが破棄されてからのものか不明。54水-14区2層出土。299は緑青による腐蝕が進んでおり、首部以下は欠損している。火皿の径は1.7cmである。合わせ口が側面に認められ、火皿も接合されたものと考えられる。41-2区2層出土。300、301は54水-14区2層出土の寛永通宝である。300は径2.3cm、外縁部の厚さ1.25mmを測る。301は径2.3cm、外縁部の厚さ1.25mmを測る。

- 註1 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- 2 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982
- 3 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982
- 4 森田 勉「滑石製容器一特に石鍋を中心として」『仏教芸術148号』毎日新聞社1983
- 5 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒No.112』1982
- 6 原田保則編「茂手遺跡」武雄市文化財調査報告書第15集1986
- 7 福岡市教育委員会 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ—高速鉄道関係調査1—福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集1984
- 8 宮崎貴夫『今福遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会1986

岡遺跡出土の中世土器群について

岡遺跡では、本調査において中世の遺構や中世の包含層を確認した地区が6箇所ある。そのうち51-1区、41-1区ではピットと包含層、40区では落ち込み、集石遺構、ピットと包含層。54水-9・10区では集石と包含層。42区、54水-13区、54水-14区では包含層のみを確認した。

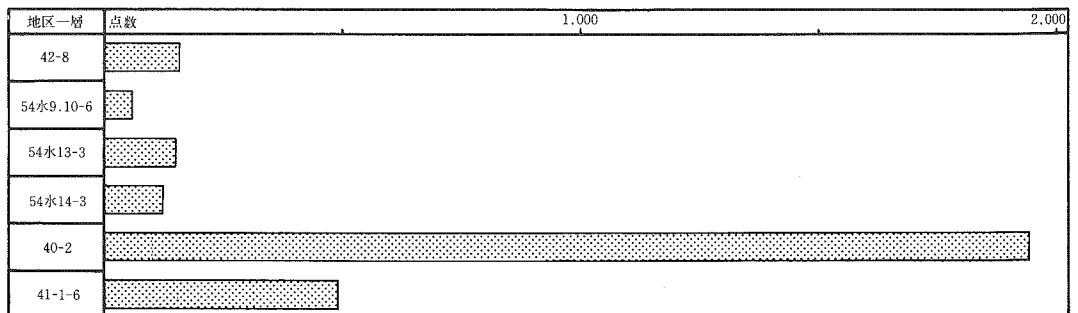
第31図は本調査における中世包含層および遺構からの地区別遺物出土点数である。総点数がおおよそ3,000点である。地区別に見ると40区が最も多くおおよそ2,000点である。以下41区、42区……と続く。40区からは総数の%が出土している事になる。

地区別土器、陶磁器の組成（包含層）（第32図）

中世の遺構や包含層から出土した遺物点数の内訳である（但し、土錘、石錘、用途不明の滑石製品など「住」に直接関係しないものは除く）。地区別にばらつきが見られるが、どの地区においても土師質土器が最も多く出土し、平均すると50%である。次いで白磁、青磁などの輸入陶磁器で平均25.9%である。以下瓦質の13.6%、石鍋7.8%と続く。輸入陶磁器が25%も占めるという事は、現在の私達の生活と比べるとはるかに舶来品の割合が大きい。では、県内における中世遺跡での組成を見て当遺跡と比較してみたい。

県内他遺跡における組成（第33・34図）

県内において中世の遺跡が調査されるようになって僅か10年余りである。まだ始まったばかりといえよう。調査された遺跡数も少ないために、出土遺物の数量を報告しているのは2遺跡である。1つは、南高来郡北有馬町「今福遺跡」^{註1}で、もう1つが東彼杵郡東彼杵町「川井川内遺跡」^{註2}である。今福遺跡の場合は、土師質土器が最も多く73.8%を占める。続いて輸入陶磁器の18.9%である。順番は本遺跡と同じであるが、輸入陶磁器の割合が7%小さく、土師質土器の割合が23.8%大きい。しかし、輸入陶磁器と国産の土器とに大きく分けて見ると、18.9対81.1となり、本遺跡の25.9対74.1という比率と大きく変わらない。川井川内遺跡の場合は、輸入陶磁器が51.9%を占め、次いで土師質土器の32.4%となる。輸入陶磁器と国産の土器とに分けてみると、51.9対48.1となる。これは本遺跡や今福遺跡の比率と比べると大きく異なっている。この事は川井川内遺跡の性格が寺院の可能性があるとこの事と関係していると思われる。報告書として公にされていないが、松浦市「宮ノ下り遺跡」^{註3}の場合は、輸入陶磁器が52.5%、国産の



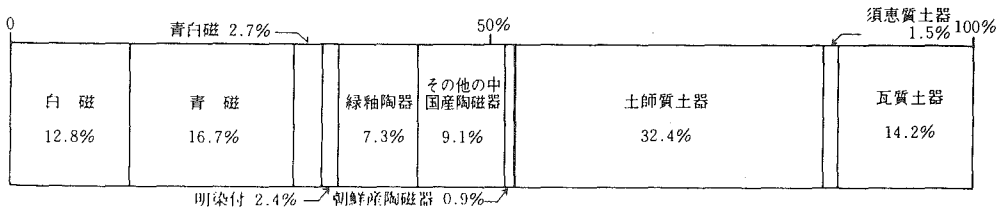
第31図 地区別土器・陶磁器の出土総数(包含層)

	青磁2(1.2)				国陶2(1.2)				
42-8	白磁 27(16.8)	陶3 (1.9)	土師質 88(54.7)				瓦質 15(9.3)	石鍋 24(14.9)	
	輸陶磁32(19.9)		国産 129(80.1)						
	瓦質 1(1.6)								
54水-910-4	白磁 10(15.9)	青磁 8(12.7)	明2 (3.2)	土師質 36(57.1)				石鍋 3(4.8)	
	輸陶磁 20(31.8)		国産 43(68.2)						
	白5 (3.3)	青磁 8(5.4)	土師質 120(80.0)				瓦質 7(4.7)	国陶5 (3.3)	石鍋5 (3.3)
54水-13-3	輸陶磁13(8.7)		国産 137(91.3)						
	陶3(2.4)				国陶3(2.4)				
54水-14-3	白磁 20(16.0)	青磁 21(16.8)	土師質 59(47.2)				瓦質 9(6.4)	石鍋 11(8.8)	
	輸陶磁 44(35.2)		国産 82(64.8)						
	その他9(0.5)								
40-2	白磁 393(20.2)	青磁 141(7.3)	土師質 873(45.5)				瓦質 301(15.5)	国陶58 (3.0)	石鍋 166(8.5)
	輸陶磁 543(27.5)		国産 1,398(72.5)						
	陶6(1.2)				国陶6(1.2)				
41-1-6	白磁 74(15.0)	青磁 28(5.7)	土師質 282(57.3)				瓦質 64(13.0)	国陶19 (3.9)	石鍋19 (3.9)
	輸陶磁 108(21.9)		国産 384(78.1)						
	陶 14(0.2)その他9(0.1)								
合計	白磁 529(18.1)	青磁 208(7.1)	土師質 1,458(50.0)				瓦質 397(13.6)	国陶90 (3.1)	石鍋 228(7.8)
	輸陶磁 760(25.9)		国産 2,173(74.1)						

第32図 地区別土器・陶磁器の組成(包含層)

輸入 987(18.9%)		国産 4219(81.1%)						
青磁 443(8.5%)	白染付 215(4.1%)	輸陶 173(3.3%)	国陶 139(2.7%)	瓦質 189(3.6%)	土師質土器 3844(73.8%)			
青白 17(0.3%)								

第33図 今福遺跡出土の土器・陶磁器の組成(宮崎1986)



第34図 川井川内遺跡出土の土器・陶磁器の組成(川畑1986)

土器が47.5% (そのうち土師質土器が38.6%) という事である。^{註4} 宮ノ下り遺跡は在地の名主または寺院との関係が考えられており、組成の比率では、川井川内遺跡とほぼ同じである。川井川内遺跡や宮ノ下り遺跡が、寺院や在地の名主という、大衆の生活の場とは離れた、いわば特

地区一帯	種類	I 期					II 期	III 期	IV 期	V 期
		白磁皿	黒磁皿	青小皿・杯	同青皿	白磁皿	同青皿	同青皿	同青皿	同青皿
42-8	白磁皿	21					1	1		
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									
34木-9-10-4	白磁皿	5					5		1	
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									
54木-13-3	白磁皿	4					3		3	
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									
54木-14-3	白磁皿	13					8		3	4
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									
40-2	白磁皿	9					9	9	3	2
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									
41-1-6	白磁皿	49					2	1	1	
	黒磁皿									
	青小皿・杯									
	同青皿									
	同青皿									

第35図 輸入陶磁器碗・皿の時期別増減

殊な遺跡であるのに対して、「今福遺跡」は農村集落として位置付けられている。岡遺跡の場合には遺物の組成比率で見ると、「今福遺跡」に近いといえよう。

ただし、I期においては、輸入陶磁器の割合が他期に比べるとはるかに大きいことから、川井川内遺跡や宮ノ下り遺跡と似た性格であったことも考えられる。

輸入磁器碗、皿の時期別増減（第35図）

本遺跡を年代的に位置づけてみたいと思う。ここでは輸入磁器碗、皿によって時期を分けてみた。本来は土師質土器によって時期を決めるのが良いのであるが、県内での編年がまだできていないために、年代的に幅があるが輸入磁器に頼った。本遺跡から出土した輸入磁器をもとに大きく時期をI～V期まで分けた。

I期（11C後半～12C前半） 北宋後半の白磁碗（Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅵ類、Ⅶ類、Ⅷ類）

Ⅱ期（12C後半～13C前半） 白磁皿（Ⅱ類、Ⅷ類）、龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-1類、Ⅰ-2類、Ⅰ-3類、Ⅰ-4類）、龍泉窯系青磁皿（Ⅰ類）、同安窯系青磁碗（Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類）、同安窯系青磁皿（Ⅰ類）

Ⅲ期（13C後半～14C前半） 白磁碗（Ⅸ類）、白磁皿（Ⅸ類）、龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-5b類、Ⅲ類）、龍泉窯系青磁小碗（Ⅲ類）、龍泉窯系青磁杯（Ⅲ類）

Ⅳ期（14C後半～15C前半） 龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-5b類）

Ⅴ期（15C後半～16C前半） 明の染付碗（C群、E群）、明の染付皿（C群）

数の多少はあれ、すべての区で共通する事は、I期に相当する遺物の数が多い事である。そして、数は減りⅡ期、Ⅲ期へと続く。さらに数が減りⅣ期、Ⅴ期となる。I期よりも古い遺物は、全体の数からするとほんの僅かである。つまり本遺跡では、平安時代の後半に本格的な人々の生活が始まり、しかも最も華やかであった。さらに中心は40区の近くにあったと考えられる。そして鎌倉時代から南北朝時代にかけては、I期ほどではないが、人々の活動の場であり続けた。続く室町時代後半から安土、桃山時代にかけては、人々の生活の中心が岡遺跡を離れていたものと思われる。

註1 宮崎貴夫 「歴史時代の土器・陶磁器・滑石製品について」『今福遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会
1986

2 川畑敏則 「当遺跡出土の中世の土器について」『川井川内遺跡』長崎県東彼杵町教育委員会
1986

3 松浦市志佐町高野免に所在する。1986年松浦市教育委員会によって調査報告概要が長崎県教育委員会に提出されており、出土遺物は現在整理が行われている。

4 中田敦之氏教示

土師質小皿について (第36~40図)

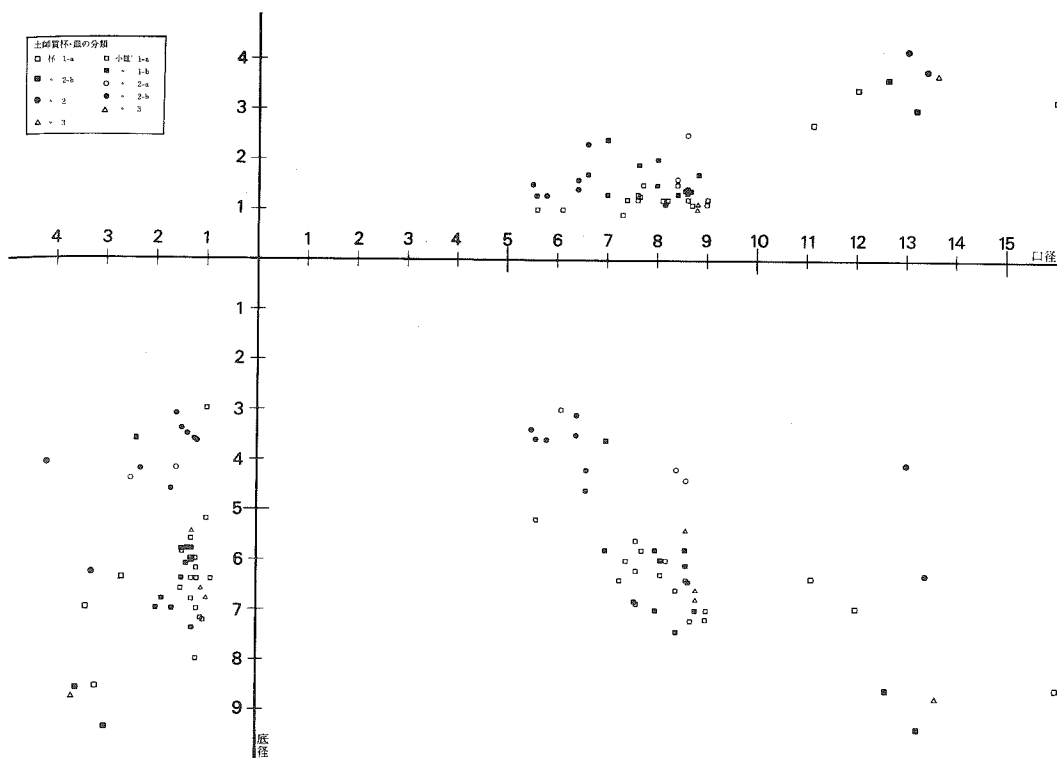
第36図は、土師質土器の組成である。どの地区においても土師質杯が60%前後、小皿は20%から30%にかけてある。では、法量計測が数多くできた土師質小皿の時期について考えてみたい。先に土師質小皿を、1-a、1-b、2-a、2-b、3と分類した。ここでは、それぞれの口径、器高、底径および径高指数(器高÷口径×100)をもとに時期的位置づけを行う。さて、中世という長い時代の歴史が、一緒くたになって閉じ込められた包含層の中から、共伴関係も新旧関係も解らないままに遺物を抜き出し、遺物に年代を与えてしまう作業は非常に乱暴で問題があるが、形態が変化する大きな流れは捕えられるのではないかと考えられる。幸いにも町内で昨年「野中遺跡」が調査され土師質土器が一括して出土した。またこれからは中世遺跡の調査はますます増え、良好な資料が揃ってくるであろう。それらの資料と照らし合わせる事によって細部が解ってくるものと思う。なお、時期を求めるにあたっては、宮崎貴夫氏による径高指数推移註2を使用した今福遺跡出土の土師質土器の編年(第38図)に依拠した。

小皿1-a類は、宮崎氏分類の小皿Aに相当する。法量を平均すると、口径8.8cm、器高1.3cm底径7.0cmとなり、径高指数は15である。今福遺跡におけるⅡ期の小皿の径高指数が17であることから、小皿1-a類は今福遺跡のⅡ期以前の段階に位置づけられる。本遺跡ではⅡ期以前である。

小皿1-b類は、宮崎氏分類の小皿Bに相当する。法量を平均すると口径8.3cm、器高1.5cm、底径6.5cmとなり、径高指数は19である。宮崎氏の編年にあてはめると径高指数19は、指数17であるⅡ期と指数20であるⅢb期の間にくる。本遺跡における時期はⅡ期からⅢ期にかけてである。

	0	50	100
42-8	杯 56(63.6)		皿 29(33.0) <small>その他 3 (3.4)</small>
54水-9.10-4	杯 24(66.7)		皿 8(22.2) <small>その他 4 (11.1)</small>
54水-13-3	杯 81(66.9)		皿 21(17.4) <small>その他 3 (2.5)</small> 不明 16(13.2)
54水-14-3	杯 37(62.7)		皿 17(28.8) <small>その他 5(8.5)</small>
40-2	杯 505(57.8)		皿 161(18.5) <small>その他 32 (3.7)</small> 不明 175(20.0)
41-1-6	杯 165(58.5)		皿 55(19.5) <small>その他 10 (3.5)</small> 不明 52(18.5)

第36図 土師質土器の器種別割合



第37図 土師質杯・皿の法量

小皿2-a類は、計測できる個体数が2点しかなかった。法量を平均すると、口径8.5cm、器高2.1cm、底径4.3cmとなり、径高指数は25である。宮崎氏の編年にあてはめると径高指数25は、「林ノ辻遺跡」^{註3}の指数25と一致する。宮崎氏は林ノ辻遺跡出土の小皿（第39図）をIV期にあてている（第40図）。本遺跡でのIV期に相当する。

小皿2-b類は、法量を平均すると、口径6.1cm、器高1.6cm、底径3.7cmとなり、径高指数は26である。小皿2-a類と同じIV期にあたる。ここで問題になるのが径高指数がほぼ同じである林ノ辻遺跡の小皿と、小皿2-a、2-b類の形態が異なる事である。林ノ辻遺跡出土の小皿は口縁部が肥厚する。際立った高台状の段を持つものがない。体部はほぼ直線的に立ち上がる。それに対し、小皿2-a、2-b類は、口縁部が薄く引き出される。底部に高台状の段を持つ。体部が内湾するという特徴があり、両者は形態的に大きく異なっている。林ノ辻遺跡出土の小皿は、本遺跡出土の小皿の形態にあてはめると1-a類に属している事から、1-a類として処理した小皿の中に、林ノ辻遺跡出土小皿の形態を持つ小皿が含まれていることも考えられる。さて、2-b類であるが、林ノ辻遺跡出土の小皿と並行するものか前後するものか、現在のところ不明である。しかし、形態が大きく異なっているのに対し法量は各部位で近い値を示している事から、地域差ではないかと考えている。資料の増加によって小皿2-b類は位置付けられると思う。

なお小皿2-b類は口縁部に煤が付着する例が多い事から、灯明皿として使用されたと考えられる。

小皿3類は、法量を平均すると口径8.5cm、器高1.1cm、底径6.3cmとなり、径高指数は13である。底部と体部の境に回転ヘラ削りを施しているのではないかと思える物もあり、ていねいな作りである。回転糸切り後に糸切り痕をナデ消しているようである。径高指数から見ると本遺跡におけるⅡ期以前で、I-a類よりも古いと考えられる。

本遺跡出土の土師質小皿の形態変化とおよその時期を考えてみた。古い形態の小皿から並べてみると、3類(Ⅱ期以前)→1-a類(Ⅱ期以前)→1-b類(Ⅱ期～Ⅲ期)→2-a類・2-b類(Ⅳ期)である。(川畑)

中世の遺物の稿をまとめるにあたって、資料の提供、助言等宮崎貴夫氏の御指導を仰いだ。同じ職場の仲間であるが記して謝意を表したい。

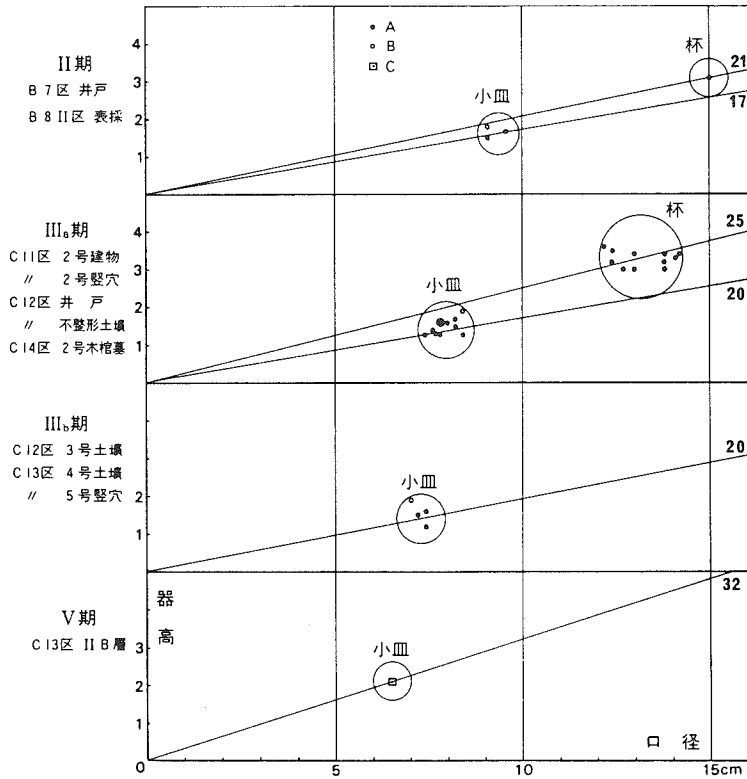
註1 長崎県文化課 町田利幸氏 教示

2 宮崎貴夫 「歴史時代の土器・陶磁器、滑石製品について」『今福遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会

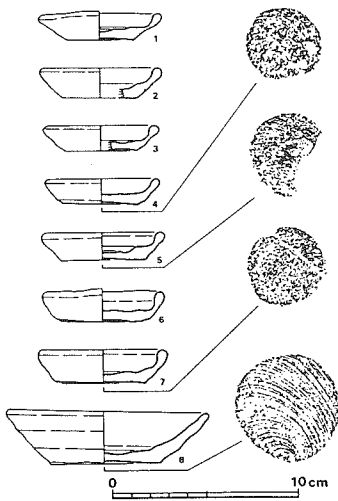
1986

3 秀島貞康 『林ノ辻遺跡』諫早市教育委員会 1983

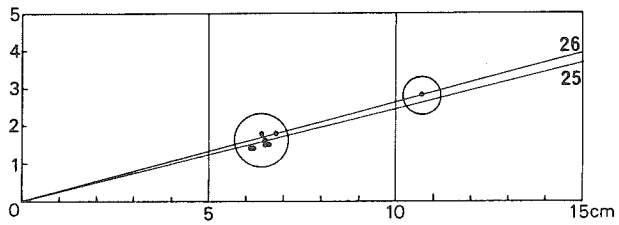
4 宮崎貴夫 「長崎県今福遺跡における中世期の様相」『今福遺跡Ⅲ』改訂版 1987



第38図 土師質小皿・杯法量グラフ(宮崎1986)



第39図 林辻遺跡 2号土壙墓出土土器(1/4)
(秀島1983)



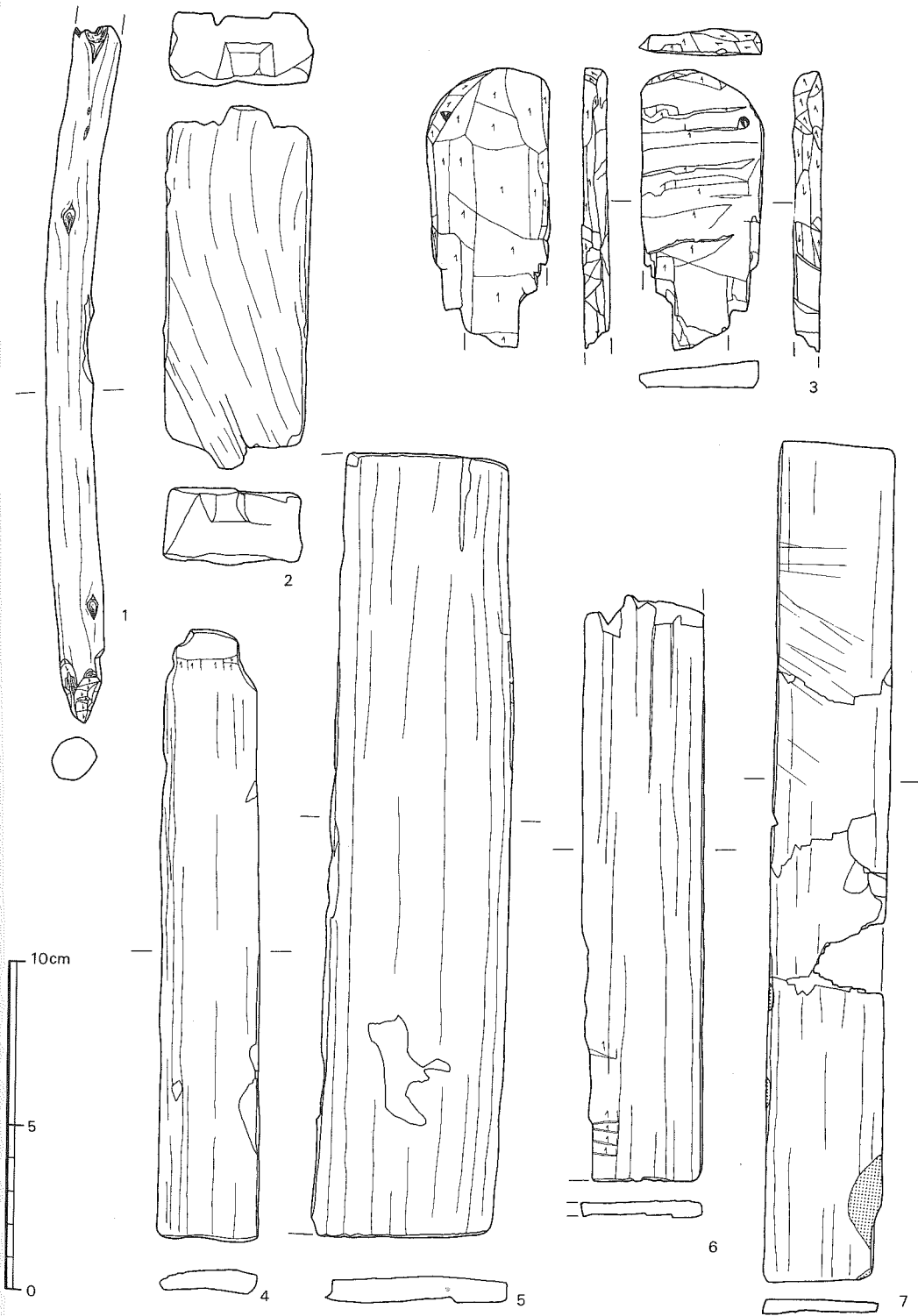
第40図 林辻遺跡出土土師質土器の法量
(宮崎1987)

(2) 中世の木器 (第41~43図)

水田がへり込んだ、小さな谷状の窪地になっている部分の54水-14Tでは泥炭層が形成され木製品や自然木が出土した。これら木製品の加工にあつては金属性の道具が用いられている。

1は木の小枝の端部を鋭利な刃物で削り、尖らせている。全体はゆるくカーブしており半分を欠くが、半弓の未製品かも知れない。2は長さ約9cm、厚さ約2cmの長方形に形を整え、両側にわずかな突起を作り出している。全体的に磨耗しているが、突起部も磨耗して丸くなっている。用途不明だが、組み合わせ部品の一部と考えられる。3は板状に薄く削られ、左側面は丁寧で右側面は粗く削られ、ささくれだっている。上端は丸く削られているが、下部を欠き用途不明。4~7はいずれも薄い板状に仕上げられている。4はわずかに湾曲しており、上部に箍の痕ではないかと思われる凹をもつ。5は縦に割れ欠失しているが、短い側面は平行に切断されている。長い側面は削り調整が行われている。6は厚さ3mmと薄いだが、両面は剥がされた状態である。切痕がわずかに認められる。7は長さ25.2cm、幅3.5cm、厚さ3mmの縦長の板状の定形品である。片面は丁寧な仕上げで、鋭利な刃物による切傷痕が残る。裏面は削り面がやや粗い。若干火に焼けている。8は上面の端部は1回で切断され、下端部は隅丸のヘラ状にうすく削られている。縦に若干割れ一部欠失している。9は板状の両面に鋭利な刃物による切傷痕が多く付けられている。上端部は丁寧に削られ斜行し、片面は面取りされている。この内側にはわずかに白けた部分があり容器の底とも考えられるが、下端部が両側から粗く削られているのは二次的な加工痕であろう。10は8と同様の形態を呈するが削りが粗く未製品かも知れない。11は厚さ4mmの半月形を呈する板状のもので、容器の底にあたる部分と思われる。片面はうす黒くなっており外側にあつたものであろう。湾曲部は面取りが施されている。12は厚さ2~3mmの薄い板の両面に墨書文字が書かれている。割れていることもあり、内容は不明だが、長軸に沿い7cm離れて小さい穿孔が2箇所にある。形状は楕円状になるようであるが、平坦面から斜行する部分は両面から丁寧に削られ尖っている。穿孔してあるところを見ると木筒の役割を果すものであろうか。13は厚さ2mm弱の非常に薄く丁寧に仕上げられた板に、墨書文字が両面に書かれている。文字は判読できないが、これと同一と思われる小破片は他にも出土している。残された縦の縁は両面から面取りが行われている。14は長さ25.4cm、幅4.5cm厚さ6mmの長方形の材の上端部を圭頭にして、左右に2個の切り込みを入れ、頂部から2.5cmの下で一段薄くして丁寧に形を整えた名号札である。表面の頭書には胎藏界大日如来を表わす梵字と「南無阿彌陀佛」が記されている。表面には「為祖父往生福尊也」と書かれ、供養のためのものかも知れない。15は木製の高台付の椀である。内面は木地の上を黒漆で1回塗り、ロクロ引きの痕が残る。外側は木地の上を黒漆をかけ、その上に赤漆を塗りさらに黒漆をかけ仕上げている。

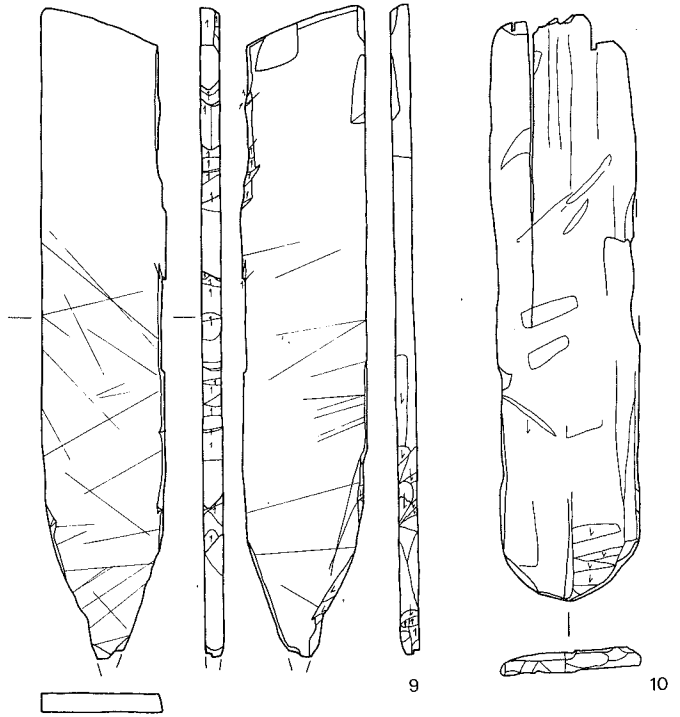
(安楽)



第41図 木器(1)

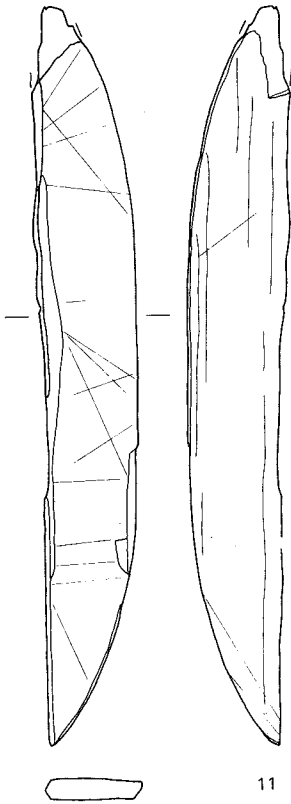


8

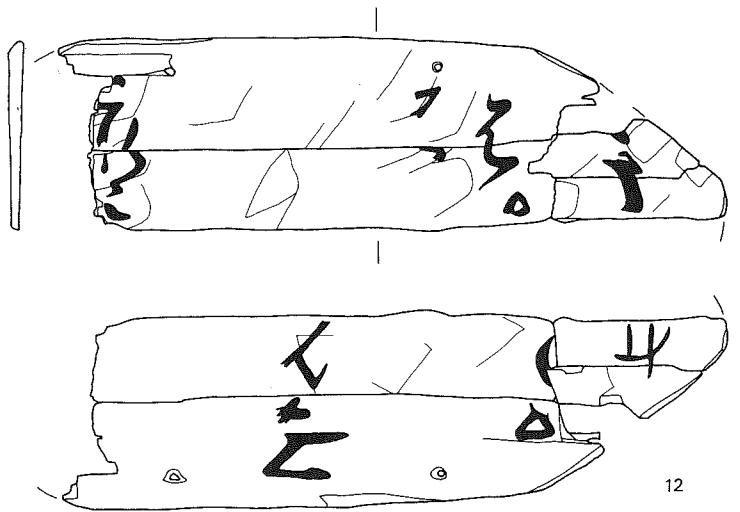


9

10

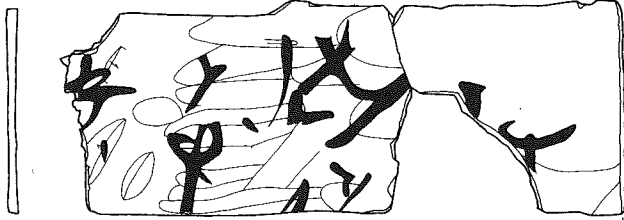
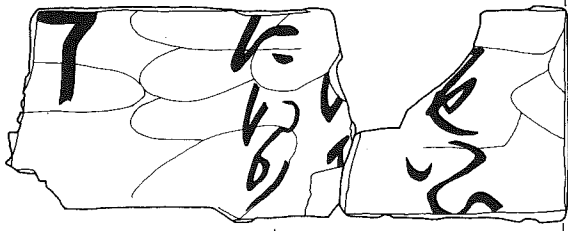


11

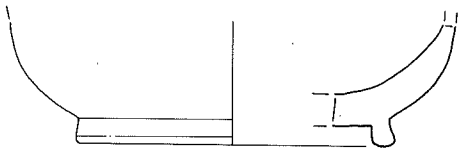


12

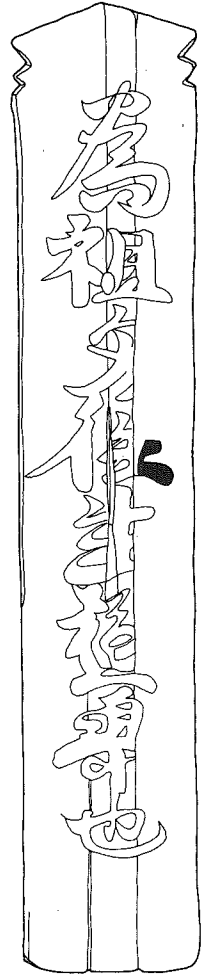
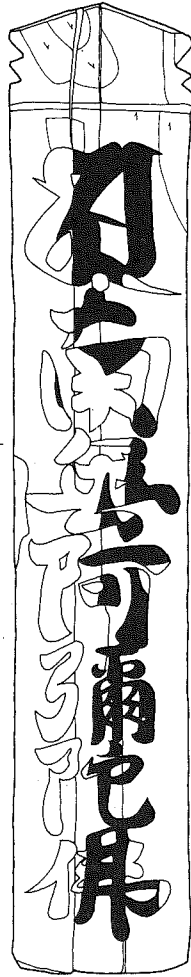
第42図 木器(2)



13



15



14

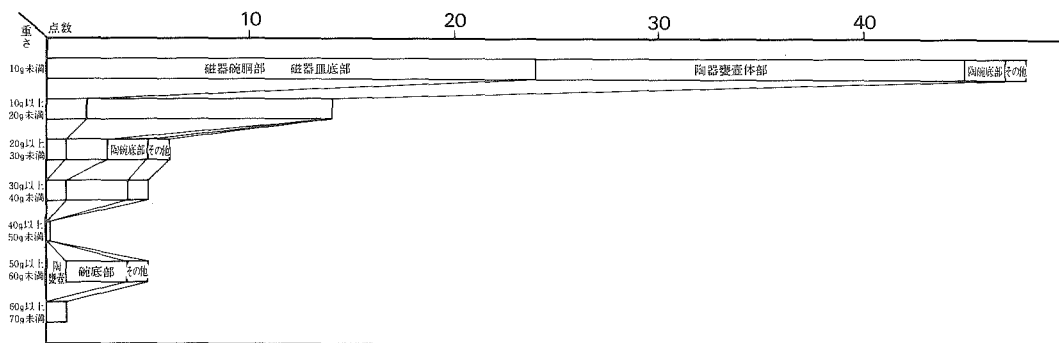


第43图 木器(3)

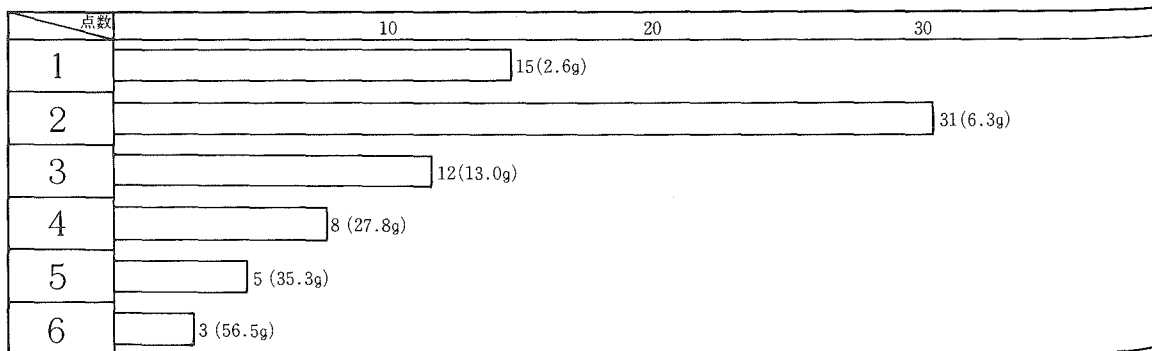
(3) 円盤状陶磁製品について (第44~48図、表2)

第44図は重さと器種との関係をグラフにしたものである。2つの大きなまとまりが見られ、40~50gを境として、40gまでのグループをAグループ、50~70gまでのグループをBグループとする。Aグループを見ると最も軽い10g未満に集中し、10~20gでは大きく減少する。そして、20~30g、30~40gがほぼ同じ数を示している。また、直径 $(\frac{\text{長径}+\text{短径}}{2})$ 別の出土点数(第45図)を見ると、平均6.3gの2cm台が31点と最も多い。次いで、平均2.6gの1cm台が15点出土している。つまり10g未満の集まりはさらに2つに分ける事ができるのである。直径1cm台の製品を極小、直径2cm台の製品を小と呼ぶ。次に、10~20gの製品を中小と呼ぶ。20~30gの製品と30~40gの製品は表材や器種の割合が似ているために、20~40g製品と考えて良いようである。中大と呼ぶ。40~50gの製品は1点だけ(67)で、重さ40.6gを測る。最も近い20~40gに含まれると考えて良いようである。Bグループを見ると60~70gは数が僅かである事から、中心が50~60gにある大型の製品のまとまりと考えられる。大と呼ぶ。以上の事から本遺跡出土の円盤状陶磁製品は、極小、小、中小、中大、大に分類できる。

希望する大きさを作るためにこれらの円盤状陶磁製品は選択されており、重さによって利用される器種や部位が異なっている。極小や小では碗体部、皿底部、壺・甕の体部が占める割合が圧倒的である。中小では、碗体部、皿底部が減り、壺・甕の体部使用の割合が増える。中大で



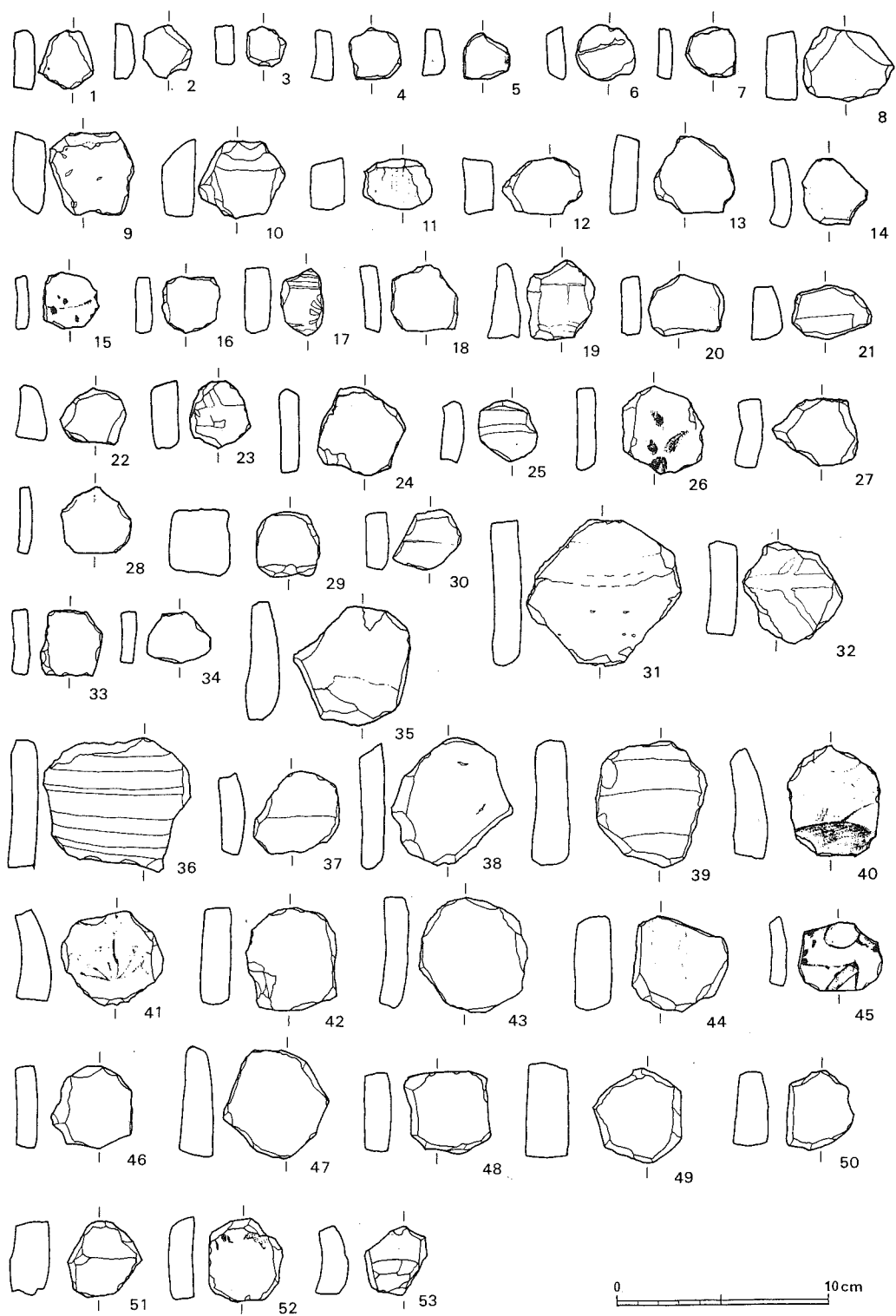
第44図 円盤状陶磁製品の重さと素材の関係図



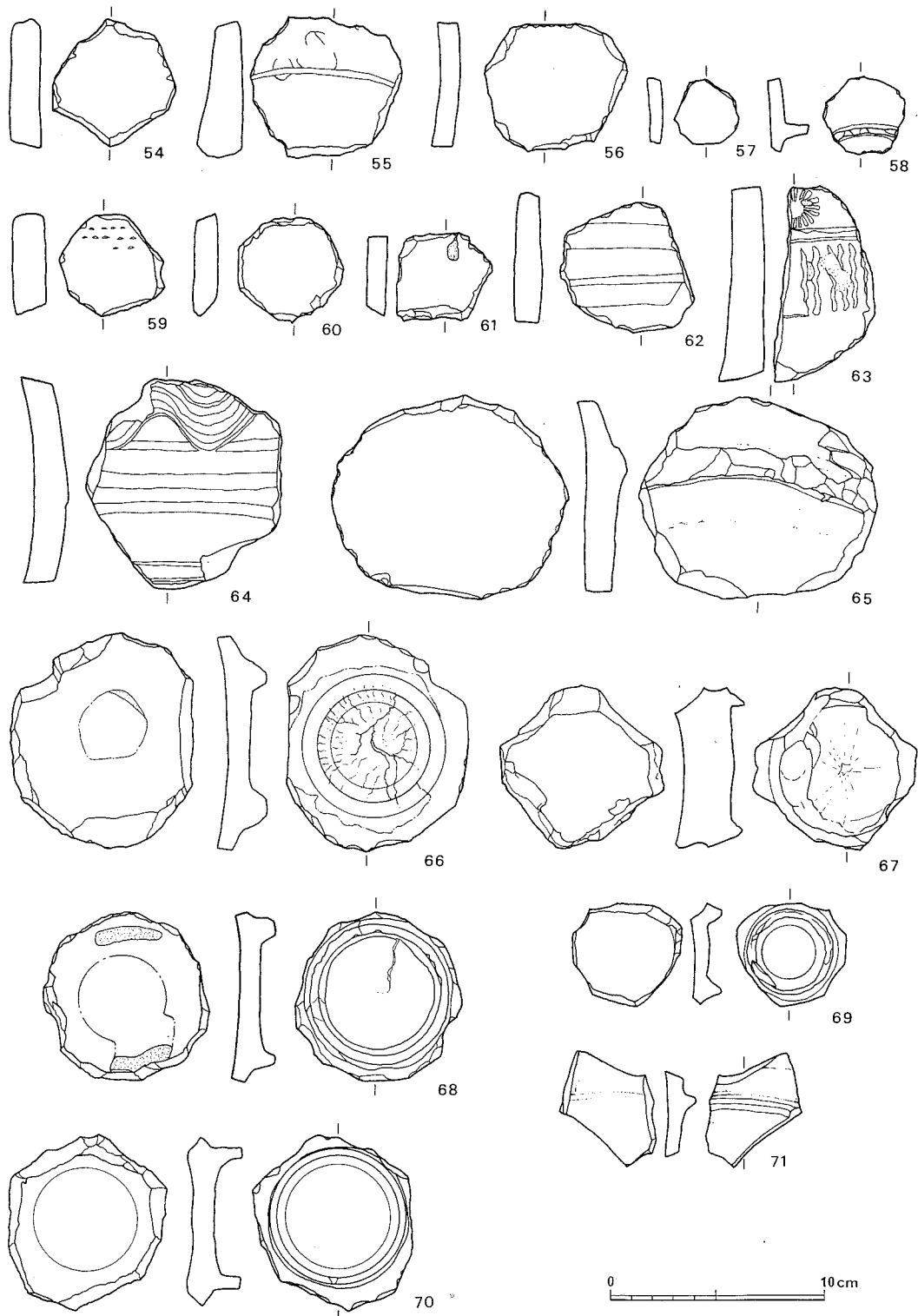
第45図 円盤状陶磁製品の直径と素材の関係図

番号	縦 (cm)	横 (cm)	縦+横 2	厚さ (cm)	重さ (g)	素材	器種	部位	地区-層位	番号	縦 (cm)	横 (cm)	縦+横 2	厚さ (cm)	重さ (g)	素材	器種	部位	地区-層位
1	1.8	1.6	1.7	0.6	2.9	陶	壺?	胴	42-5	40	3.4	2.7	3.1	0.9	11.9	磁	碗	胴	42-2
2	1.6	1.5	0.6	0.6	1.7	磁	碗	〃	〃	41	2.8	3.1	3.0	0.9	9.7	〃	〃	〃	〃
3	1.2	1.1	1.2	0.6	1.2	〃	〃	〃	〃	42	3.1	2.7	2.9	0.9	10.9	陶	甕	〃	〃
4	1.6	1.5	1.6	0.5	2.3	〃	〃	〃	〃	43	3.4	3.2	3.3	0.7	11.4	〃	〃	〃	〃
5	1.4	1.4	1.4	0.6	1.9	〃	〃	〃	〃	44	2.8	2.8	2.8	1.2	12.5	〃	〃	〃	〃
6	1.6	1.8	1.7	0.5	1.6	〃	〃	〃	40-2	45	2.1	2.5	2.3	0.5	3.7	磁	碗	〃	42-4
7	1.5	1.6	1.6	0.4	1.6	〃	〃	〃	41・2-2	46	2.5	2.2	2.4	0.6	5.6	〃	〃	〃	42-2
8	2.1	2.8	2.5	0.9	8.4	〃	甕	〃	42-5	47	3.2	3.1	3.2	0.9	10.6	陶	甕	〃	〃
9	2.5	2.2	2.4	0.9	7.9	陶	〃	〃	〃	48	2.4	2.3	2.4	0.8	8.2	〃	〃	〃	〃
10	2.4	2.5	2.5	2.5	6.9	〃	〃	〃	〃	49	2.9	2.6	2.8	2.2	12.1	〃	〃	〃	〃
11	1.6	2.1	1.9	1.1	4.8	〃	〃	〃	〃	50	2.3	2.0	2.2	1.0	6.3	〃	壺?	〃	〃
12	1.7	2.3	2.0	0.9	5.5	〃	〃	〃	〃	51	2.3	2.2	2.3	1.1	7.1	〃	甕	〃	〃
13	2.4	2.4	2.4	0.8	6.1	〃	〃	〃	〃	52	2.6	2.2	2.4	0.7	6.6	〃	〃	〃	〃
14	2.0	2.0	2.0	0.5	2.7	磁	碗	〃	〃	53	2.1	1.7	2.4	0.8	4.5	磁	碗	底	〃
15	2.7	1.6	2.2	0.4	1.6	〃	〃	〃	〃	54	3.9	3.7	3.8	0.9	15.4	陶	甕	胴	54水・1-2
16	1.7	1.7	1.7	0.6	2.3	〃	〃	〃	〃	55	4.3	4.5	4.4	0.0	35.7	磁	盤	体下	54水・9-1
17	2.0	(1.3)	—	0.7	2.9	陶	甕	〃	〃	56	3.9	4.1	4.0	0.6	15.1	〃	壺?	胴	〃
18	2.0	2.0	2.0	0.5	3.5	磁・ 龍青	碗	〃	〃	57	2.0	1.8	1.9	0.4	2.1	陶	碗	〃	54水・10-3
19	2.4	1.8	2.1	0.9	5.0	陶	?	〃	〃	58	2.4	2.3	2.4	0.5	4.5	磁	皿	底	54水・10-2
20	1.8	2.3	2.1	0.6	4.1	磁	碗	〃	〃	59	3.1	3.1	3.1	1.1	14.5	陶	甕	胴	42-2
21	1.7	2.2	2.0	0.9	4.8	〃	〃	〃	〃	60	3.2	3.2	3.2	0.7	10.7	〃	〃	〃	41・2-1
22	1.6	2.0	1.8	0.8	3.6	〃	〃	〃	〃	61	2.7	2.6	2.7	6.5	8.1	〃	〃	〃	〃
23	2.1	1.7	1.9	0.8	3.9	陶	甕	〃	〃	62	3.9	3.9	3.9	0.8	16.5	〃	〃	〃	42-4
24	2.6	2.5	2.6	0.6	5.4	〃	〃	〃	〃	63	5.9	(2.7)	—	1.1	(26.4)	〃	〃	〃	40-1
25	1.9	1.7	1.8	0.7	3.1	〃	〃	口縁 下	〃	64	6.4	5.8	6.1	1.2	59.7	〃	〃	〃	54水・14-2
26	2.0	2.4	2.5	0.6	5.4	磁	皿	底部	54水・1-1	65	5.9	7.2	6.6	1.2	56.7	磁	皿	底	42-3
27	2.0	2.5	2.3	0.6	5.2	陶	甕?	胴	54水・13-2	66	6.6	5.6	6.1	0.8	53.0	〃	碗	〃	42-2
28	2.0	2.1	2.1	0.4	1.8	磁	碗	〃	54水・9-2	67	5.0	4.9	4.9	1.5	40.6	〃	〃	〃	54水・1-1
29	2.8	1.9	2.0	1.8	7.8	瓦	—	—	54水・13-2	68	5.2	5.0	5.1	0.6	31.1	〃	〃	〃	42-2
30	1.8	(1.8)	—	0.7	3.5	陶	甕	胴	40-1	69	3.1	3.3	3.2	0.9	9.0	〃	小碗	〃	30-3
31	4.4	4.5	4.5	0.9	24.2	〃	〃	〃	42-2	70	5.1	4.8	5.1	1.7	32.6	陶	碗	〃	54水・14-2
32	2.9	2.9	2.9	0.8	8.9	〃	〃	〃	〃	71	2.9	2.9	2.9	0.9	8.2	磁	皿	〃	54水・1-2
33	2.0	1.7	1.9	0.4	3.6	〃	碗	〃	42-1	72	4.8	4.6	4.7	1.4	24.6	〃	碗	〃	42-3
34	1.6	1.8	1.7	0.4	1.9	磁	〃	〃	〃	73	4.6	4.5	4.6	1.8	25.2	〃	〃	〃	〃
35	3.6	3.5	3.6	0.9	12.9	陶	〃	〃	42-2	74	5.4	4.6	5.0	1.7	37.0	〃	〃	〃	54水・1-1
36	4.0	4.1	4.1	0.8	23.3	〃	甕	〃	〃	75	6.1	5.6	5.9	1.7	50.6	〃	〃	〃	30-2
37	2.5	2.6	2.6	0.7	5.4	〃	?	〃	〃	76	5.3	5.3	5.3	0.6	25.4	〃	ハマ	—	54水・1-2
38	3.8	3.4	3.6	0.7	13.2	〃	甕	〃	〃	77	(2.3)	4.5	—	0.4	6.0	〃	〃	—	〃
39	3.8	3.3	3.6	1.0	19.6	〃	〃	〃	42-3	78	4.6	4.6	4.6	1.3	34.0	〃	〃	—	54水・14-1

表2 円盤状陶磁製品の計測表



第46图 円盤状陶磁製品(1)



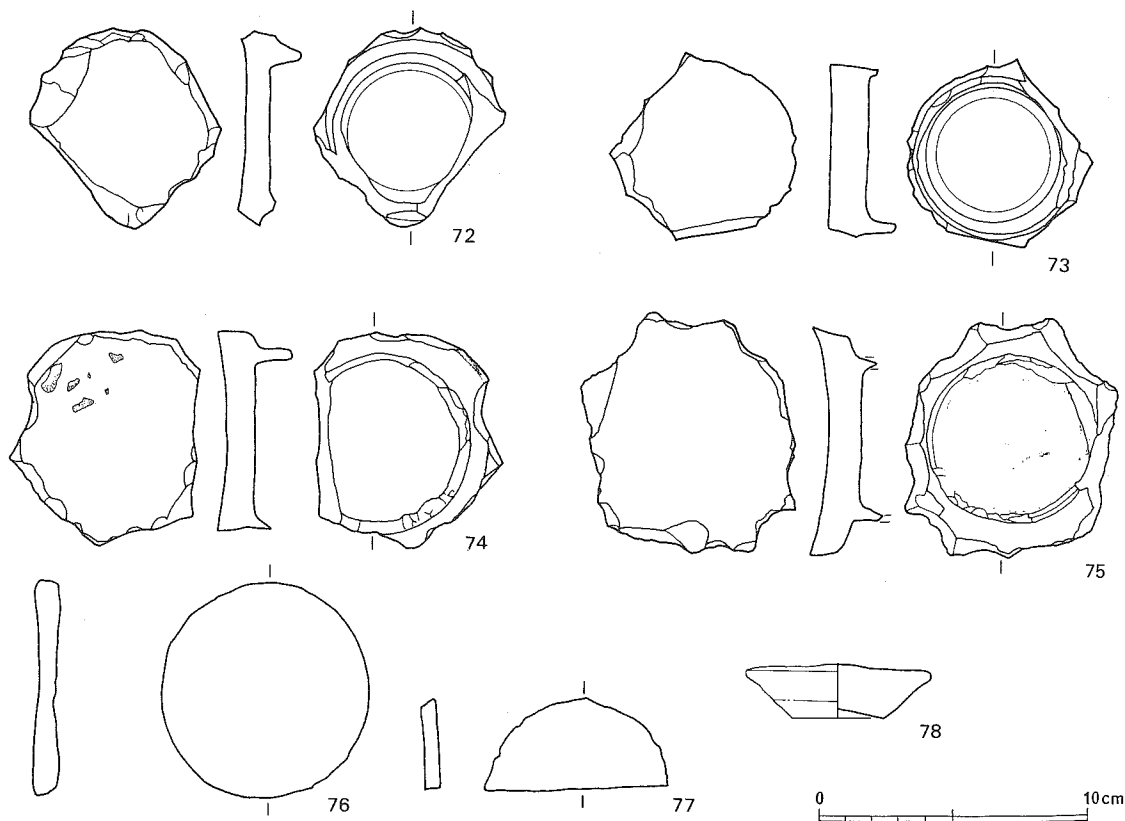
第47图 円盤状陶磁製品(2)

は碗底部の割合が急に増える。大では、さらに碗底部の割合が増え中心を占める。

次にこれら円盤状陶磁製品の用途であるが、長崎県南高来郡西有家町風呂川遺跡^{註1}から出土した円盤状陶磁製品についての研究があり、宮崎氏は遊戯具であると考えている。筆者もその考
えにたち本遺跡から出土した円盤状陶磁製品のうち、極小をおはじき類（指・手を使う遊戯具）、小、中小、中
大のものを穴一系統（主に手を使う）の遊戯具、大のものを石けりを含めたメ
ンコ類（主に手・足を使う）の遊戯具と考える。

円盤状陶磁製品の出土した地点を見ると42区に集中し、全体の70%を占める。これは、人家
が近くに集中し、三叉路が傍にある事、42区の傍にある道は東側が坂道で、平端部のちょうど端
にあたる事などが考えられる。
(川畑)

註1 宮崎貴夫 『風呂川遺跡』西有家町文化財調査報告書第1集 1982



第48図 円盤状陶磁製品(3)

4 岡遺跡発見の青温石製石塔

天正2年(1574)切支丹焼き討ちで、灰燼と化した幻の大寺。郷村記(彼杵村)に「彼杵郡で最大堂であり大御堂と号し、一郡の地主として彼杵山大安全寺と称した。」とある古寺跡の探究に努力された。町文化財保護委員(故)田崎一郎氏は、蔵本郷字岡、彼杵中学校裏の道を北へ鉄道を越してすぐ左側の田の石垣に、青温石で縦横30cmの四角形の刻みのある石を発見し、旧安全寺の場所を示す証拠とされた。この石は、^{註1}今次の発掘の結果、宝徳3年銘の宝篋印塔基礎であり、その底面を見せていたのであった。

宝徳3年銘(1455)宝篋印塔基礎(第49図)

見事な8葉の反花座の彫刻があり、高さ24cm、幅32.5cmの大きさといい、青温石の石質といい岡遺跡を代表する石塔である。

(宝徳三年・一四五五年)		宝	直	乘	先	右	心	三
		徳	到	此	考	伏	佛	界
		三	宝	願	松	願	及	唯
	孝	載	所	輪	岩		衆	一
	子	未辛	者	而	林		生	心
		九	也	不	公		是	心
	敬	月		歴	禪		三	外
	白	十		化	門		無	无 ^無
	一	城			差		別	
	日	而			別		□ ^透	

岡遺跡
宝篋印塔基礎

(高さ24×幅32.5cm)

碑文について、満井録郎氏は、織田得能著仏教大辞典によれば「三界唯一心……無差別」は「古来華嚴宗の偈と云い習えども、此の経中にこの成語あるにあらず。」であり、また謡曲の「放下僧、柏崎」にも用いられていると言う。後の「化城を経ずして直ちに宝所に至る。」については法華経第三の化城喻品から引用していると言う。彼杵郡の中世寺院の実態は不明の所が多く、この碑文について軽々な解釈はできない。^{註2・3}

正平21年銘(1366)五輪塔地輪(第49図)

昭和62年1月、事前調査の際県文化課文化財担当職員が、前記の宝篋印塔基礎のある田より道を隔てて右側の田の石垣に、下記の銘を出して積まれている地輪を発見され発掘の運びとなった。^{註2}

高さ24cm、幅37cmの大きさがあり、町内では現在最も古い石塔の一つである。正平年号は南朝年号で、正平17・18年、彼杵一揆連判状にみえる。「彼杵弥土与丸代兵衛五郎・同清水彦三郎

紀清久・同岡五郎紀清種・同嶋田弥三郎紀清俊」のいずれかに近い人物であろう。^{註3}

沙弥について、大石一久氏は川勝氏の著書より引用して、「僧侶でなくて地方の武士階級、少なくとも名主層以上の武士の在俗出家入道したものと見るべきであろう。」と述べられている。^{註4}以上のことから、南北朝時代、南朝方に属する心阿入道という彼杵の有力武士の墓石と考えられる。^{註5}

(正平二十一年 一三六六年)	岡遺跡 五輪塔地輪	右造立志者為	沙弥心阿滅罪	生善往生極樂	故也	正平二十一年 六月五日	教子等敬 白

(高さ24×幅37cm)

その他今次発掘調査により、近くの土中から宝篋印塔基礎1基と五輪塔地輪2基が発掘された。

正平21年銘 (1366) 宝篋印塔基礎 (第49図)

素輪大姉の法名である。石質はさほどではないが、高さ30cm、幅38cmの最大級の大きさであり、また現在最も古い石塔の一つである。正平は南朝年号であるので、南朝方の彼杵氏を名乗る有力武士の奥方の墓石であろう。

康応元年銘 (1389) 五輪塔地輪 (第50図)

林公大姉の法名であり、高さ14cm、幅30cmの大きさである。康応は北朝の年号であるから、この頃彼杵の武士団は北朝方になっている可能性がある。

寛正2年銘 (1461) 五輪塔地輪

歸真宗澄禅門の法名で、禅門に変わっている。また、大安全寺関係で岡遺跡に近接する大門古墓地に應永5年(1398)の地輪の法名が地禅禅門となっていることから、南北朝末～室町時代前期に何らかの変動があり、彼杵山大安全寺に宗旨の変化があった可能性も考えられる。

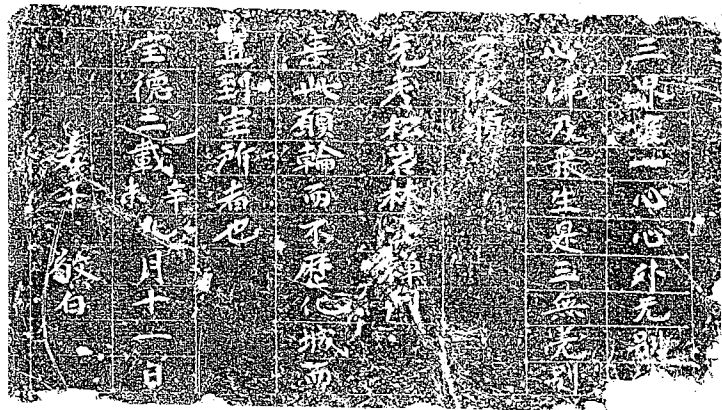
(寛正二年 一四六一年)	(婦) 歸真宗澄禅門	五輪塔地輪	(康応元年 一三八九年)	林公大姉	五輪塔地輪	(正平二十一年 一三六六年)	素輪大姉靈	岡遺跡 宝篋印塔基礎
	寛正二年 辛巳十月七日 孝子白敬			康応元年			正平二十一年 八月日	

(高さ16×幅34cm)

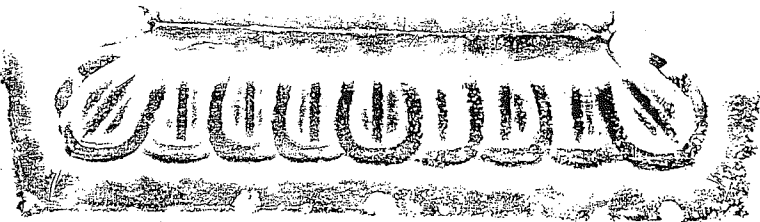
(高さ14×幅30cm)

(高さ30×幅38cm)

以上、岡遺跡で発見された青温石の中世石塔は五基に過ぎないが、古代から中世に彼杵郡の地主として栄えたであろう幻の大寺、彼杵山大安全寺の位置の確認と、切支丹焼き討ちにより焼滅した中世の彼杵に一条の光を与えてくれた意義は大きい。(開)



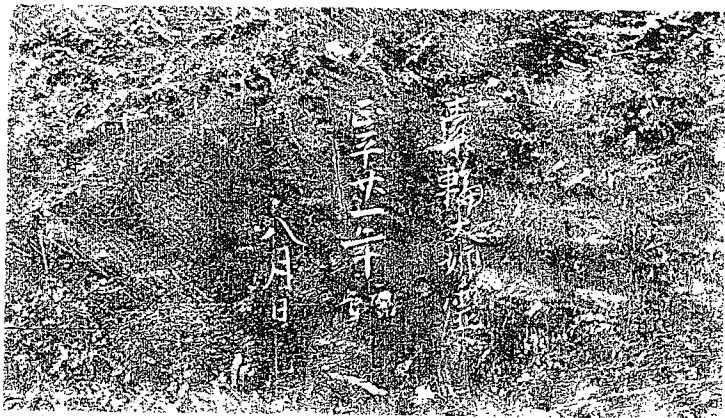
宝篋印塔基礎



台座連弁

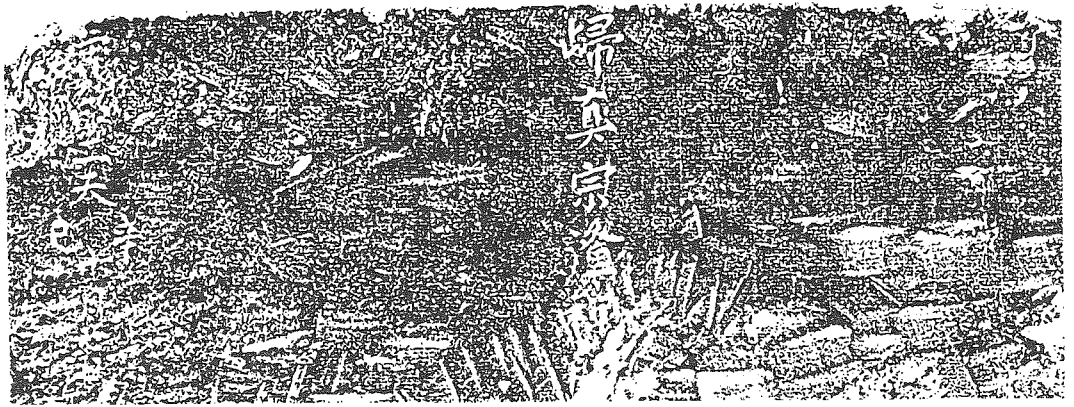
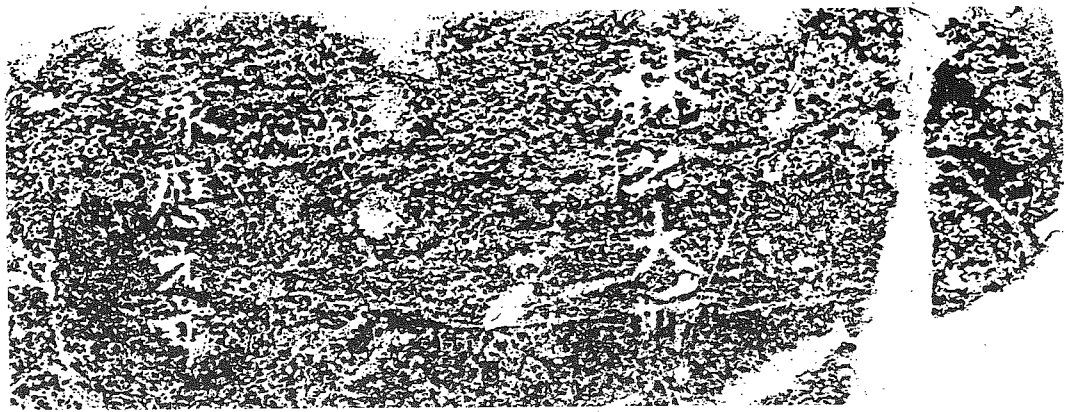


五輪塔地輪



宝篋印塔基礎

第49図 岡遺跡発見の青温石製石塔拓影



第50図 岡遺跡出土五輪塔地輪・拓影(約4)

- 註1 田崎一郎 「彼杵山安全寺の寺跡探究」『大村史談』26号 1984
- 2 満井録郎 「東彼杵町遺跡調査」『大村史談』31号 1987
- 3 満井録郎 「東彼杵町蔵本郷旧安全寺跡から出土した中世墓石の考察」
『大村史談会 月報』1988 1.25
- 4 川勝政太郎 「中世における石塔造立階級の研究」『大手前女子大学論集』4号
- 5 大石一久 「地方における中世石塔造立階層の問題について」『史迹と美術』572号
—— 長崎県大村地方の場合 ——

IV 彼杵地方における中世の様相

彼杵郡と藤津郡の一体性

大村氏の始祖は藤原純友の孫直澄で、正暦5年(994)藤津・彼杵・高来の三郡を賜わって大村に下向したとされている。この話は戦国時代に有馬氏の版図を示す領域でもあるのでこれに仮託したのかも知れない。しかし、この三郡には仁和寺の荘園が広汎にひろがっていた。藤津荘は仁和寺の重要な荘園であった。伊佐早荘は本所一円領も含めた荘園がかなり広いと推定される。島原半島では高来東郷に仁和寺領が点在する。彼杵荘にも仁和寺彼杵雑掌が置かれていた。明確に示す史料がないので、筆者は大村史談7号(昭47.2)で彼杵郡仁和寺領について論じたことがある。仁和寺領成立の背景は貞観の事件でふれる。以上のような三郡の一体感が背景になっているとも考えられる。

幕藩体制になって佐賀藩藤津郡と大村藩彼杵郡となった。大村藩の軍事体制は佐賀藩を仮想敵国として整えられた。このことも手伝って住民の意識は両郡の連帯性から遠ざかってしまった。しかし、経済的・社会的なつながりは政治的障壁を越えて生き続けてきた。彼杵港への物資の出入、坂本浮立の藤津起源説、農業における八天様信仰も藤津を向いた祭りである。

これは水陸交通の要地を含んだ彼杵村の地理的位置である。有明海・鹿島・塩田川・塩田・嬉野・彼杵・大村湾・五島灘・東シナ海と二つの海を結ぶ交通線は中世から古代・原始と時代を遡るほど重要さを増してくる。

日本三代実録貞観八年(866)7月15日の項に「基肄・藤津・高来郡の郡司と彼杵郡の豪族永岡藤津が共謀し、新羅の珍寶長と組んで対馬を撃取ろうとした」とある。事件は未遂に終わったが、偶然に起きたものではない。9世紀後半、新羅船は九州沿岸を荒しまわっていた。朝廷はこの動きに対応し沿岸警備を厳にする一方、貞観15年(873)佐賀県呼子の沖に浮かぶ加部島の田島神社の神階を正四位下にあげ、神の加護を乞うている。これは肥前一宮で佐賀平野の農業神でもあった川上の淀姫神社が正五位下だったのと比較して、海上神がいかに重要視されたかがわかる。

話は元に戻して、前の未遂事件についてひとつの疑問がある。有明海に面した三郡の郡司はどうして船を調達したのだろうか。有明海の船も技術も玄海灘を航行する能力はない。とすれば、朝鮮半島と往復できるのは彼杵郡の豪族である。永岡藤津という人物の存在価値は大きかったと思う。この豪族が彼杵村の瓢塚にみられる系統か、大村市の旧福重村の黄金山古墳の系統か判断の史料はない。

青方文書に鎌倉時代後期、正応4年(1291)塩田大貫の下人が商売のため五島の青方に行った。五島で山賊のため殺されるという事件が起っている。この時、川棚の住人秋丸恒安も五島に渡っていたが、自分に嫌疑をかけられ困っている。正しい判断ができる役人を派遣してほ

しいという申状がある。

中世になってもこのような経済交流が活発に行われていたことを示すものである。

以上述べたように、彼杵の歴史を説明するためには藤津郡と密接な関係があったことと交通線の重要性を前提としなければならない。

彼杵三郎久澄

鹿兒島県日置郡吹上町は伊作氏の発祥地である。伊作系図によると、

「先祖貞時は九州の総追捕使となって薩摩・大隅・日向と肥前国に領地を持ち羽高（鹿島）にいた。この四世の孫良道の時、薩摩の川辺郡に土着した。良道の嫡女は菊池四郎経遠の妻となったが、経遠が死んだ後、和田八郎親澄の妻となっている。親澄は藤原純友の弟伊予守遠純の子孫で、当時、川辺郡の湯の浦、田中に居城していた。良道の次女は彼杵三郎久澄に嫁し、塩田三郎秋澄を生んだ^{註1}」

とある。貞時は疑わしいが、良道は天永3年（1112）に伊作郡司に補任されている^{註2}。この系統を引く「伊作平四郎則澄^{註3}」「則澄叔父重澄^{註4}」は実在の人物である。このことから良道の関係を述べた伊作系図の記事は信頼できる。この記事は彼杵氏に関する初見である。

彼杵氏とはどんな豪族なのか。

伊作良道と同じころ仁和寺領藤津荘内に伊佐平次兼元がいた。和歌山県根来寺の創始者を覚鏝という。大伝法院本願上人あるいは密厳上人ともいう。密厳上人行状記に「父ハ府知津ノ庄ノ総追捕使伊佐ノ平次兼元、母ハ橘氏、同キ国豪家有徳ノ娘也^{註5}」とある。同伝によると覚鏝の誕生は1096年で、承保2年（1107）に13歳で仁和寺に入った。父の伊佐兼元と伊作良道は同時代ということになる。両氏の先祖については類似性が多く、刀伊の入寇（1019）で活躍した平為賢に比定される。この両名は同一人物か、違ってても相当に近い関係の同族と考えられる。覚鏝の出家から12年後、元永2年（1119）、平直澄が誅されるという事件が起こった。仁和寺の藤津御領内での事件である。この時、捕虜となって京都に連行されたのは直澄の舅紀権守、源常弘がいる。常弘は五位であった^{註6}。

同じ時期に国司格の紀、源、郡司の伊作、豪家有徳の橘氏が藤津郡にいたことになる。彼杵氏や塩田氏もほぼ同程度の豪族であったと考えられる。

又、彼杵、塩田、鹿島、薩摩は地理的交流だけでなく、人的交流をもっていたことのあかしとなろう。

彼杵荘と彼杵氏

彼杵三郎久澄は彼杵の根本領主であった確証はないが彼の同族が彼杵地方を支配したことは間違いない。「澄」という伊作一統にも普及していた通字は、大村・有馬系図に見出されるが彼杵氏では消えて南北朝から文明までは、「清」が通字として用いられている。

この後の彼杵氏の史料は鎌倉時代後期に入る。長崎県史古代・中世編の「東福寺文書の肥前国彼杵庄文書目録案」・「正慶乱離志裏文書の肥前国彼杵庄文書目録」・「深堀文書」などに、彼杵郡の在地土豪の名があげてある。そして各村ごとに豪族について簡単な解説がある。^{註7}

正和4年(1315)鎮西探題北条政顕は彼杵庄雑掌と彼杵次郎入道行蓮の惣檢以下の相論に対し裁許している。^{註8}

この発端は文永5年(1268)に彼杵庄領家代が一度檢注(惣檢)を実施する旨、管下の小地頭に通知したところ、小地頭の反発を買い幕府に下知してもらったことに始まる。

一度檢注というのは一斉檢地と解される。莊園領主は一定期間を置いて所領の檢注を行い年貢以下の賦課をきめていた。一方、現地の土地管理者である名主達にとっては隠し財源がわかるので反発するのは当然だったろう。この事案がもたもたしているうちに、文永・弘安の役で、名主、小地頭は軍役、その後の異国警固番役を勤めたので、年貢以下の済物まで滞る結果になった。

この種の裁許状は佐世保から大村北部にわたる彼杵郡の豪族達に出されており、彼杵氏だけではない。たゞ波佐見には豪族がかなり存在するが裁許状はない。^{註9}

以上のような広い範囲に惣檢を実施しようとした領家は誰か。

九条家領彼杵庄というのは峰殿(九条道家)置文として知られていたが、何処にあるという研究が見当らなかった。筆者は昭和47年2月、大村史談7号に「中世彼杵庄の一考案」として発表した。

以下はこの発表を摘記しながら述べる。

峰殿置文は建長2年(1250)に九条道家が書いたものである。^{註10}この時、彼杵庄は彼の孫娘で四条天皇の女御となった宣仁門院彦子に譲られた。彦子の死後、この莊園は九条家にもどり、「建武3年8月24日、左大将家政所注進 御家領事 御当知行分」に「肥前国彼杵庄 領家職地頭中分也」とある。^{註11}

九条家は五摂家の一つで九条兼実が始祖である。彼は源頼朝と親交があり、朝幕の融和のため鎌倉幕府の創設期に苦勞した。頼朝と姻戚関係もあって、兼実の孫道家も摂家将軍としてその子頼経を鎌倉に遣わしている。それだけに頼朝は勿論、北条氏からも多くの所領が寄進された。

そこで、九条家領彼杵庄は、九条家本来のものか、鎌倉関係の寄進になるものか。

後者はたいていが平家没官領であった。

九条家の所領目録に「地頭請所」とあるのは源頼朝や北条氏から鎌倉武士が恩賞として請所を宛行われたものである。その上に本家職か領家職が設定され、そのいずれかゞ九条家に寄進されたものである。

彼杵庄にはその註記はない。とすればそれ以前摂関家領として平安後期まで遡れそうであるが立証は難しい。

次に九条家が彼杵荘で持っていた所職は何か。前出の九条道家処分状には書いてないが建武3年の知行目録に領家職と註記がある。

このようなことで、領家とは九条家のことである。

地頭達の年貢・所当の滞納が一般化すると荘園領主は所領を地頭方と領主方に分けて収入を確保しようとする。これを下地中分という。この時期は不明である。隣の杵島郡にいた渋江氏は長島荘の惣地頭であった。この豪族は鎌倉幕府でも地位の高い家であったが、地頭中分は永仁2年(1294)である。地頭勢力が強くない彼杵荘ではもっとおくれたと思う。地頭中分のやり方は2方式がある。坪分中分といって村ごとに分けるやり方と分直し中分という、組替えて一円に支配できるようにする方法である。彼杵荘の場合は前者の方式によった。

彼杵村も中分地の一つであった。筆者は大村史談に発表の際、「彼杵村は別の支配がある」と書いた。これは、当時、仁和寺領を想定し真言寺院の存在を予想していたからである。ところが、その後十数年発掘・研究が進むと真言寺院の存在が稀薄になってきた。このことから、彼杵次郎入道行蓮の地頭方と「正慶乱離志裏文書」にある、「彼杵弥次郎・同弥三郎・同弥六・同七郎・同四郎九郎妻」を領家方の人物と考えるに至っている。たゞ、何処でどう分割したのかはわからない。^{註12}

これらの豪族の生きた時代は正中2年の文書に出て来る。鎌倉時代の終りである。

次の南北朝の動乱の中に九条家彼杵荘領家職は消滅した。たゞし領家職だけは残り、南北兩朝を転々とした。

豪族の盛衰もあったろうが正平17・18年(1362・63)の彼杵一揆連判状に「彼杵弥士与丸代兵衛三郎、同清水彦三郎紀清久、同岡五郎紀清種、同島田弥三郎紀清俊」が名を連ねている。

応永3年(1396)4月付「九条経教(道教の子)家領当知行」によると彼杵荘は勿論他の九州荘園の姿はなくなった。

彼杵氏はその支配を維持しながら戦国時代のはじめ、彼杵遠江守清原清男に至る。彼は文明元年(1469)に宗氏を介して朝鮮と交易したと海東諸国記に出ている。この貿易の基礎は東彼杵地方というより、藤津郡から有明海方面の経済圏を考えねばならぬであろう。

文明2年(1470)〈治乱記〉あるいは6年(1474)〈大村家記〉に大村は有馬貴澄の侵攻を受ける。これを契機として彼杵氏の支配は消滅してしまった。そのころ底辺部は新しい時代の底流が大きくなりつつあった。これが郷村制である。

あんせん

安全寺をめぐる諸問題

彼杵山安全寺は今はない。大寺と呼ばれた寺跡だけである。この寺は最初、彼杵中学校の北、蔵本郷字岡にあった。天正2年、キリシタンによって焼かれてから約90年たった万治3年(1660)に再建された。草創と再建の場所はよくわからなかったが、ほぼ同一の地であることは確実となった。再建の寺地は水田の中で不浄を忌んで三遷したのである。

安全寺は明治初年廃仏毀釈によってこわされ、史料も散逸してしまった。幕末の郷村記が概要を伝えている。

1. 彼杵村記の寺社と由緒の項

2. 宮村記寺社崇聖山正蓮寺の大阿弥陀如来について「木座像、衣栗色肌金彩色極古仏」とあり腹内の銘文をあげている。

于時永正五天己巳七月下旬吉日^{註13}

肥前国彼杵村宝杵山妙音寺住山

作者有池叟

大檀那宮村能登守通貞

大願主大安住山令玄首座誌之

以上が文書としての史料である。

寺の名称

江戸時代 彼杵山安全寺大御堂 大安全寺

室町時代 大安寺

室町以前 大阿弥陀堂

永正5年当時は大安寺は禅宗であった。

このことは令玄首座によってわかる。首座というのは禅宗寺院の役職名であり、一山を指導する立場にあった人である。さらに宮村通貞は文明12年大村純伊の旧領回復戦に功を立て、一時彼杵村を知行していた。彼の本拠は佐世保市内旧宮村で、こゝにあった禅宗崇聖寺のため大安寺の令玄首座に作仏を頼んだものであろう。

彼杵中学校の北の山麓線に千寿寺跡がある。こゝにあった墓石に千寿禅寺と書かれたものがある。残念ながら「于岢永……」とあって下が欠けている。室町時代であるから、「永享」か「永正」であろう。宮村崇聖寺と千寿寺共に永正年間には禅宗であった。ではこの禅宗寺院は何時まで遡れるであろうか。又、大阿弥陀堂との関係はどうなるだろうか。

大阿弥陀堂は行基伝説を持ち、宝杵山妙音寺の宝杵から、室町時代にはこの伝説はあった。弘法大師草創とも伝えているが、行基伝説との関係はわからない。

こゝで気になるのは「一郡の地主として」という表現である。謡曲の熊野に京都の地主権現をあげている。大村市岩松駅の近くに「地主大明神」があり「ちゅっさま」といつている。土地神は仏教側からもあったが、神道側では昊天社^こがあった。安全寺には幸天大明神が勧請されていたが、創建は古い。

郷村記（波佐見村下）の幸天三所大明神の項に

当社幸天三所大明神は観応年中（1350.2～1352.9）彼杵より金谷山に遷座とある。このころは足利直冬が九州に入り、南朝・北朝の対立に割り込んで三ツ巴戦を展開した時期である。彼杵郡では波佐見俊平、波佐見吉平、伊関彦四郎間で動揺があった。^{註15}

これは彼杵郡全般もほぼ同じ状態だったろう。金谷山は行基伝説をもち、聖武天皇の勅願と伝える金谷山大権現がある。同じ関係を持つ大阿弥陀堂の神を情勢の激化に備えて遷座したものであろう。

次は昊天社（幸天社）の起源に関するものである。郷村記（竹松村）の昊天社の項に「一説ニ昊天大明神本地彼杵大御堂、本尊阿弥陀仏垂迹六体ナリ」とあって彼杵が本場のような書き方である。又、同社の福田文書をあげ、「元徳四年（1331、正慶元）、平家勝が、福田三郎入道に、肥前国彼杵荘鎮守幸天大明神の九月九日会に流鏑馬以下の神事を勤めるよう命じている。」これによると昊天社は彼杵荘の鎮守であった。一郡の地主としての創建が正しいとすれば、昊天社が彼杵郡の鎮守から彼杵荘の鎮守に移ったのは何時かである。

竹内理三氏によると「彼杵荘は伊佐早・千々石・髪白・山田荘と同じく鎌倉初期には成立したであろう」とされる。昊天社は郡内各地に勧請されたと思われるが、時代によって權威のあり方が違うと考える。従って竹松の昊天社は郡の中心が郡地方こおりに移った時に格上げされる。

郡衙については、彼杵説と郡説がある。筆者は郡衙の移動と考えている。

第一は、彼杵の杵伝説を萱瀬村記にのせた理由は何か。

第二は、大御堂は往昔より葛城郡（今の彼杵郡）に在るとあるが葛城郡をどうして出したのか。

第三は、彼杵郡検地とその検地縄を納めるため阿弥陀堂をつくり印鑰大明神を祀ったという。印鑰社というのは官印官庫の鍵を祀ったものであるが、どうして検地縄と結びつけたのか。以上のような点は郡を郡衙の中心としたい考えのように思える。しかし、古代史の究明をまたなければ何とも言えぬところである。

大阿弥陀堂でもう一つ想起されるのは平安後期の阿弥陀信仰である。11世紀半ばに末法が到来し天変地異が起こるといふ恐怖心が阿弥陀信仰を盛んにし、各地に阿弥陀堂がつくられた。

肥前国の西部では、仁和寺が荘園経営を積極化していた。長承元年（1132）鳥羽院御願により仁和寺境内に南院が創立され、杵島南郷荘註16があてられた。天養元年（1144）鳥羽院御願で仁和寺仏母院創始、所領は伊佐早荘註17船越村。後白河法皇の時、藤津荘（現鹿島市）に金剛勝院註18が営まれ、後白河法皇の勅願として蓮巖院が創られたと伝えられる。

彼杵荘でも貞観の事件、仁和寺の存在、弘法大師伝説などから真言寺院の創説があったと考えていた。

この後発掘発見がすゝむにつれて次のようなことがわかってきた。

岡遺跡、正平21年（1366）の五輪塔地輪銘は「滅罪生善」で出典は往生要集とされるが日蓮宗の開経偈にある。他宗の開経偈にもあるとのことで有名な文句である。

同場所の宝徳3年（1451）の宝篋印塔基礎の銘文「三界唯一心……」は華嚴經の偈である。註19その後続く「不歷化城而直到宝所者也」は法華經二十八品中の化城喩品からとっている。「三界唯一心……」は謡曲「放下僧」や「柏崎」でよく謡われる。法音寺郷にある文安祈願の「現

世安穩、後世善処」は法華經の藥草喻品の文句であるが、謡曲「小袖曾我」で有名である。

宝杵山妙音寺の妙音は法華經妙音菩薩品や觀世音菩薩普門品の中に「妙音觀世音」とあり人口に膾炙している。

以上のようなことから考えると弘法大師草創伝説があるにしても天台系の色彩が濃厚である。阿弥陀堂は9世紀に比叡山東塔の常行三昧堂に始まり11世紀に流行したものと傾向を一つにするのではなからうか。

東福寺は臨濟宗で嘉禎元年(1235)九条道家が創建した寺である。経営の費用は最初九条家から支出されていたが、鎌倉後期になると寺自体が莊園経営を行うようになっていた。

九条家領彼杵莊も建武中興時まで続いていたから、東福寺領は九条家領に含まれていた。

彼杵次郎入道行蓮に裁許状がおりた相手は東福寺であった。

大阿弥陀堂は東福寺領化するにつれて禪宗寺院にかわり大安全寺や千寿寺のような禪寺が形成されたと考える。これも鎌倉時代の墓石が発見されないと何とも言えない。

以上は銘文のあるものについての考えを述べた。このほか無銘のものがかかなりある。禪宗以外いろいろな形の寺院があったと思われるが今後の問題である。

郷村制の成立

天文2年(1533)に大内義隆の部将鳩氏と原田興種^{にお}の軍勢が俵坂から彼杵に侵入した。この時上彼杵村の給人・乙名・百姓300人^{かさね}が重の城に籠って防戦し撃退した。この時の乙名は中尾・東坂本・西坂本・幸(高)吉・釜の内・恵美須丸・大黒丸・菅無田の頭達8名である。このように地域の住民が団結して外敵を防ぐ体制、地域的結合を郷村制という。

郷村制の成立は戦国大名の成立に関係するが、旧大村藩域での研究は進んでいない。又史料も極めて乏しい。昨今、山田郷山田平で宝篋印塔の基礎が発見された。これには禪門15名が名を連ね応永20年(1413)11月21日「時講結衆各 敬白」とある。山田は番神岳の北麓から東麓にあたる。講をつくって結集することは、前時代に見られなかったところであり、地域的結合が進みつつあることを示す。

こゝに名を連ねた人達は独立自営農民である。何かの手段で土地を持てれば独立農民とみなされ、村落共同体の一員として惣村の運営に参加した。これから30余年たった文安4年(1447)に上彼杵の農民達男女が結心して「現世安穩後生善処」を祈念した宝篋印塔の基礎がある。禪師1、禪定門1、禪門27、童士1、禪定尼1、禪尼24、計55名が名を連ねている。何軒の家かわからないが、20家程度と推定される。この地は郷村記の古寺跡報恩寺跡である。この地は彼杵川の谷頭にあたり、こゝから斜面水田となり大黒丸、恵美須丸以下8人乙名で支配される地域になる。恐らく開墾を通じて独立自営農民化していったものであろう。

この付近の「ちょいの堂」の墓地は嘉吉3年(1443)から大永4年(1524)の墓石がある。厚さは前者が14cm、後者が8cmである。下流にある千寿寺跡は享祿2年(1529)塔14.5cm、天

文2年(1555)塔10.8cm、大門の百堂墓 文亀2年(1502)塔14cm、享禄塔12cmと規模が小さくなる。名主層の拡大を示すものである。

天文に入ると戦国大名大村氏の直接支配を受け、大村純忠の時代になると籠城の際には萱瀬・郡こわりの百姓とならんで城中に入り雑役夫として働くほどの信頼を受けている。

こうして彼杵氏の支配は終り、近世農村への歩みが続けるのである。(満井)

- 註1 鹿児島県地理纂考 姓氏家系大辞典伊作氏所収
- 2 正木喜三郎 「府領考」九州史研究 132ページ
- 3 鎌倉遺文卷一 九五四号 建久8内裏大番役支配注文写
同第十一卷 七九四九号 建長7関東下知状
- 4 鎌倉遺文卷一 三四八号 文治4薩摩伊作荘立券状案
- 5 密厳上人行状記
大伝法院本願上人御傳 共に肥前旧事 康知4年の項
櫛田良洪 覚鑿の研究 P. 1~P. 13
- 6 長秋記一史料による日本の歩み 中世編
- 7 長崎県史 古代・中世編 366~377ページ
- 8 瀬野精一郎編 鎌倉幕府裁許状集下 190ページ
- 9 前掲書
- 10 凶書寮叢刊
- 11 註5に同じ
- 12 長崎県史 古代・中世編 361ページ
- 13 永正5年(1508)は己巳でなく戊辰
- 14 文明説と永正説とがある。
- 15 深堀文書
- 16 仁和寺史料 鎌倉幕府裁許状集下
- 17 仁和寺史料 深江文書
- 18 平凡社「佐賀県の地名」
- 19 織田得能「仏教大辞典」

V 縄文時代の遺物

石 器

今回出土の石器は量的には少ないが、全て中世の遺物包含層中から得られたものであり、おそらく縄文時代の所産と思われる。縄文式土器の出土はなかったものの、東隣する白井川遺跡からは、縄文晩期の土器や扁平打製石斧など良好な資料が得られている。また52号支線排水路の中央部付近では、縄文中期の阿高式土器片が表採されているので、この時期と関連づけられよう。

石 鏃 (第51図 1~16) (図版22)

石鏃は16点の出土でほとんど欠損品である。大別すれば、丁寧な剥離が施され、若干の脚部を有するもの(1)と、脚部を有し、抉りが深いもの(2~6)、三辺のうち底辺が広く、わずかに抉りが入るもの(7~11)、底辺が一直線に近く細長い形になるもの(12~14)に分けられる。4のサヌカイトを除いて全部黒曜石であるが、石質については、漆黒色や乳白色、それに灰黒色が見られ、大村湾沿岸に点在する原産地から供給されたことが窺える。

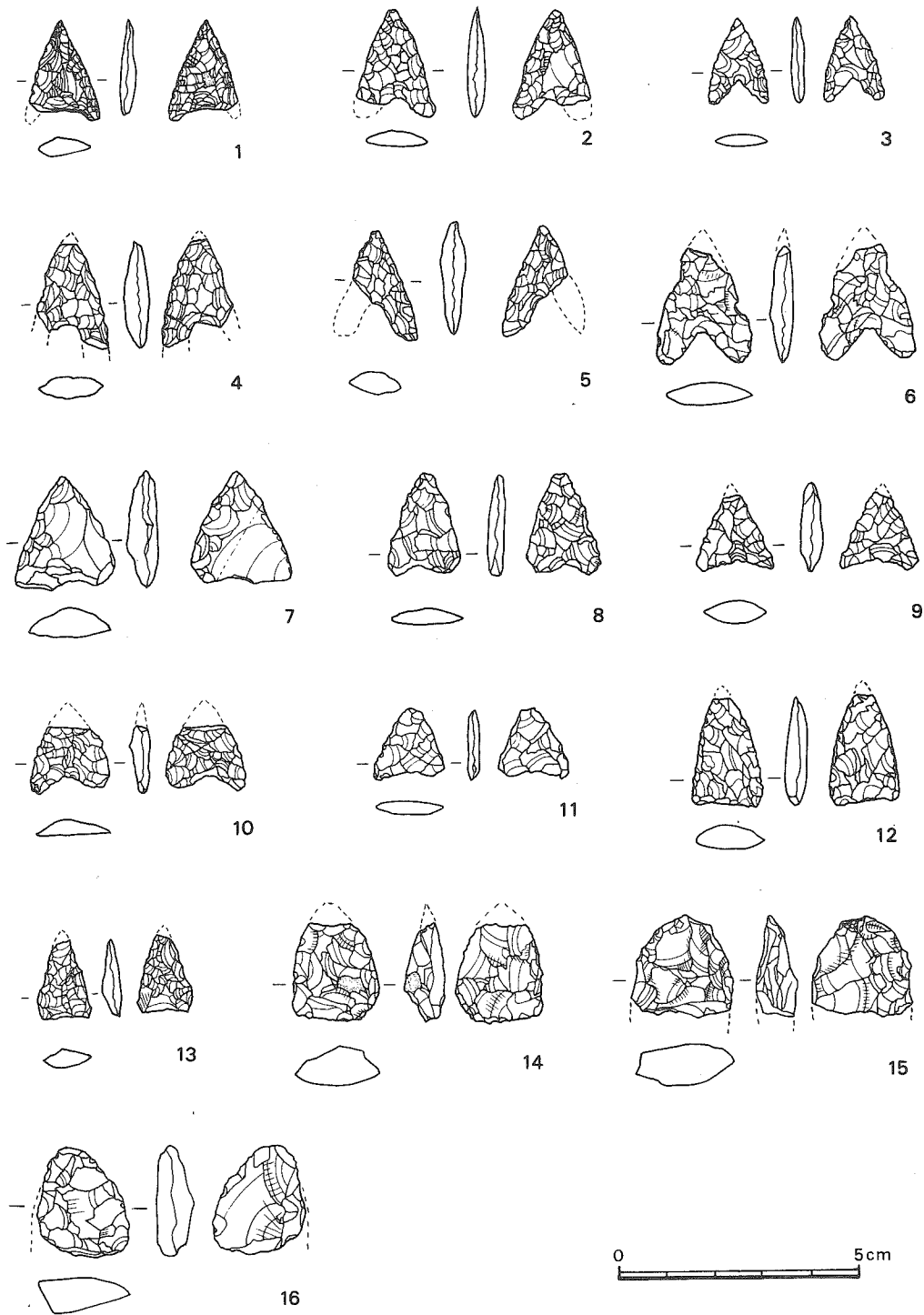
剥片石器 (第52図、17~22) (図版22)

剥片石器は19を除いてサヌカイトを利用している。17・18は粗く剥がされエッジに使用痕を認める。19は亀岳産と思われる黒灰色の黒曜石を利用している。片面に半分ほど自然面をもち集中して打ち欠かれ、刃部状を呈している。20は剥片の割れたものであり、エッジに一面から小さく剥離を施し、刃部を作り出している。21は縦長の剥片を利用、頂部に自然面を残す。両側は表裏から粗く剥離され、やや磨滅を受けている。端部を欠く22は両面ともに1回で剥離され片面のエッジに自然面を残す。一方の面は剥離面をもち石器として利用された痕跡を留める。

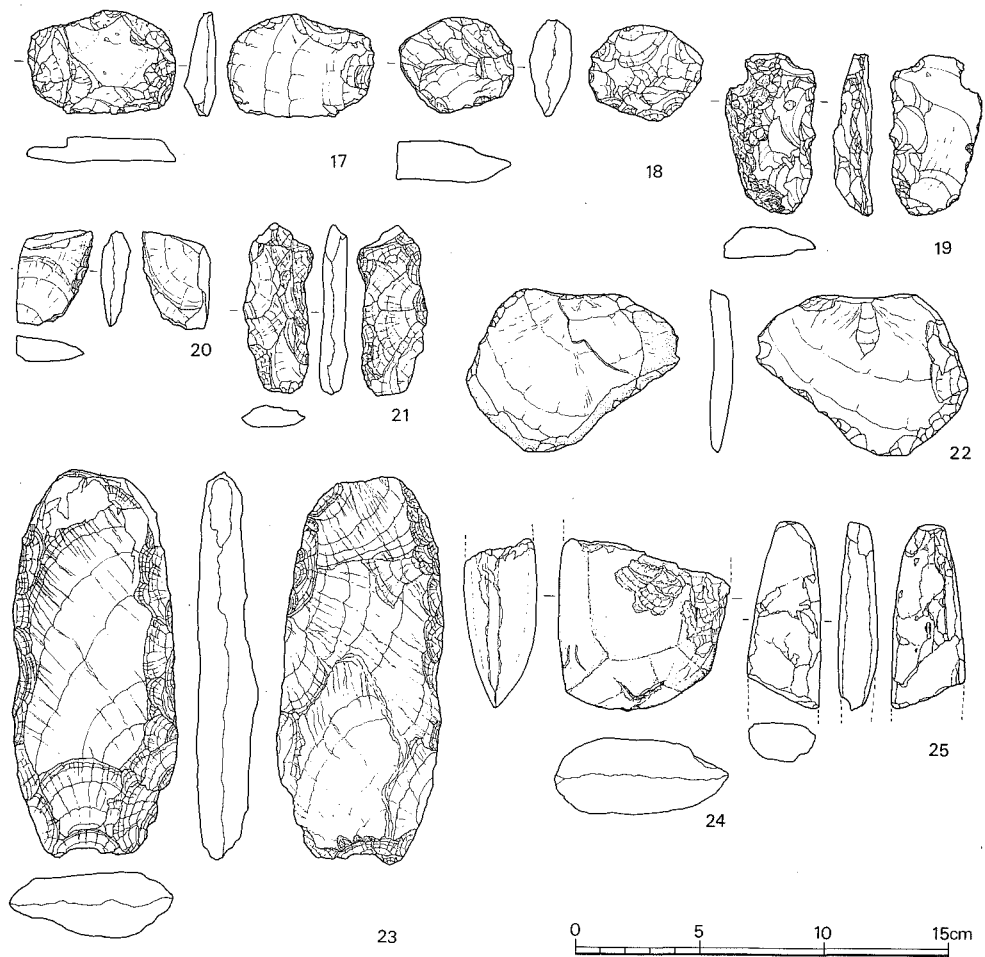
石 斧 (第52図 23~25) (図版22)

23は安山岩製で板状に剥離された打製石斧であるが、磨耗が著しく全体に丸みをおびている。刃部はやや尖ったようになっているが、端部を欠失している。24は蛇文岩製の磨製石斧である。上端部を欠失し、磨耗著しい。刃部は両刃で、柄に対して手前がすり減っている状況を示している。25は蛇紋岩製の石斧で、24に較べると小型である。刃部を欠失するが両刃と考えられる。全体に磨耗著しい。

(安楽)



第51図 縄文時代の石器(1)



第52図 縄文時代の石器(2)

VI ま と め

今回の調査の岡遺跡は、町の中央を流れる彼杵川下流域西方に位置し、西側に海に突出した標高 224 m を測る松岳城・番神山に連なり前面は平坦面を持つものの、大村湾に面しており、いわば自然地形をうまく利用している。

遺跡の所在する蔵本郷岡から白井川地区にかけては、標高 4 m ~ 7 m の微高地に縄文時代晩期から弥生・古墳時代に至る住居址や墓址が発掘調査によって確認^{註1}されている。中世の遺構遺物も点々と散在するが、52号支線排水路の調査では、泥炭層の中から輸入陶磁器を含め木器など多量の遺物が集中していた。

さて、今次における調査の成果では、中国輸入陶磁器の中で、太宰府分類Ⅳに属する玉縁を有する白磁の出土の多さが注目される。実年代では11世紀後半から12世紀前半にあたるが、この時期はじめて彼杵三郎入道久澄の名前が見え、彼杵氏の始祖ともいべき人物の所在を本遺跡に求めても不自然ではない。しかし在地の武士団の動向が明確になってくるのは鎌倉時代の末頃からで、江串浦の江串三郎入道や千綿には千綿九郎入道純西が、彼杵には彼杵二郎入道行蓮がおり、他の彼杵氏も名前を連ねる。また正平 17・8 年 (1331・2) 応安 5 年彼杵一揆連判帳に名前を連ねるのは、彼杵弥士与丸・同清水彦三郎紀清久・同岡五郎紀清種・同島田弥三郎紀清俊である。この中で清水氏を除いては、この地にゆかりの地名であり現在でも字名で残っている。島田は本遺跡の西側山麓一帯で、岡はまさに本遺跡の立地するところである。小さな名主層が多い所でもあるが、その成立背景は、満井氏によれば「彼杵荘は寺社や中央豪族の辺境荘園であった。そのうえ複雑な地形のためまとまった所領を持つ豪族が成長しにくい所である。」のとおり、農地として生産性をあげられる所は少ない。

この裏付は現在水田の平野部においても、度重なる彼杵川の氾濫や小谷から運ばれた土石流の扇状地形が調査によっても確認されたところである。そのため、生活の場は山麓寄りの高い地点が選ばれたものと考えられる。

出土遺物を見ると、量的には土師器が一番多いが、輸入陶磁器も比率では無視できないものがある。土師器は時期的には12世紀から16世紀までまんべんなく見られるが、輸入陶磁器は前述したように古い傾向が表われている。背景については、はっきりしないが、この傾向は松浦市榑田遺跡^{註1}とも似ている。遺物では他に石鍋片も多く得られている。これは産地直結型の地の利を生かしたものであろう。以上は中世(武士団)の集落を念頭に入れたものであるが、中世寺院の問題も考えなければならない。「郷村記」に記された「大御堂安全寺」の存在についてである。今回の調査の主眼は、寺院の所在確認が目的であったが、寺院遺構の確認は出来なかった。しかし青温石製石塔の存在は切り離せない問題である。しかも今回確認の正平 21 年 (1336) 記年銘入り五輪塔地輪や、宝徳 3 年 (1455) 銘入宝篋印塔地輪や、隣接する喜々津前勝

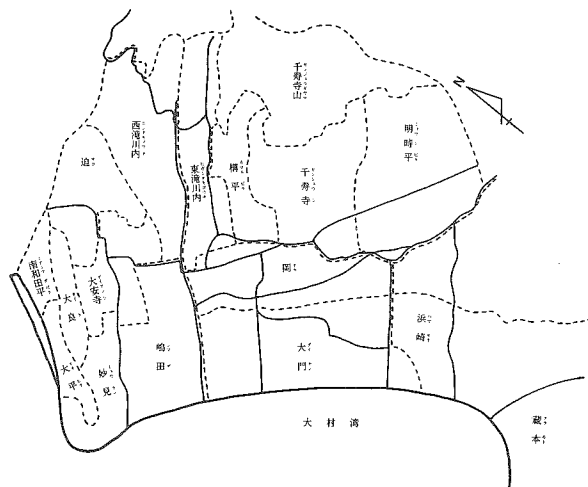
氏宅にある宝篋印塔地輪には丁寧な反花が彫られ、大村から彼杵地方に発見されている石塔の法量を比較すると、前者が縦・横幅の関係では縦に長く、後者も一番大きい数値を示した。このことは大石氏のデータ^{註2}と比較しても大きいグループに属する。また銘文から祈願の目的で建てられていることが察せられる。このような石材の切り出しは当然西彼杵半島から行われたであろうが、造立階層は一般庶民ではなく名主層以上の武士階級が考えられるのである^{註3}。

町内における青温石製石塔分布図を作成された開氏によると、石塔類の集まっている地区は、中世寺院の存在とも符号するとし、裏付けされている。遺跡出土の石塔類もそういった観点から見ると大御堂安全寺の存在はうなずけるし、大門古墓地あるいは島田石塔群と呼ばれる石塔も関連したものを見るべきである。また木製品では54水-14区泥炭層出土の「南無阿彌陀佛」と書かれた名号札については、頭書に大日如来の梵字が記され、密教とのみかたもあるが、禅宗でも用いられ、安全寺が永正年間禅宗であったことを考えると、宗旨については禅宗ということになる。他の木製品については板に墨書されたものが目立つが、意味不明のものがほとんどである。しかし木簡と思われるものもあり、名号札とあわせて、中世の時期の所産と考えられる。

今回の岡遺跡の地形的要因を考えて見ると、遺跡中央に北から南へ貫ぬく道路の問題がある。現在の幅は約3mを測り、鉄道と彼杵中学校で分断されているが、古地図では大門の浜まで伸びている。この道路は遺跡のほぼ中央で「J」状に折れ曲っている。この折れ曲った地点のすぐ下の水田の一隅には、湧水地点があり現在でも残されている。この周辺の調査区からは柱穴が多く検出され、中世集落における中心的な道路の役割が考えられる。

本遺跡および周辺は、鎌倉時代から南北朝時代・室町時代を中心とした寺院や武士階級を中心とした集落が営まれていたことが窺われよう。このことは北側に位置する松岳城の存在や、字名として構・明時の地名からも察せられる。
(安楽)

- 註1 安楽勉他 「楼楷田遺跡」長崎県文化財調査報告書第76集 1985
- 2 大石一久 中世における石塔造立階層の問題について『大村史談』第29号 1986
- 3 註2に同じ



第53図 遺跡周辺(蔵本郷)の小字図

— 付 — 東彼杵町内の中世石塔について (第53~55図)

岡遺跡発見の中世石塔の他に、町内には思わぬ所からも出土したりして、天正2年(1574)に吹き荒れた切支丹の嵐、大村純忠の切支丹王国樹立の犠牲となり、その惨状を物語る傷ついたり、埋められた中世の石塔が、ひっそりと祀られたり、捨てられたまま数多く静かに散在している。

郷村記(彼杵村)に古寺跡として、大安寺、報恩寺、永林坊、妙音寺、治法寺、福伝庵、専修寺、地勝寺、千寿寺、高林坊、大門坊の11寺をあげている。しかし「寺跡今その所を知らず間々その名を地名に存するのみ。」とあり、江戸時代すでに中世寺院の焼却と共に忘れ去られている。

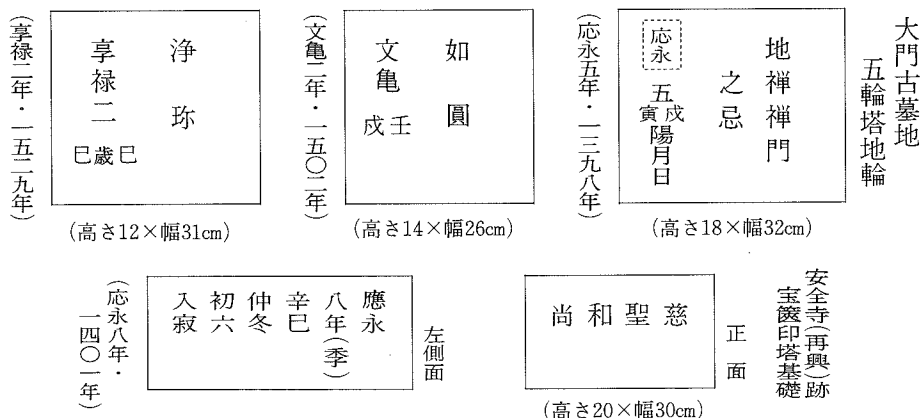
大門古墓地は岡遺跡の南西約100m、彼杵中学校の西側に近接した所にあり、ひゃくどう墓とも呼ばれている。(粒崎義太氏談)祀られなくなった近世の墓石と共に、中世の五輪塔や宝篋印塔の各部分が数多く散乱した状態であった。

郷村記に大御堂安全寺跡として、「構郷の下田原の上にあり、今にその所を大御堂跡という。その下の海辺に大門という所あり、往古大御堂の門口となりしという」とあることから、大御堂安全寺の寺域内にあった墓地であったと考えられる。

現在、町教育委員会裏庭に出来た遺跡公園に、中世石塔の各部を多数移しているが、紀年銘のあるものは、**応永**5年(1398)文亀2年(1502)享禄2年(1529)の3基の地輪である。まだ多数の石塔が残存している。また、昭和55年その前の給食センター建設工事中、田崎一郎氏が発見した五輪塔各部がある。尚、近くの浜宮万部塔にも水輪が所在する。

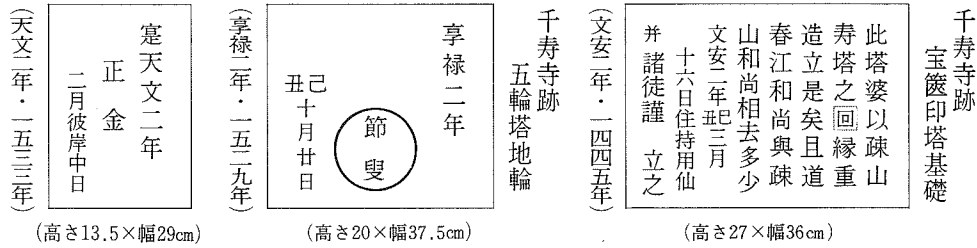
安全寺は万治3年(1660)真言宗宝円寺の末院として、下の田の中に再興された。その後蔵本郷大安寺の現在地に移転し、明治3年廃寺となった。現在高原文夫宅である。応永8年銘の宝篋印塔基礎と五輪塔水輪がある。

最近になって、近くの森祥一郎氏のみかん畑の石垣から、宝篋印塔の笠と地輪が出土し、ま



た20m程下の喜々津前勝氏宅からは、反花座の彫刻がある宝篋印塔基礎と五輪塔の各部が発見された。尚近くの滝川内登り口の菩薩様にも空・風輪がある。

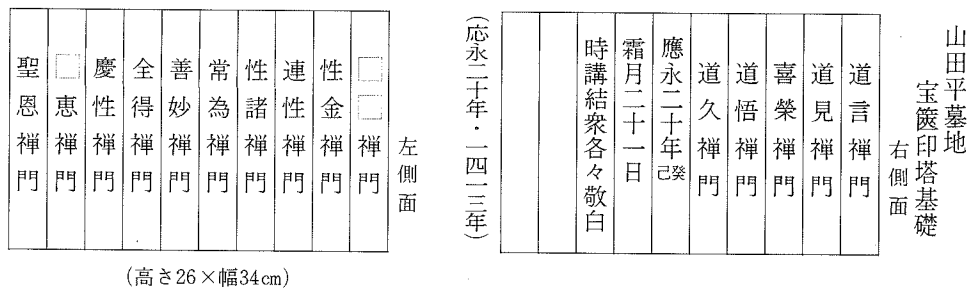
千寿禅寺跡は蔵本郷字千寿寺、現在ゲートボール場になっている所である。寺跡の東20m程の所に禁忌の地があり、壊された五輪塔や宝篋印塔を置いてあった。近年、滝川内の松尾家墓地に祀ってある。(構種近氏談) この中に、文安2年(1445)、享禄2年(1529)、天文2年(1533)の紀年銘の石塔の他多数の宝篋印塔や五輪塔が祀られている。



妙音寺跡は蔵本郷字明時1141番地の水田といわれている。(明時潔氏談) その寺屋敷の近くの天神様の周りに五輪塔の各部が半ば土に埋れた状態で見られる。

三根郷字小路^{じしょうじ}1868、山田八郎氏宅左の畑を地勝寺跡と云い伝えている。(山田八郎氏談) その上の墓地の右端に五輪塔の各部が半ば埋れて所在する。

地勝寺跡の谷向い、字山田平の宇都満夫氏宅上のみかん畑を寺屋敷と呼んでいるが、その石垣がこわれた時、塔身と地輪が出た。(宇都満夫氏談) そこから30m程上に墓地があり、右端に宇都氏発見の禅門15名が結衆して立てた、応永20年銘(1413)の宝篋印塔基礎がある。また、そこより約100m下国道34号線の道下に、傷みがひどい応永12年銘(1405)の宝篋印塔基礎が放置されている。

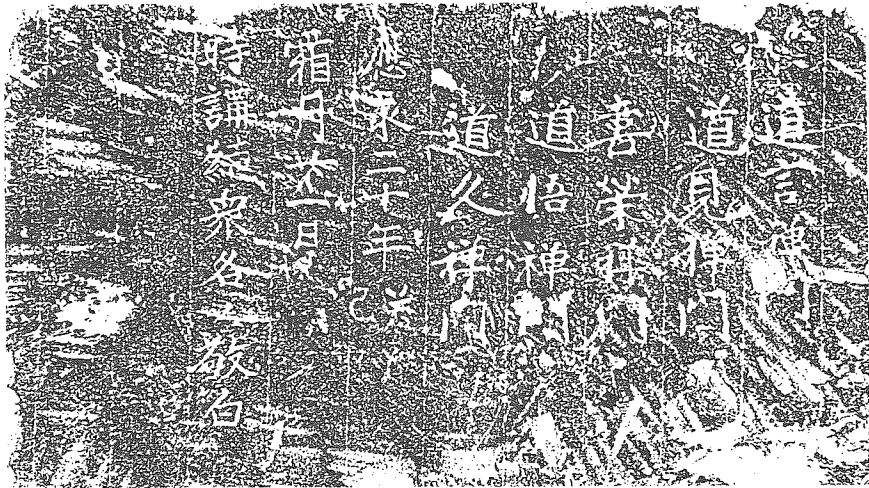


川内郷字松葉、国道から約300m入って右側に、せきょうなん(庵)と呼ぶ茶畑がある。その上の音辻茂作氏のみかん畑に、宝篋印塔と五輪塔の各部多数を、適当に組み合わせて基壇の上に祀ってある。なお、約30m東の通山米一氏の畑にも五輪塔が、最近出土したとして数基祀ってある。

法音寺郷では、昭和60年圃場整備にかかる緊急調査が行われ、その詳細な報告が東彼杵町文化財調査報告書第1集『川井川内遺跡』にある。それによると、報恩寺跡と思われる調査区



安全寺(再興)跡
宝篋印塔基礎左側面



山田平墓地
宝篋印塔基礎右側面



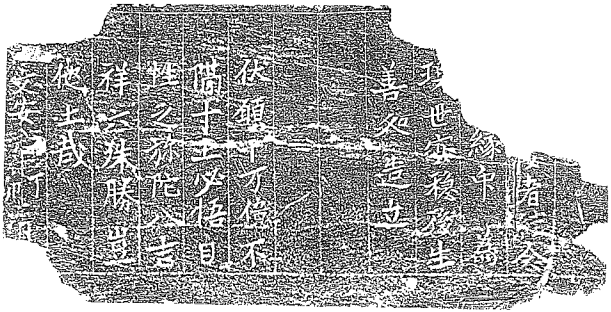
千寿寺跡
宝篋印塔基礎

第54図 東彼杵町所在の中世石塔拓影

に近接した水田の壁の中から破壊され埋められた状況で、偶然出土した多くの石塔が現在字法音寺平のみかん畑に祀られている。その中に文安4年（1447）の年号で一族の結束と繁栄を願った祈願塔がある。

調査地の北西、小高く木の繁った一角があり、五輪塔や宝篋印塔の各部が多数基壇の上に寄せ集めて祀ってある。法音寺郷四郎丸174、ちよいのどうと呼ばれ、嘉吉3年、大永4年の紀年銘のある五輪塔地輪がある^註。その北隣の畑を寺屋敷と云い伝えている。（松野信太郎氏談）また、谷向いの川原勇氏のみかん畑にも、下の国道付近出土の五輪塔が祀られている。（松野信太郎氏談）

菅無田郷陰平橋の北100m程の字平原、田の中に石塔群がある。これは大正の初め頃菅田文一氏の父が田に拓く時、付近から出土したり石垣に使われていたものを集めて祀ったもので



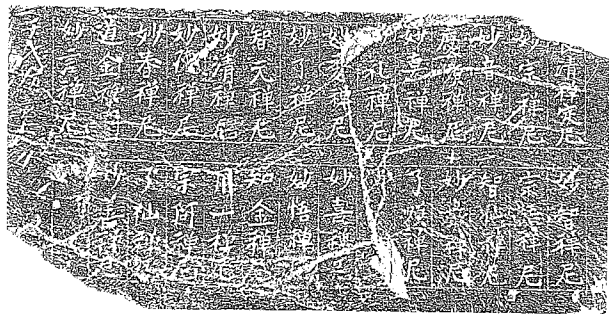
女者結念
縁中為
現世安穩後生
善処造立
伏願十方億不
隔寸土必倍自
性之弥陀八吉
祥六殊勝豈
他土哉
文安四年二月
（文安四年・一四四七年）

(25×43)

法音寺
文安の祈願塔
正面願文

道在禪門	道祐禪門	慶秀禪門	道妙禪門	道尊禪門	光順禪門	道榮禪門	道本禪門	道林禪門	道周禪門	道泉禪門	道善禪門	道慶禪門	道慶禪門	道慶禪門	道慶禪門
心禪師	道慶禪門	淨圓禪門	道秀禪門	道善禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門	道一禪門

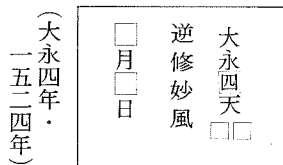
右側面



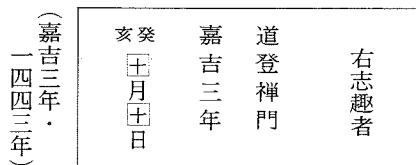
長清禪定尼	妙智禪尼	妙智禪尼	妙音禪尼	慶順禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼
妙智禪尼	道金禪門	妙春禪尼	妙德禪尼	妙清禪尼	智元禪尼	了了禪尼	妙秀禪尼	妙禮禪尼	妙真禪尼	慶順禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼	妙真禪尼
千代童土	妙善禪尼	了仙禪尼	宗阿禪尼	用一禪尼	知金禪尼	妙喜禪尼	妙喜禪尼	妙喜禪尼	妙喜禪尼	了順禪尼	妙真禪尼	宗仙禪尼	宗仙禪尼	妙智禪尼	妙智禪尼

左側面

第55図 法音寺郷所在の青温石製文安の祈願塔拓影



(8×24 cm)



(14×30 cm)

ちよいのどう
五輪塔地輪

ある。(菅田文一氏談)

彼杵川の向側、字大黒丸北平に塚があり五輪塔や宝篋印塔がある。郷村記によると、天文2年(1533)重の城の戦で大内勢敗北の時討死した首胴を埋めた塚という。

東坂本の大内田原に宇都宮権現の石祠があり、その左に凝灰岩製の五輪塔がばらばらに所在する。また上の国道端の坂本公民館にも五輪塔地輪註がある。

中尾郷太の原、那太石権現付近から10数年前に出土した五輪塔が遺跡公園にある。(辻浩一氏談)現在も那太石権現社殿の裏に五輪塔地輪が所在し、右隣の勝野清氏宅では裏庭の工事中に出土したとして、宝篋印塔基礎と五輪塔がある。(勝野清氏談)その隣家大原真二氏宅前池の上に、宝篋印塔基礎の上に五輪塔を祀っている。大原氏宅裏山を寺跡と云い伝えているが、そこにも五輪塔が散見される。最近100m程上の畑を開墾中に水輪が出土した。(大原真二氏談)尚、寺跡より30m程南に薩摩様と呼ぶ古墓地があるが、五輪塔が散在している。

千部塔は大川食品センターの上にあるが、その周囲、裏の石積みの間にも五輪塔が点在する。姫の墓は彼杵小学校体育館横にあり、寿山大姉の法名がある凝灰岩製の五輪塔地輪と五輪塔の各部が祀られている。

口木田郷堂の本、口木政則氏宅付近を寺跡と云い伝えており(口木キワ氏談)五輪塔数基が所在する。尚、隣家口木敏幸氏宅裏にも五輪塔数基が祀られている。大音琴郷塚本、清水観音堂の下にも火輪があり、小音琴郷江口、八大龍王神社鳥居の横にも五輪塔数基を祀っている。

千綿地区の中世寺院として、判夜坊、清心坊、木蔵庵、法勤印、光明寺、慈願寺、エブク寺喜場の尼寺等が伝えられており、各地に五輪塔や宝篋印塔の各部が、寄せ集め或いは単独に散在している。

千綿宿の西はずれに千福様といわれる宝塔があり、この区域を牛の頭と呼ぶが、ここに五輪塔が散在する。

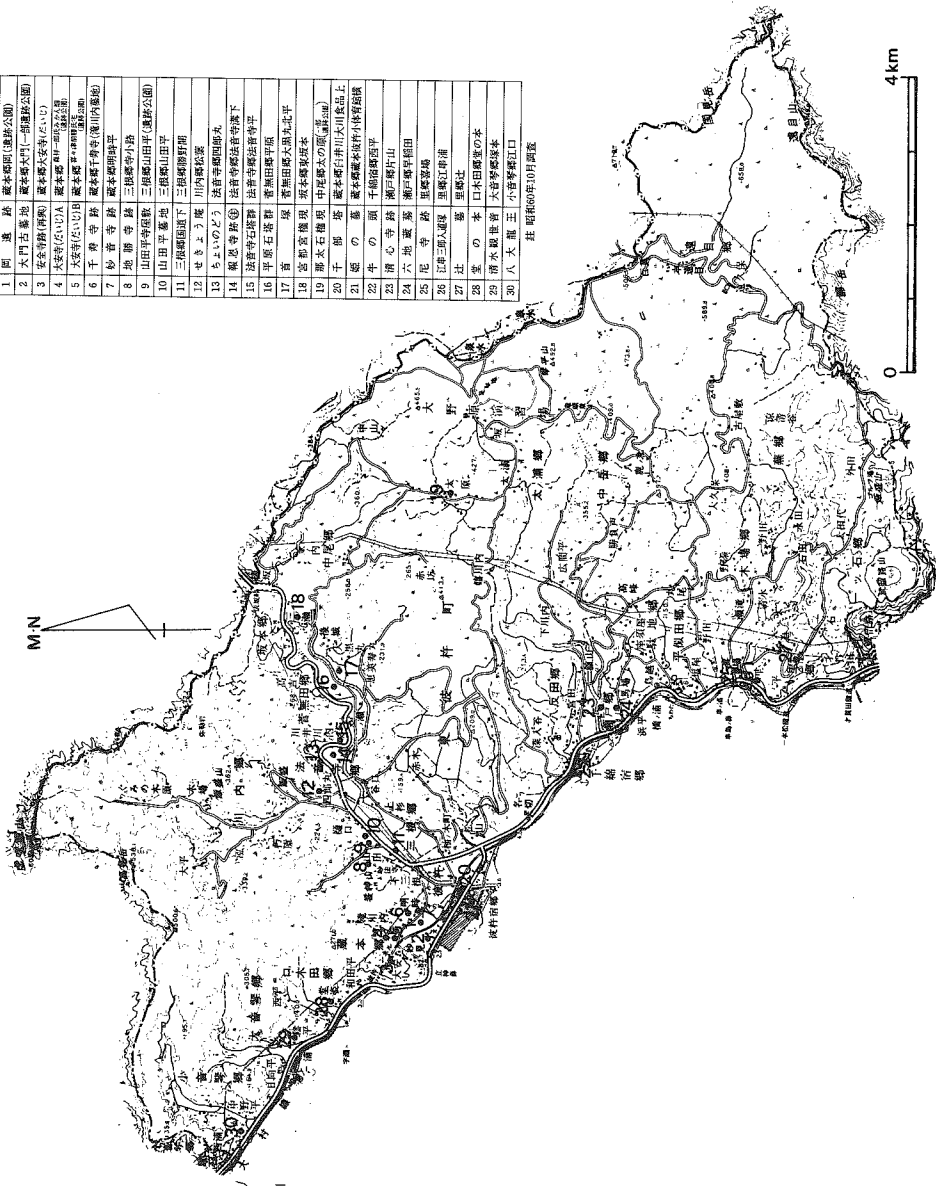
瀬戸郷字片山の富永康彦氏宅上の田を清心寺跡と云い伝えており、その下に宝篋印塔や五輪塔が数多く所在する。(富永康彦氏談)富永氏宅裏に宝篋印塔の相輪がきれいな形で五輪塔の上に、また表の築庭の隅には大きな五輪塔が祀られている。池の所にも宝篋印塔基礎が水神様の台としてあり、他に火輪も見られる。また前の小川の土手にも地輪と基礎があり、その10m程下の八幡様にも五輪塔数基が祀られている。

瀬戸郷の六地藏から上に登った道端、字早稲田にある六地藏墓に五輪塔の火輪が、更に上の大神宮境内と道隣城の谷墓地、それぞれに空・風輪が所在する。

()内は石塔所在地

番号	名称	所在地
1	圓建塔	蔵本保阿(遺跡公園)
2	大門古臺地	蔵本大町(一部跡公園)
3	延命寺跡(内院)	蔵本大町(い)
4	本堂跡(い)	蔵本大町(い)
5	本堂跡(い)	蔵本大町(い)
6	五輪寺跡	蔵本大町(い)
7	妙音寺跡	蔵本大町(い)
8	兜磨寺跡	三股郷野間
9	山田平寺跡	三股郷山田平(遺跡公園)
10	山田平臺地	三股郷山田平
11	三股郷野間	三股郷野間
12	せきょう庵	川内郷松原
13	ちよいどう	法音寺(遺跡公園)
14	鳳凰寺跡	法音寺(遺跡公園)
15	法華寺跡	法音寺(遺跡公園)
16	平塚石塔	法音寺(遺跡公園)
17	寺	法音寺(遺跡公園)
18	法音寺跡	法音寺(遺跡公園)
19	法音寺跡	法音寺(遺跡公園)
20	千部寺	蔵本大町(い)
21	野	蔵本大町(い)
22	牛の頭	千部郷野間
23	信心寺跡	瀬戸崎片山
24	六角臺	瀬戸崎早原田
25	尼寺跡	里郷松原
26	三郎入道	里郷江津
27	社	里郷江津
28	の本口	田郷の本
29	五輪寺跡	大谷郷松原
30	八丈田	小谷郷和口

注 昭和9年10月調査



第56図 東彼杵町所在の中世石塔分布図

里郷喜場の長崎享氏宅付近を尼寺跡と云い伝えており、(楠本安氏談) 楠本氏宅裏山に五輪塔が多数所在する。また、里郷江串浦に江串三郎入道塚と呼ばれる石塔があり、その後^註に多数の五輪塔が祀られている。また辻墓地にも火輪がある。(開)

註 大石一久「大村地方における中世期石造美術について」(その一)

『大村史談』27号 1984

表3 東彼杵町内所在の紀年銘中世石塔

昭和63年3月現在

時代	年号	西暦	場 所	種 目	関 係 銘 文	寸 法 高さ×幅cm	備 考
鎌倉							
(1334)	正平二十一	1366	岡 遺 跡	五輪地輪	右造立志者	24×37	建武の中興 (遺跡公園)
	正平二十一	1366	岡 遺 跡	宝篋基礎	素輪大姉霊	30×37	(遺跡公園)
南北朝	康 応 元	1389	岡 遺 跡	五輪地輪	林公大姉	14×30	(遺跡公園)
(1391)							
(1392)	〔應永〕五	1398	大 門 古 墓 地	五輪地輪	地禅禪門之忌	18×32	南北朝統一 (遺跡公園)
	応 永 八	1401	安全寺(再興)跡	宝篋基礎	慈聖和尚	20×30	
	応永十二	1405	勝野開国道下	宝篋基礎	日本国肥前州彼杵村	30×37	
	応永二十	1413	山田平墓地	宝篋基礎	時講結衆各々敬白	26×34	
	嘉 吉 三	1443	ちよいのどう	五輪地輪	道登禪門	14×30	
	文 安 二	1445	千 寿 寺 跡	宝篋基礎	此塔婆造立以疎山	27×36	
	文 安 四	1447	報 恩 寺 跡	宝篋基礎	文安の祈願塔	25×43	
	宝 徳 元	1449	清 心 寺 跡	五輪地輪	宝徳の祈願塔	22×31.5	
	宝 徳 三	1451	岡 遺 跡	宝篋基礎	三界唯一心	24×32.5	(遺跡公園)
	寛 正 二	1461	岡 遺 跡	五輪地輪	帰真宗澄禪門	16×34	(遺跡公園)
(1467)							応仁の乱
(1468)	文 亀 二	1502	大 門 古 墓 地	五輪地輪	如 圓	14×26	戦国時代始 (遺跡公園)
	大 永 四	1524	ちよいのどう	五輪地輪	逆修妙風	8×24	
	享 祿 二	1529	大 門 古 墓 地	五輪地輪	浄 珍	12×31	(遺跡公園)
	享 祿 二	1529	千 寿 寺 跡	五輪地輪	節 叟	20×37.5	
	天 文 二	1533	千 寿 寺 跡	五輪地輪	正 金	13.5×29	
(1541)							
(1542)							1542. 天文十二 鉄砲伝来
室町後期							1549. 天文十八 キリスト教伝来
(1573)							

[天正2年(1574)切支丹寺社焼討ち]

版 圖



(遠景西から)



(近景南から)

遺跡遠景および近景



54 水
14 区
西側



40 区
西側



T・P・10
西側



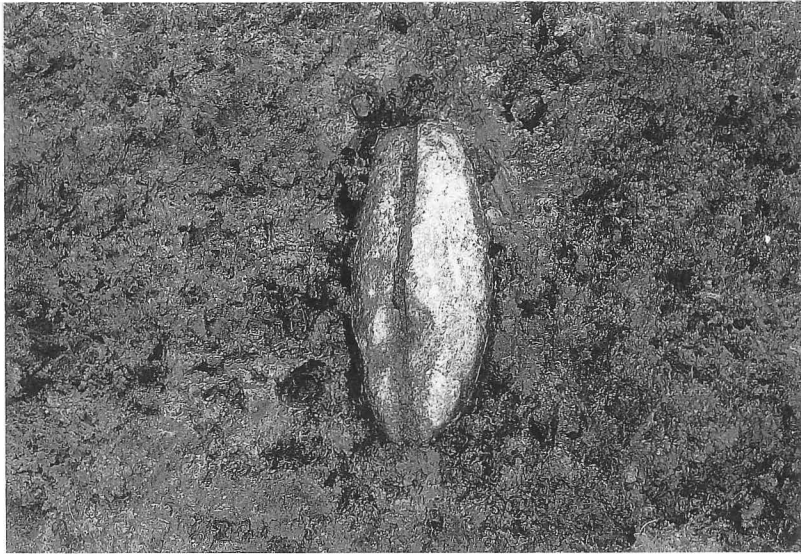
54水-9・10区落ち込み



40区落ち込みと集石



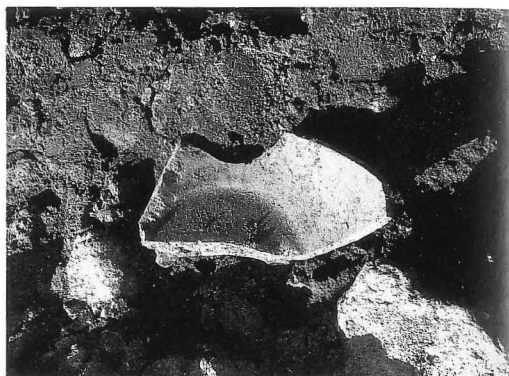
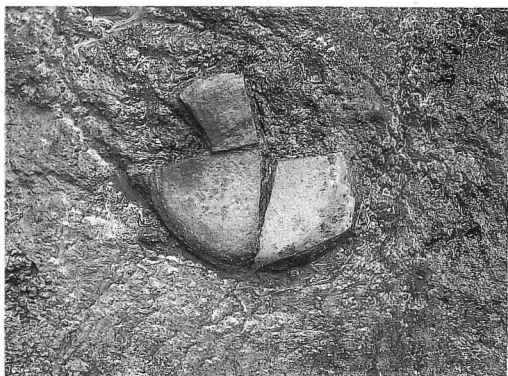
41区 北側土層と柱穴出土状況



滑石製石錘の出土

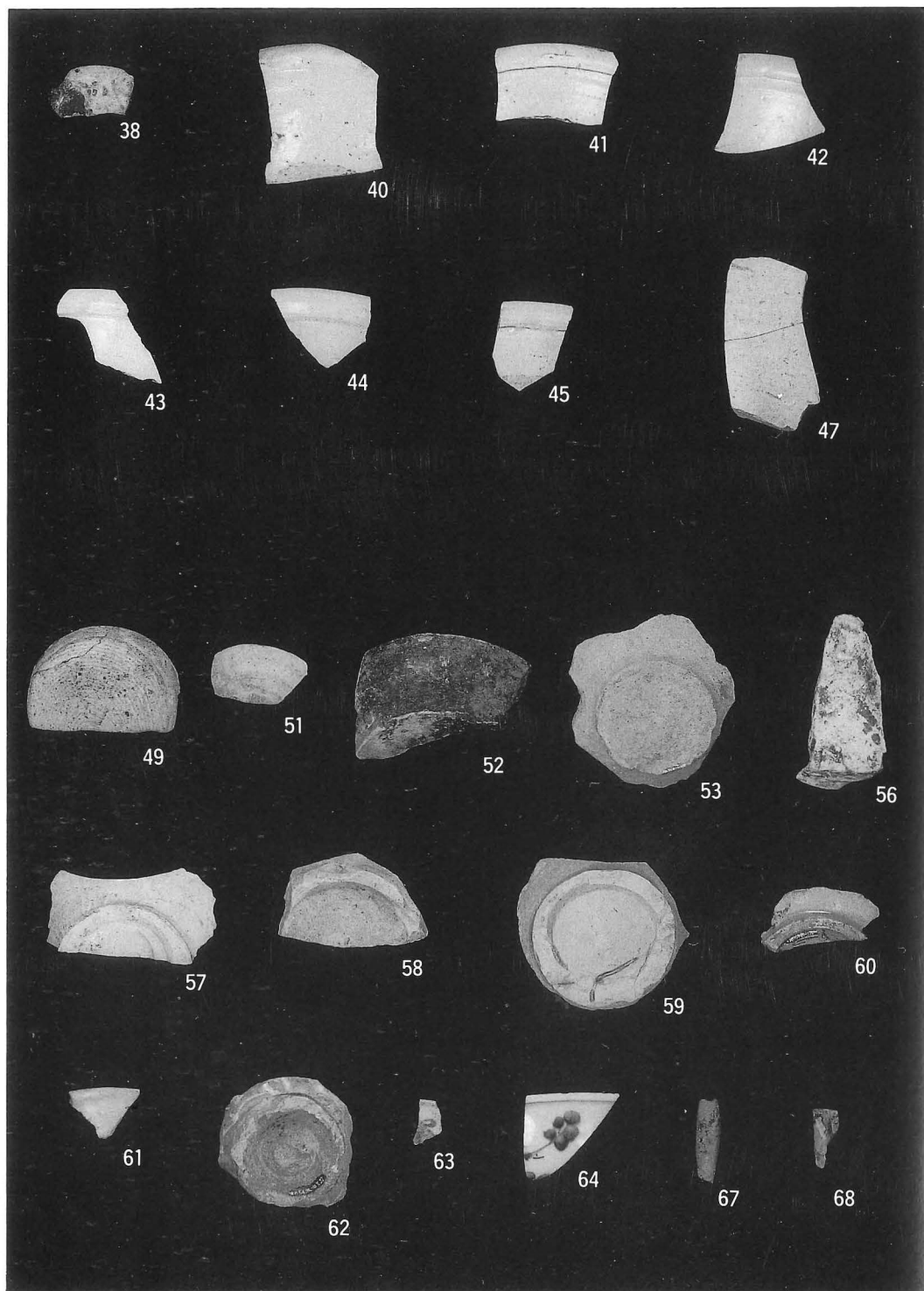


使用不明の容器

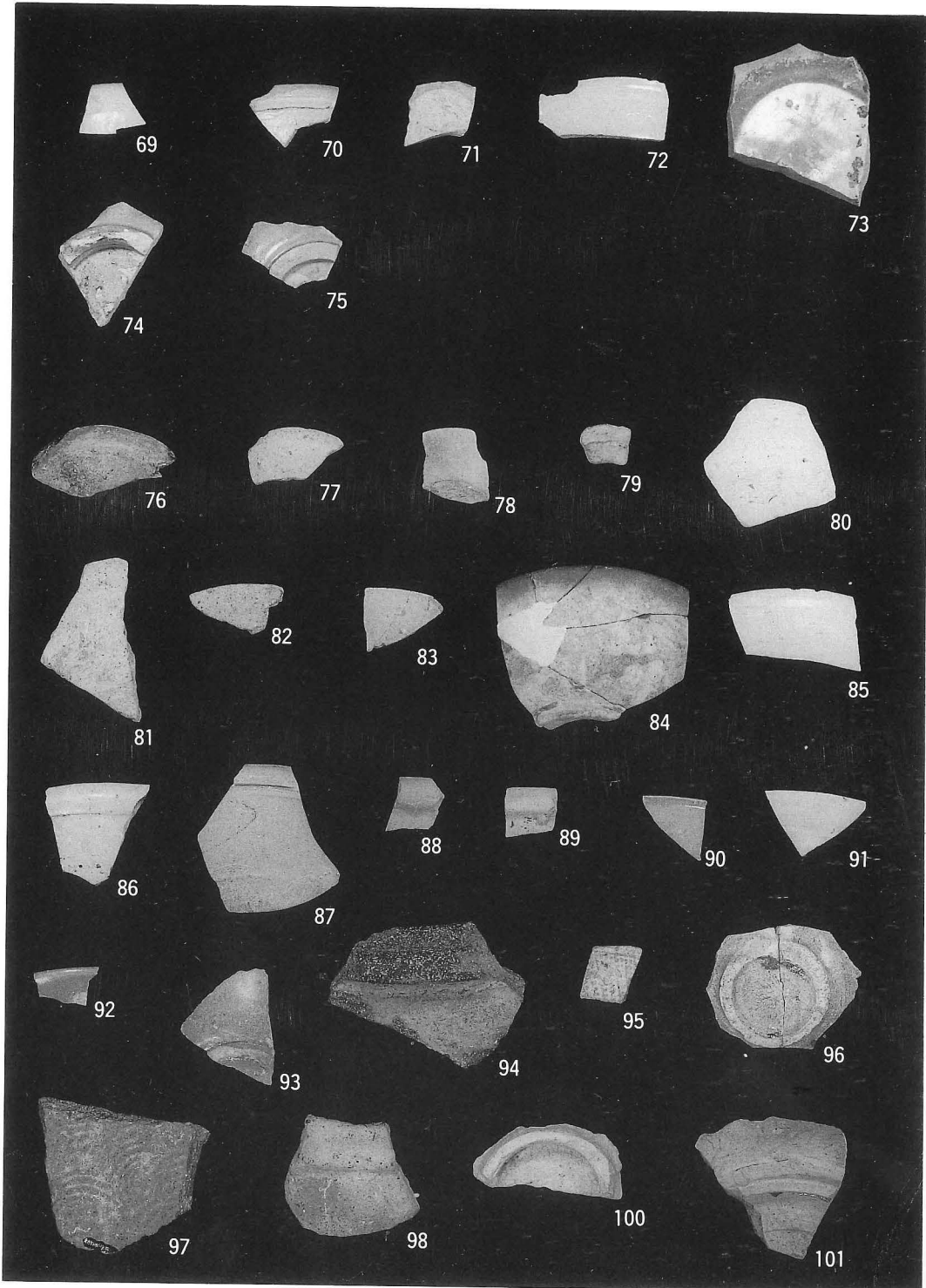




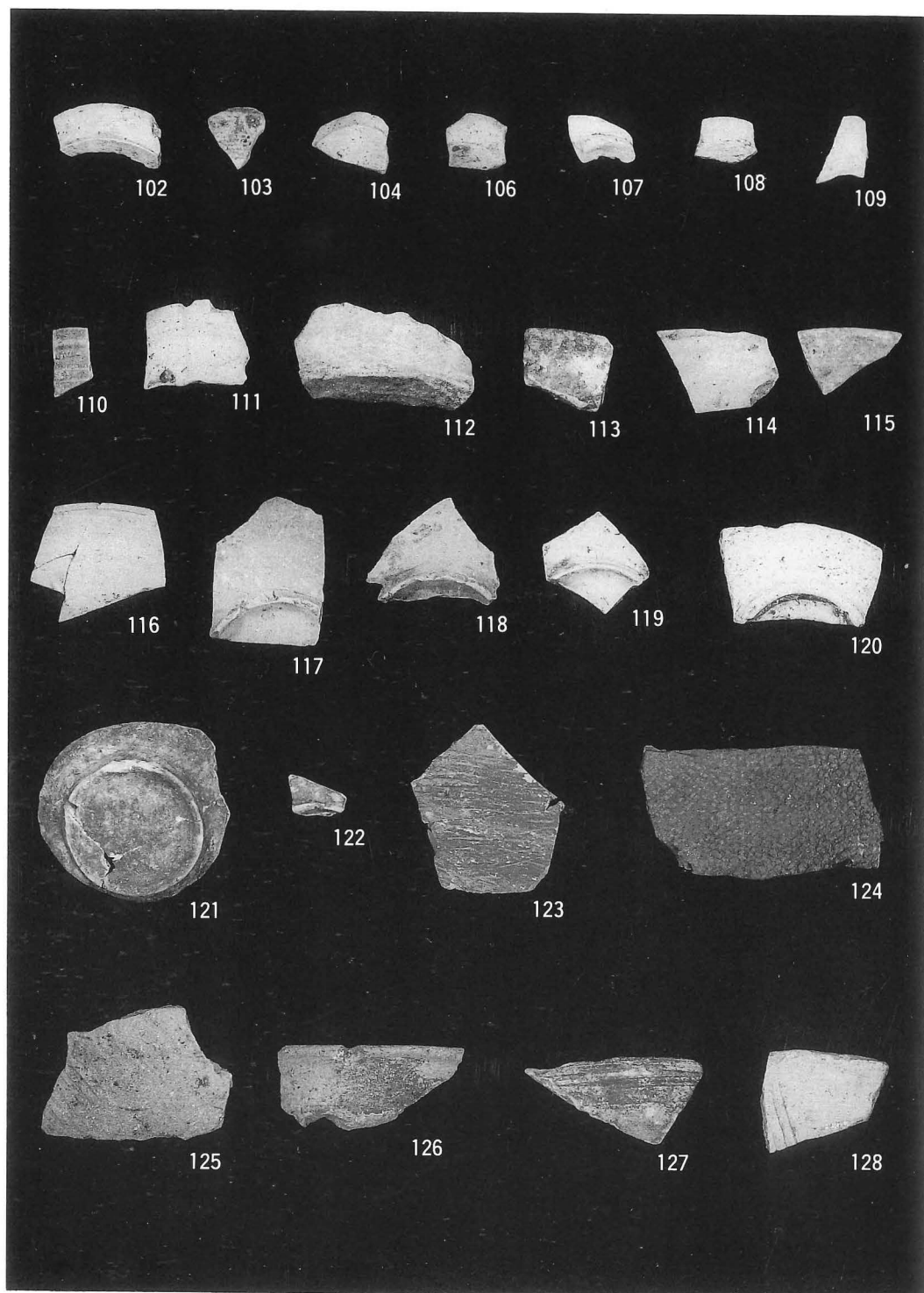
試掘調査における出土遺物



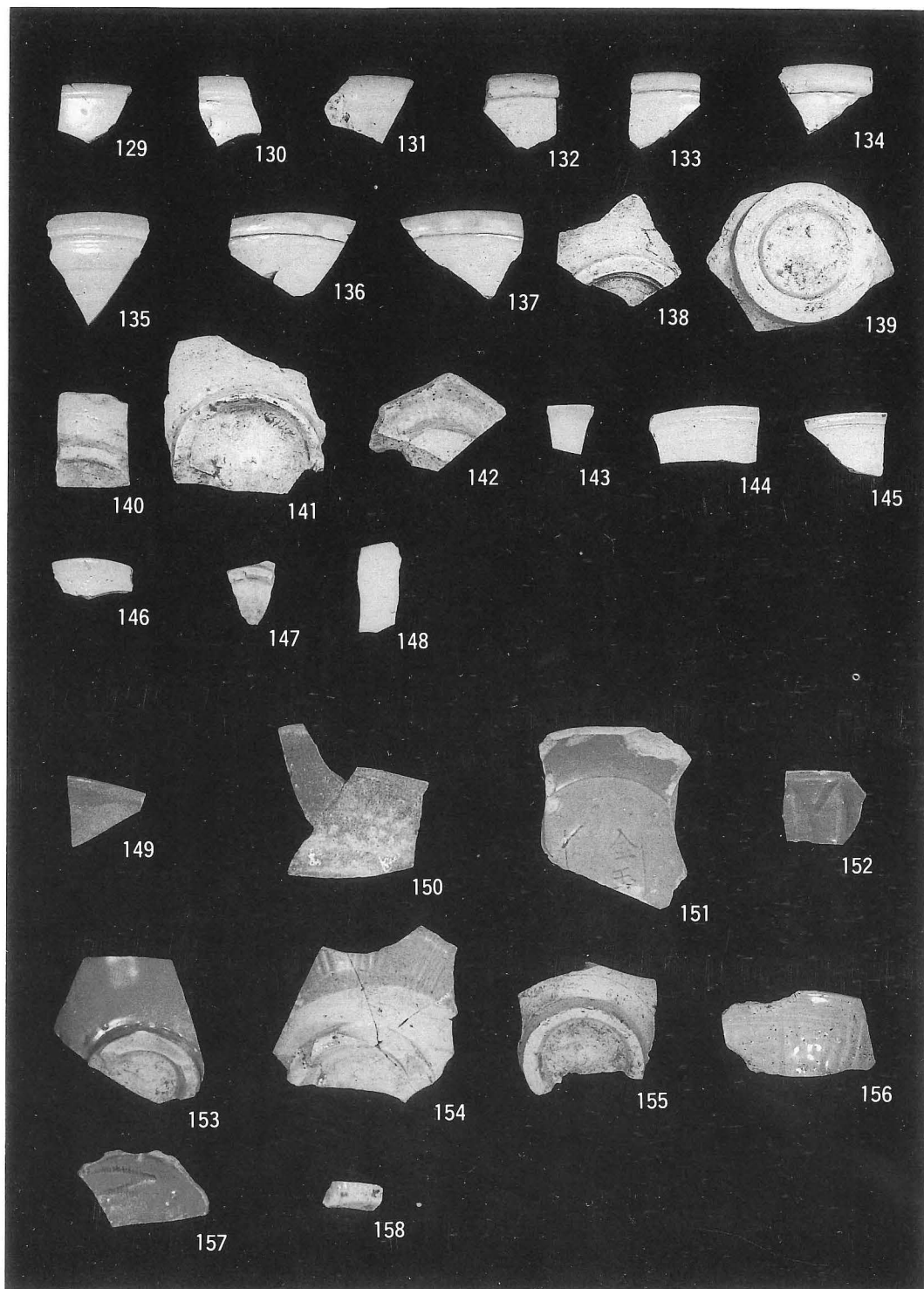
42区 8層の54水-9・10区 6層出土遺物



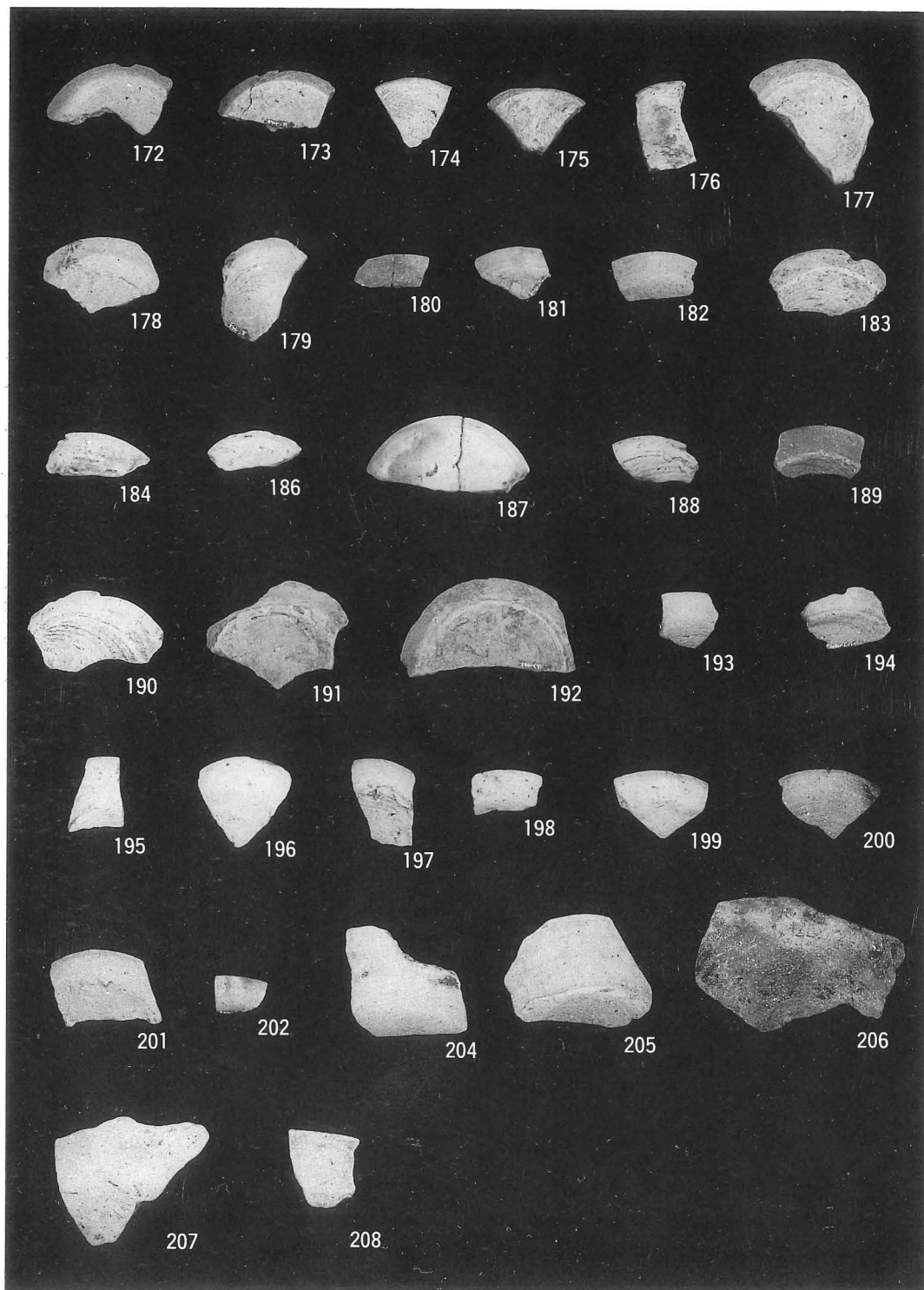
54水-13区 3層・14区 3層の出土遺物



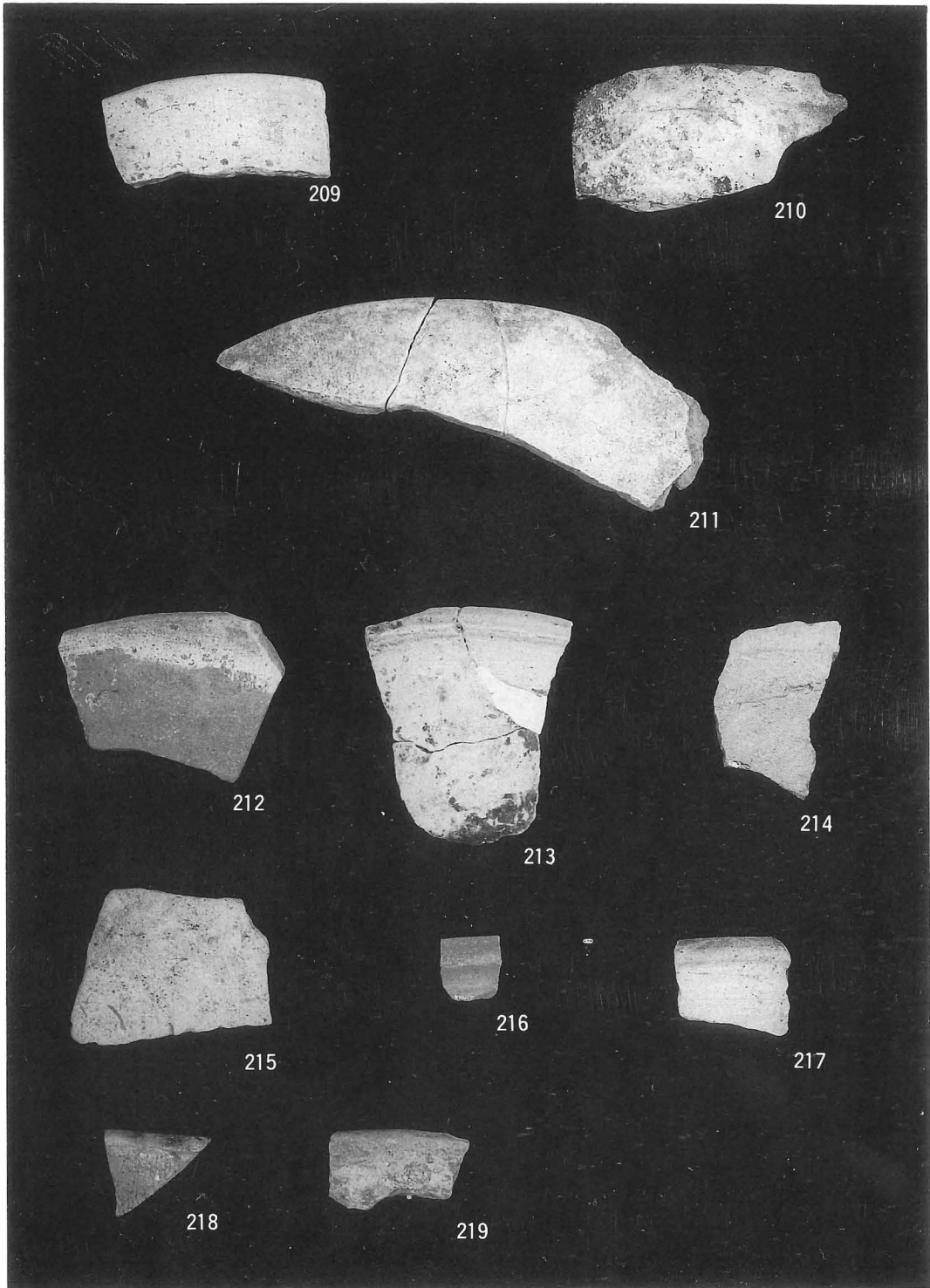
40区2層の出土遺物(1)



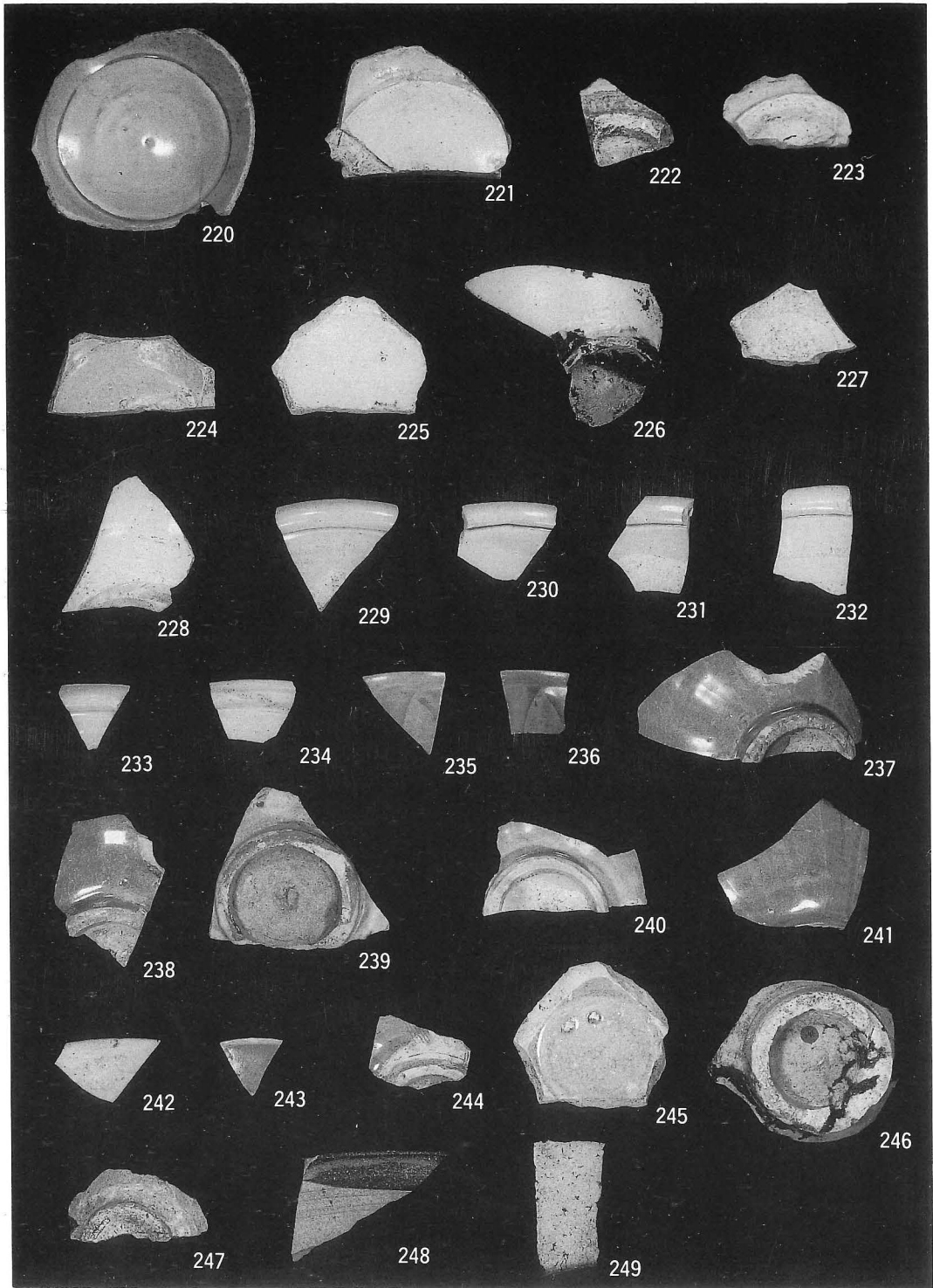
40区2層の出土遺物(2)



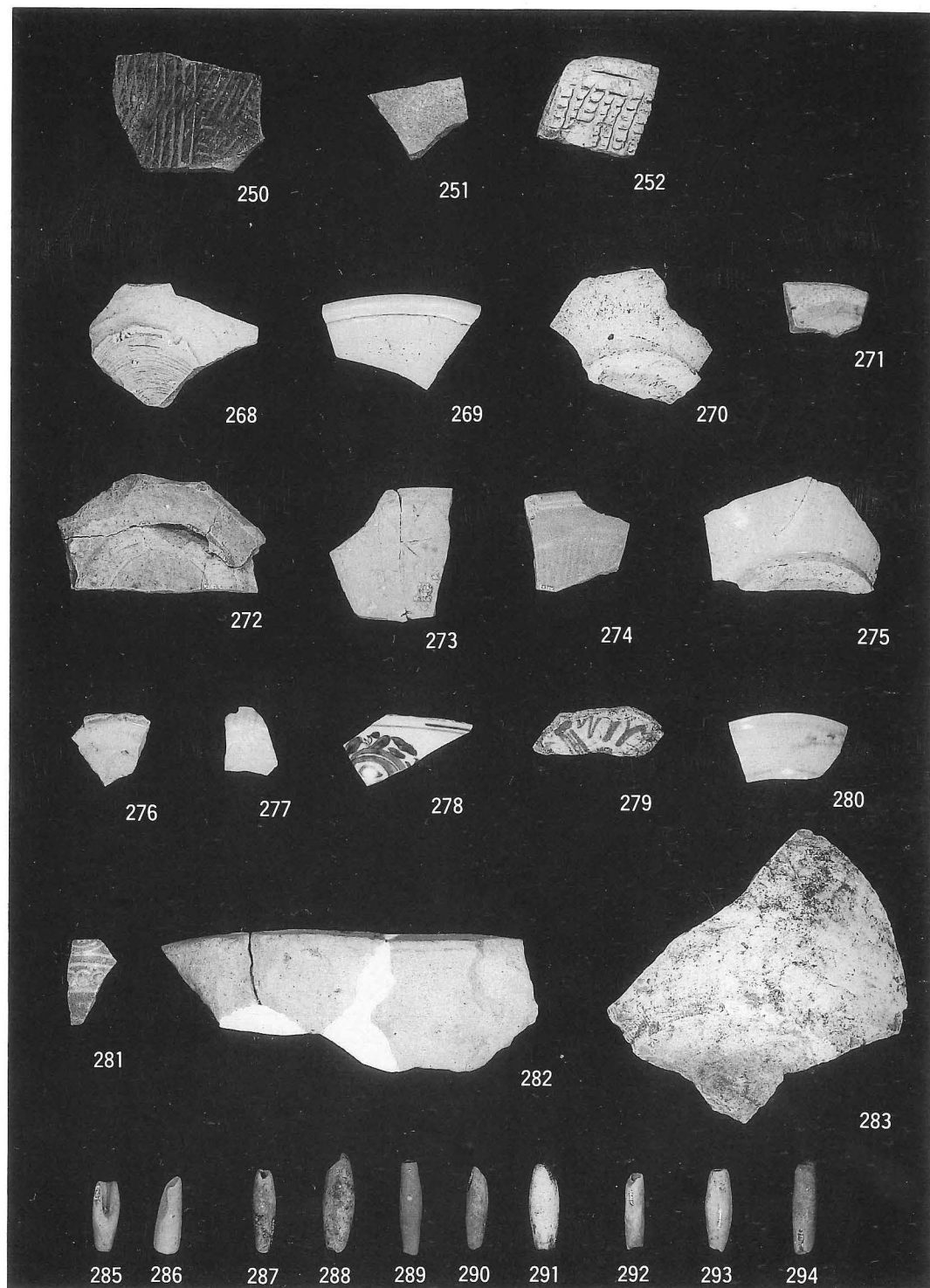
41-1区6層の出土遺物(1)



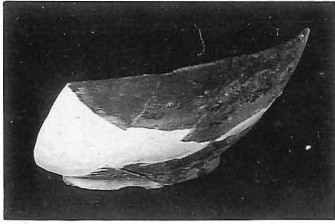
41-1区6層の出土遺物(2)



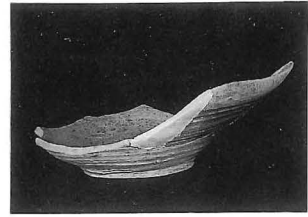
41-1区 6層の出土遺物(3)



41-1区6層と包含層外の出土遺物



39



55



48



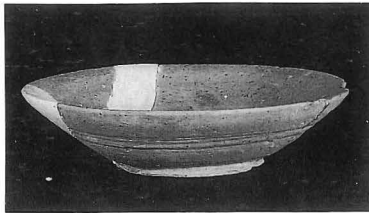
105



50



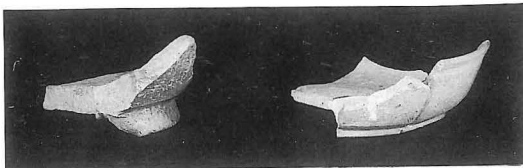
185



54



203

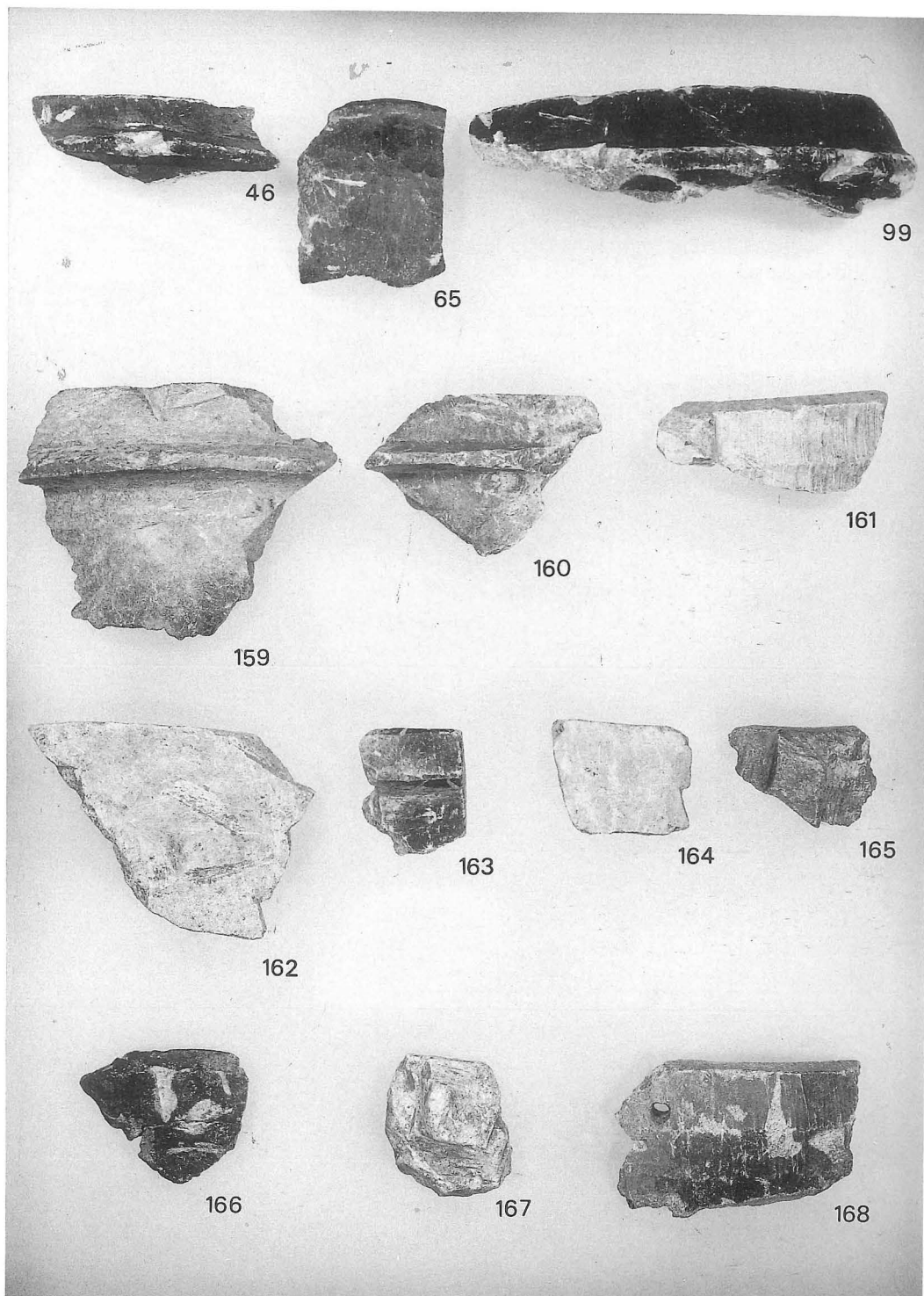


265

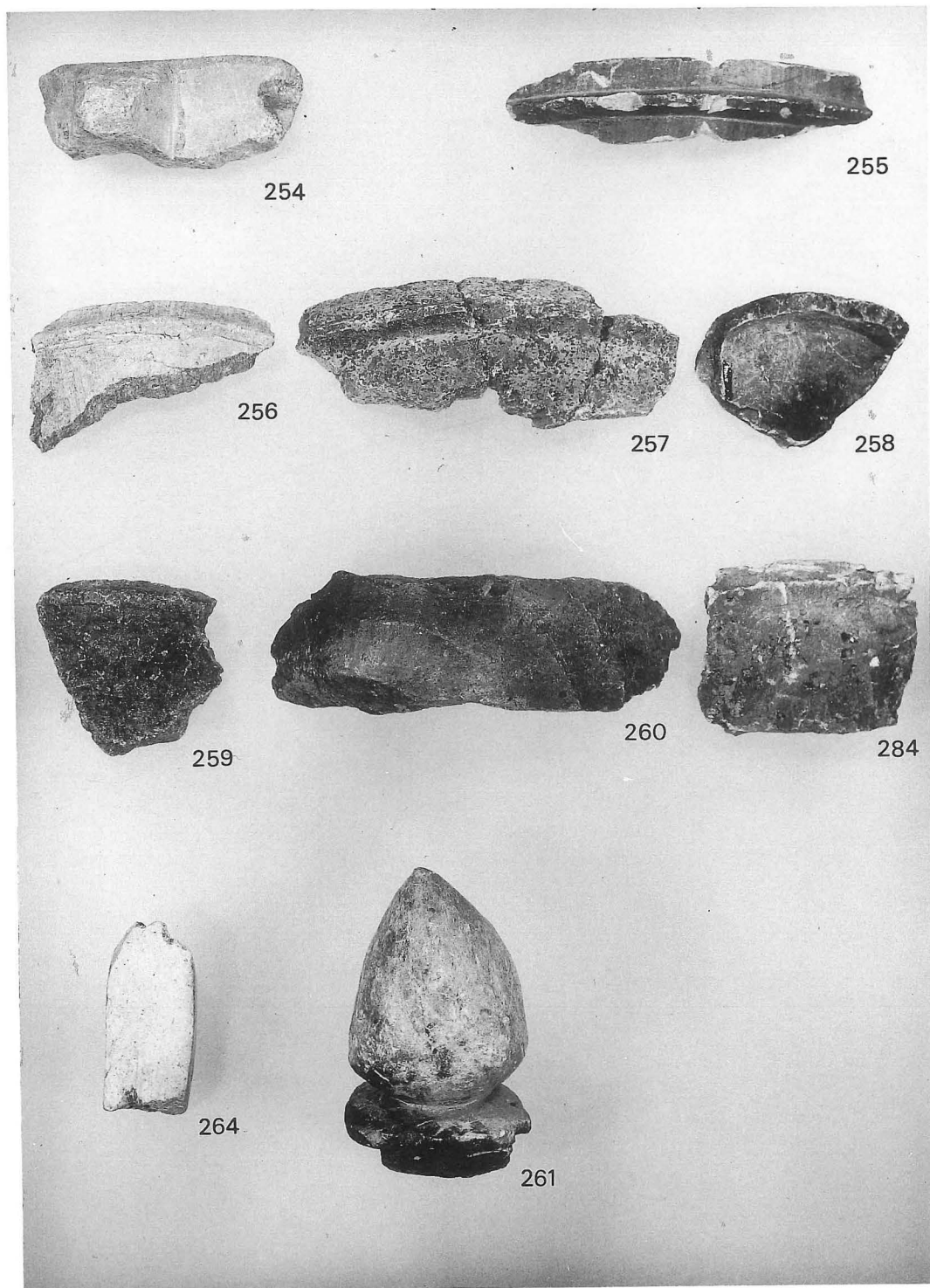
266



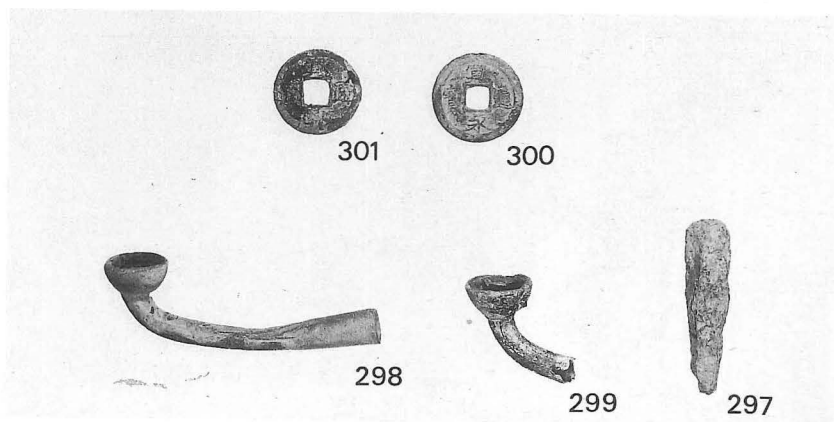
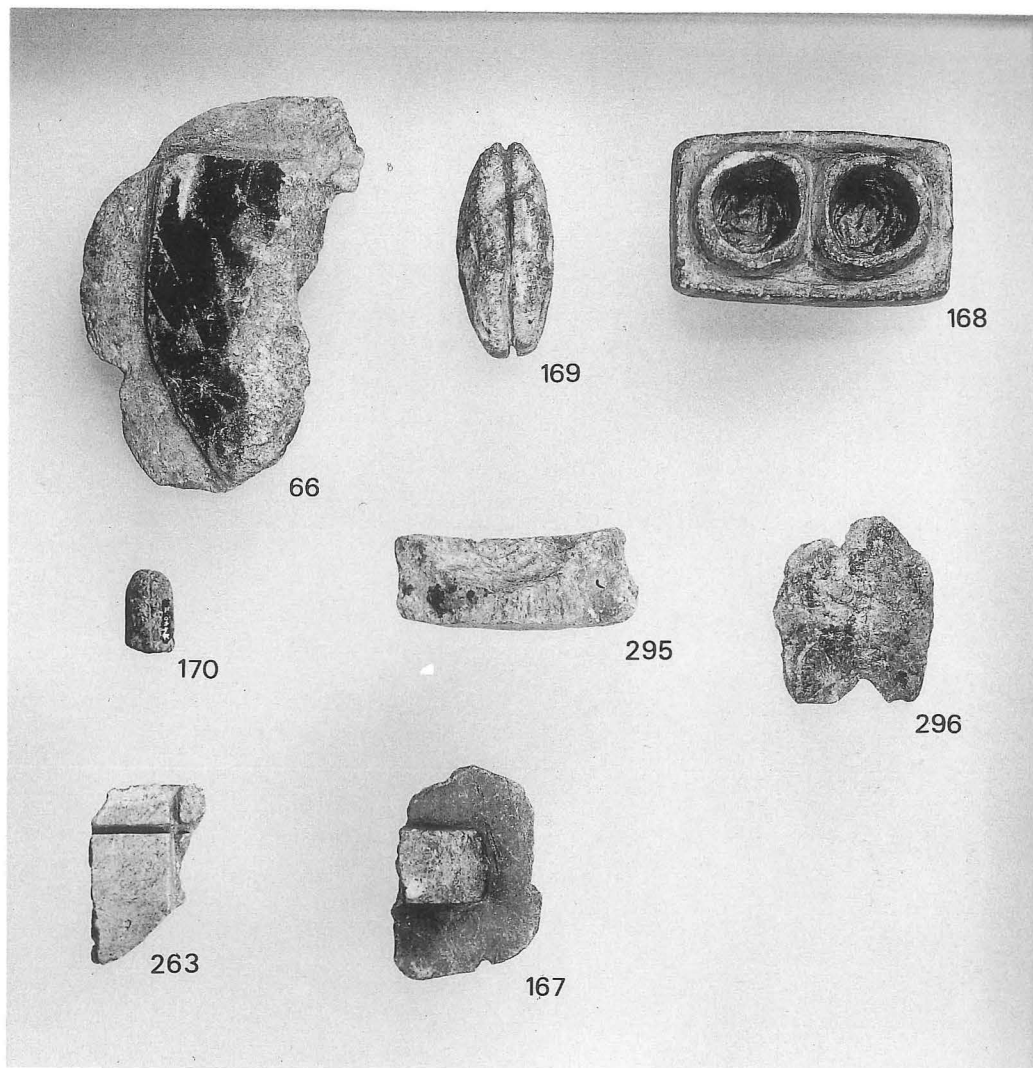
267

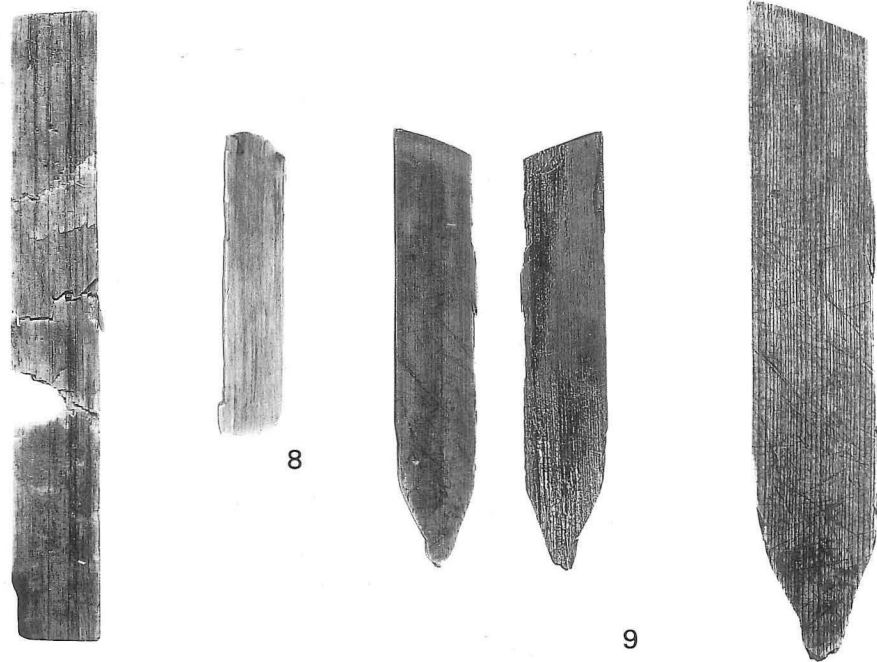
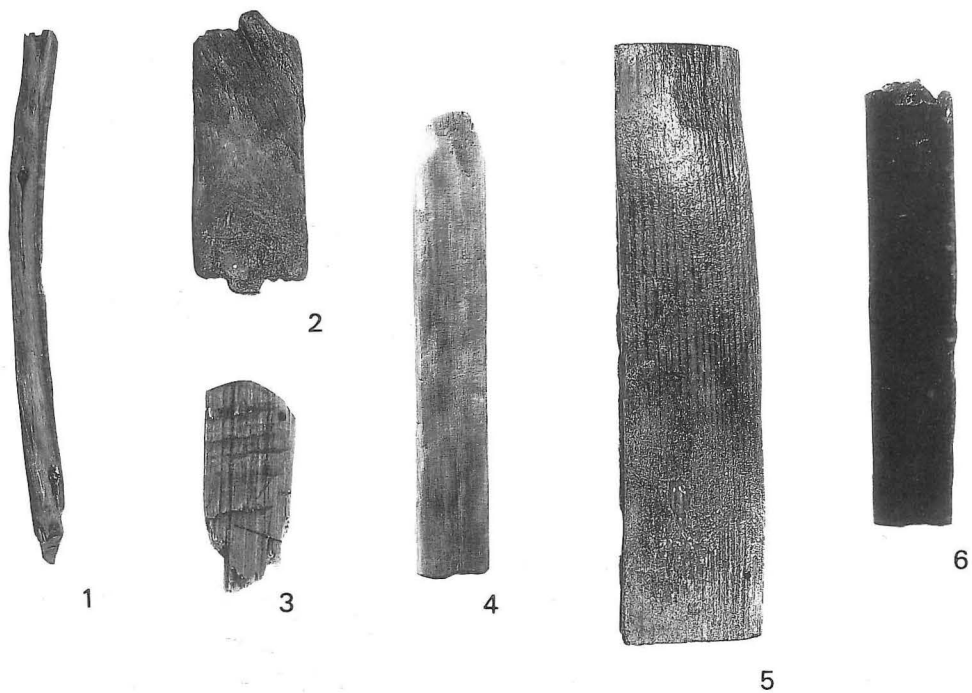


石鍋および滑石製品



石鍋・宝珠・砥石





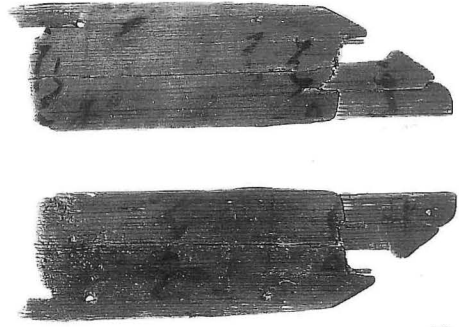
9の拡大写真
(無数の切痕が見える)



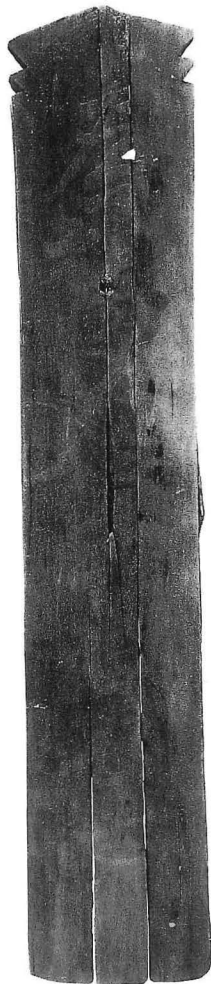
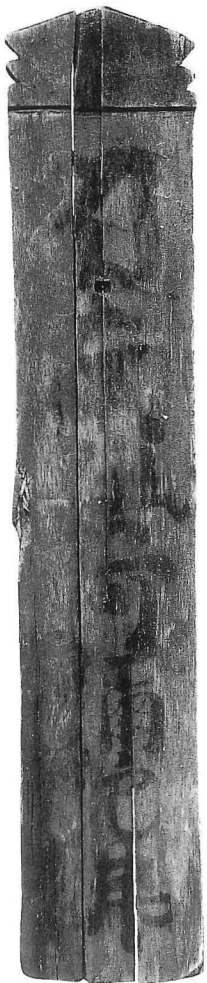
10



11



12



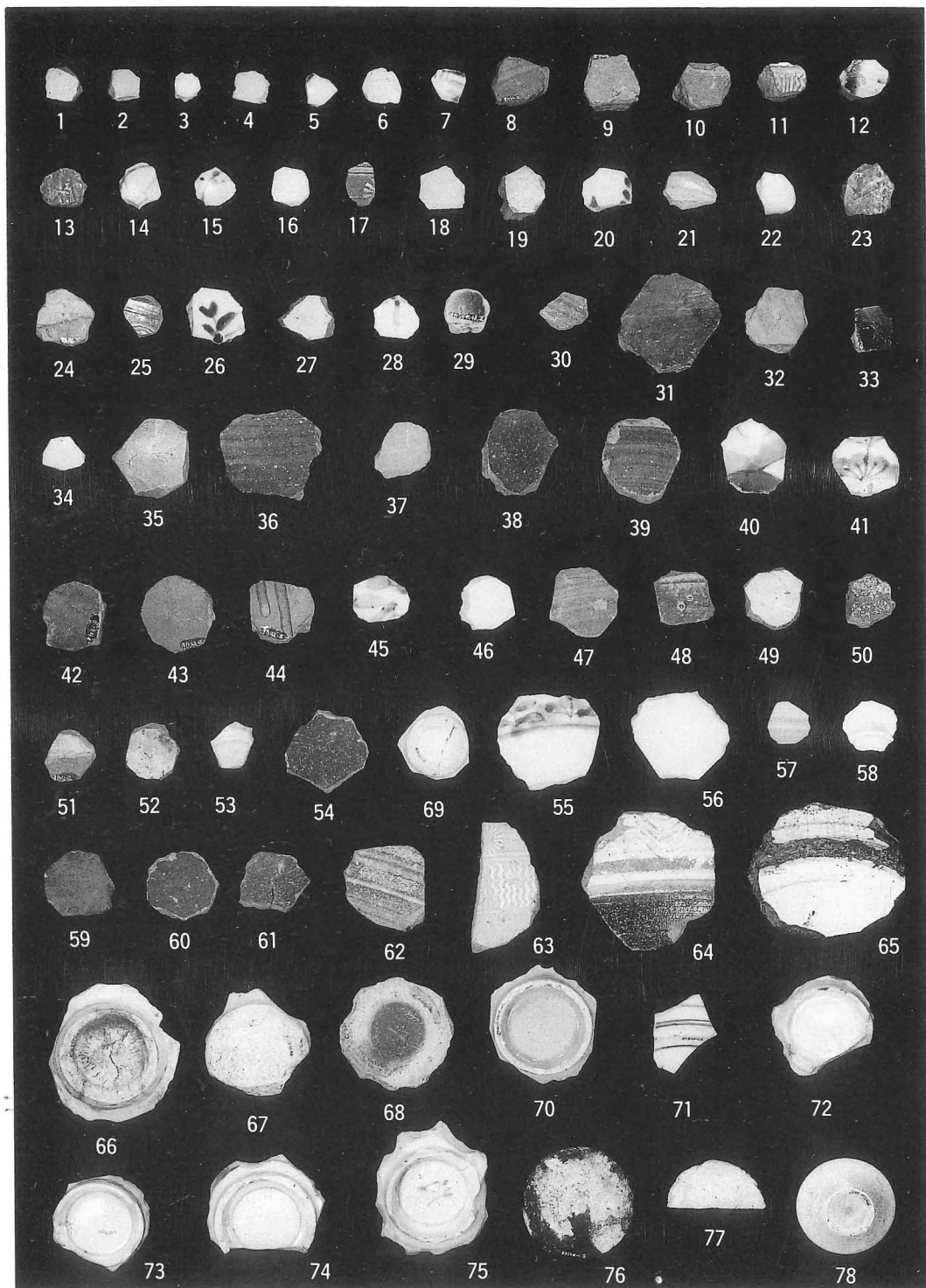
14



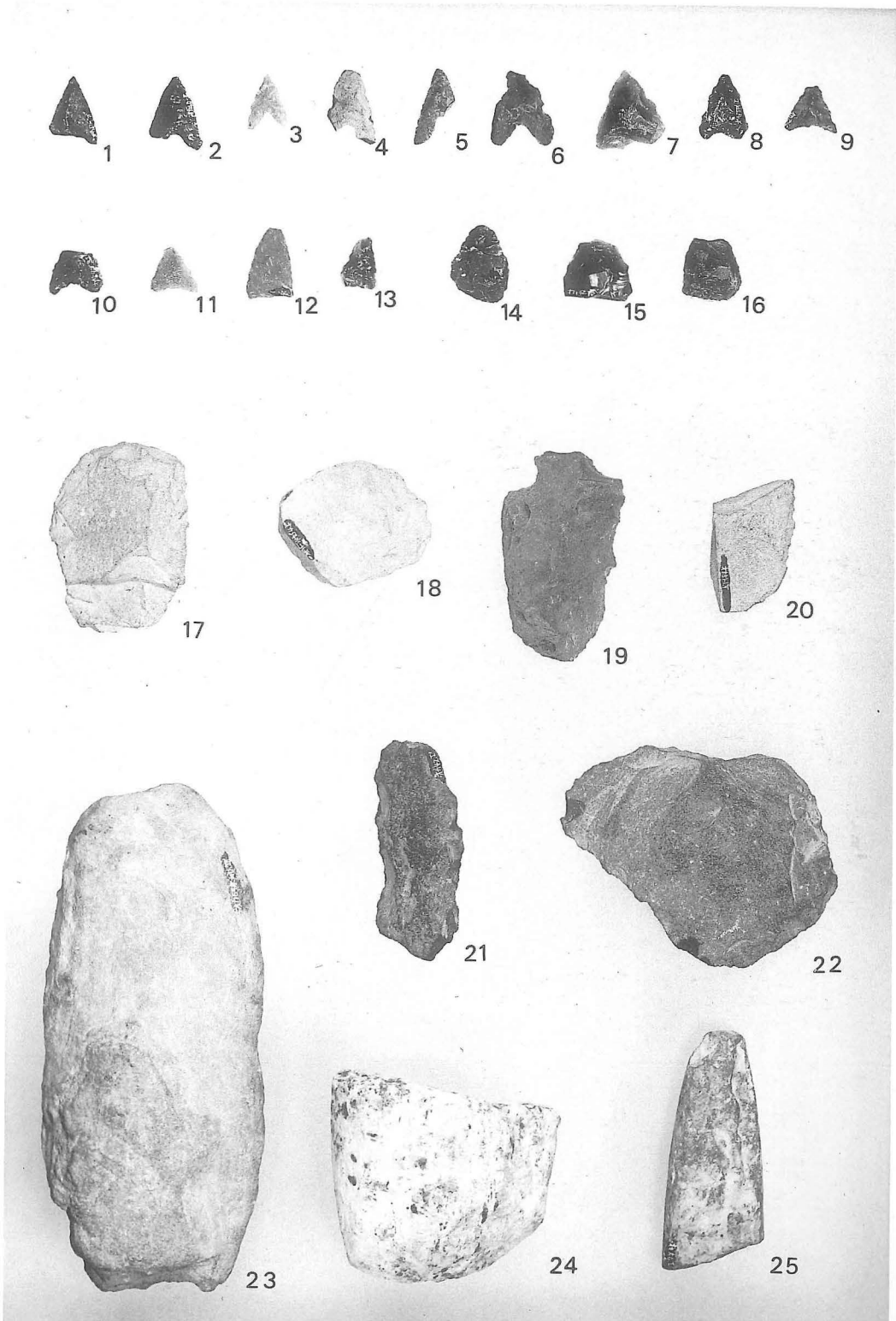
13



15



円盤状陶磁製品

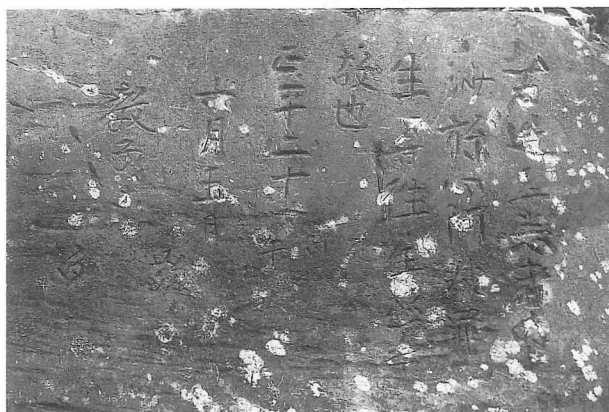


縄文時代の石器



水田石垣中の正平21年銘石塔

石塔銘文



正徳3年銘石塔

石塔銘文



岡遺跡出土の青温石製石塔



大門古墓地



蔵本郷だいじ喜々津前勝氏敷地



蔵本郷だいじ森祥一郎氏みかん畑



山田平墓地応永20年銘宝篋印塔



管無田郷平原石塔群



瀬戸郷片山清心寺跡富永氏宅裏

東彼杵町内所在の青温石製石塔(1)



せきょう庵音辻茂作氏みかん畑



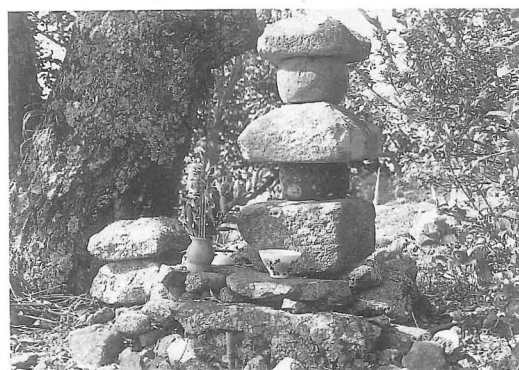
姫の墓五輪塔



中尾郷太の原大原真二氏宅前池の上



法音寺郷四郎丸小原勇氏みかん畑



小音琴郷江口八大龍王



口木田郷堂の本



彼杵中学校生徒の調査見学



彼杵中学校生徒の調査見学

調査風景



発掘調査風景

東彼杵町文化財調査報告書第2集

岡 遺 跡

昭和63年3月31日

発行 東彼杵町教育委員会
〒859-38 長崎県東彼杵町彼杵宿郷483番地

印刷 川口印刷株式会社
〒851-01 長崎市田中町1020-7